



ドラゴンボールスーパー

DRAGON BALL SUPER

スーパーヒーロー

SUPER HERO

原作・脚本・
キャラクターデザイン

鳥山明

JUMPj BOOKS

小説

日下部匡俊

COVER ILLUSTRATION:
東映アニメーション

この本は縦書きでレイアウトされています。
また、ご覧になる機種により、表示の差が認められることがあります。

©バード・スタジオ・集英社
©[2022 ドラゴンボール超]製作委員会





ガンマ1号

Dr.ヘドが生み出した人造人間
の1号機。忠誠心が強く冷静沈
黙な性格。

孫悟飯

悟空の長男。潜在能力
は父以上だが、闘いを
好まぬ心強い青年。

ベジータ

誇り高きサイヤ人の王
子。ライバルである悟
空と共に帰還中。

孫悟天

悟空の次男。マイ
ペースな性格だが、
兄同様高い潜在
能力を持つ。

トランクス

ベジータとブルマ
の息子。強い頃から
父に鍛えられて
いる。

人造人間18号

クリリンの妻で
Dr.ヘドに作られ
た人造人間。高
い戦闘力は存在。

クリリン

悟空の親友。地球
人としての戦闘力
はトップクラスで
現在は警察官。

孫悟空

地球育ちのサイヤ人。
さらなる強さを求め、
ワイスのもとで帰還中。

ガンマ2号

Dr.ヘドが生み出した人造人
間の2号機。1号機よりノリ
が強く挑発的。

パン

3歳になる孫悟飯の妹。
父と同時にピッコロ
のことを慕っている。

ピッコロ

かつて悟空の mentor だった
魔族のナメック星人。悟
飯やパンの伯父である。

Dr.ヘド

レッドリボン軍に
属した天才科学者。
新たな人造人
間を生み出す。

マゼンタ

レッドリボン軍の幹部。
レッドリボン軍高層
のために活動して
いる。

カーマイン

マゼンタの副官。
任務遂行のため
には手段を選ば
ない冷酷な男。

ブロリー

星の存在パワ
ーを持つサイヤ人。
善悪はあてつか
ない性格の持ち主。

ブルマ

ベジータの妻に
してトランクス
の母。天才科学
者としても有名。



げんさく せきほん
原作・脚本・
キャラクターデザイン

とりや まさきら
鳥山明

しょうげつ
小説
くさか べ まさとし
日下部匡俊

COVER ILLUSTRATION
とみえい
東映アニメーション

JUMPj BOOKS

ドラゴンボールスーパー

DRAGONBALL **超**
スーパー
SUPER HERO

CONTENTS

はなし
たもはじまりの話

じん そう じん げん しゅう げき
人造人間ガンマの襲撃

じん にゅう ぐん
替入！ レッドリボン軍

かく せい
ゴッコロ、覚醒する

ゆう かい
パン、誘拐される

じん こ ほん いか
系悟飯、怒る

め ざ きょう ぷ
目醒める恐怖

スーパーヒーロー！

★この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などには、いっさい関係ありません。

DRAGONBALL SUPER

序 章

またもはじまりの話



その昔、レッドリボン軍という悪の軍団があった。

当時、世界中の人々をおそれさせた彼らだったが、とつぜんあらわれた孫悟空^{そん ご ぐう}という少年の手によって壊滅^{かい めつ}させられてしまう。

そんななか、レッドリボン軍の科学者ドクター・ゲロは運よく難^{のが}を逃れていた。

孫悟空への復讐^{そう すい}に燃えるゲロは、先代総帥^{むす こ}レッドの息子マゼンタの援助をうけて強力な人造人間を開発し、悟空たちに戦^{いど}いを挑んだ。

ドクター・ゲロの作りだした人造人間は想像を超える力をもっていた。特に究極の生物兵器〈セル〉には、悟空たちもおおいに苦戦することになった。

それでもあと一歩というところで、セルは孫悟空の息子、孫悟飯^{そん ご はん やふ}に敗れてしまう。

だが、マゼンタはあきらめなかった。

みづか
自らの経営するレッド製薬を資金源として、ひそかに逆襲^{みづか}の機会をうかがっていたのだ。

そしてマゼンタはとうとう見つけた。

ドクター・ヘド。ドクター・ゲロの孫であり、祖父^{まさ おと}に優るとも劣らない天才科学者。

マゼンタはその才能を利用して、悟空たちへの復讐^{まさ}と世界征服の野望をはたそうとたくらむのだった……。

*

グレーのリムジンが走っている。

リムジン^{まち}は街はずれのレッド製薬にむかっていた。

そのリムジンにピッタリくっつくように一匹のハチが飛んでいる。

ビルのエントランス前で停車したリムジンから降りてきたのは、真っ赤なスーツを身につけた背の高い男だった。前髪^{は まき}をハデにかためたリーゼントヘアーが目をはく。

例のハチは、すこし離れた空中からそのようすをうかがっていた。

数分後、男はビルの最上階にある社長室にいた。

大きな部屋だった。奥の窓ぎわにはデスクがあって、そのデスクにふんぞりかえって、葉巻^{は まき}をくわえる人影があった。

みじかくかり込んだ髪の毛に口ヒゲ、おちくぼんだ目は小さくて細い。

わかりやすい悪人ヅラだった。紅色のスーツでキメているが、ジャラジャラとした鎖^{くさり}のようなネックレスをつけている。正直、あ

まり趣味はよくなかった。

その男が、手にした写真をめくりながらむずかしい顔をしている。

写真にはヒーローショーでサインをもらう背のひくい小太りの人影がうつっていた。

「これがドクター・ゲロの孫か？」

男の名はマゼンタ。ここレッド製薬の社長である。

マゼンタはうたがわしげな顔で、デスクのうえにほうった写真を見おろした。それから、レッドリボン軍のマークをかたどった灰皿で葉巻をもみ消し、デスクの向こうに立つハデな前髪の男に目をやる。

「ドクター・ヘド、二四歳です」

ちなみにこの男の名前はカーマイン。マゼンタの秘書兼運転手である。

デスクのうえのドクター・ヘドの資料のなかから、マゼンタは、白衣にどこかの研究所のものらしいタグをつけたヘドの写真を取りあげた。

「こいつも博士なのか。それとも医者か」

「どちらの資格ももっています」

答えながら、カーマインは胸ポケットから小さなリモコンをとりだす。

「ごらんください」

カーマインがリモコンのボタンを押す。マゼンタの正面にある、灰皿とおなじくレッドリボンマークの形をした大型スクリーンがパツと明るくなった。スクリーンの中でR・Rの文字が刻印されたレッドリボンマークが重々しく回転する。

コーヒーのマグカップを手に、マゼンタがむっつりと言う。

「おまえが作ったのか」

「はい」

答えたカーマインは、どこか得意げだ。

オープニングのムービーがおわると、スクリーンにはドクター・ゲロの家系図がうつしだされた。

「父親はドクター・ゲロの先妻の次男で、ヘドが小学生のときに両親はそろって事故で他界」

カーマインが説明をはじめる。

「ヘドは子どもにもかかわらず、その遺産でひとりぐらし……一四歳で博士号をとるほどの天才ですが」

画面の右端に笑顔をうかべたヘドの卒業写真がうかびあがった。

「その後はクセのつよい性格のせいかどこの研究室にもなじめず、残されたわずかな遺産で独自に研究をつづけているようです」

写真が研究所時代のヘドの顔になる。なるほど、卒業写真とは別人のようだった。

マゼンタはコーヒーに香辛料をいれながら、スプーンでスクリーンのヘドをさす。

「それは好都合じゃないか。さっそくこちらにとりこむんだ」

せわしくマグカップを口にはこんだマゼンタはうめき声をあげた。コーヒーにいれるシナモンの量をしくじったらしい。

マゼンタは顔をしかめてインターホンのボタンを押した。

「お茶をもってきてくれ」

「三か月おまちください」

スピーカーからの返事にかぶせるように、カーマインが言った。マゼンタがききかえす。

「お茶をか？」

「ちがいます」

カーマインはふたたびリモコンを操作した。画面がきりかわる。

スクリーンにうつったのは、上空からの第八刑務所の映像だった。

「ドクター・ヘッドは、現在刑務所に服役中ふく えきです」

「シツレイシマス」

ドアが開き、給仕ロボットきゆう しがお茶とせんべいをのせたトレイを手にはいつてきた。

マゼンタはカーマインを見る。

「服役中？ なにをしたんだ？」

「霊安所にしのびこんで死体を三体盗み、カンタンな人造人間加工をしてコンビニで働かせ、資金を得ていたようです」

スクリーンにはヘッドが作った人造人間たちがうつる。コンビニのなかを店員のユニフォームでギクシャクと動くようすは、あきらかにうさんくさかった。

「ものすごい天才のような、そうでもないような……」

マゼンタは微妙な顔でスクリーンを見あげた。そしてイスからおりる。

「どちらにしても、ドクター・ゲロとおなじく人造人間の技術は卓越たく えつしていそうだ」

その言葉とともに、マゼンタがすたすたと歩いてデスクの左端から姿をあらわした。

背の高さとデスクがほとんど一緒なのだ。

マゼンタは左手のせんべいをばりばりとかじりながら、なれたようすでデスクのすぐわきに置かれた台に飛び乗った。そこからでないと外が見えにくかったからだ。

そうして、右手に持った茶わんから湯気のたつお茶をぐいっとやった。

「ゲホッゲホッゲホッ」

ひとしきりせきこんだあと、ちょっとぼつのわるそうな顔でマゼンタがふりかえる。

「とっ、とにかく、ヤツの能力はレッドリボン軍の復活に不可欠だ！」

マゼンタはスクリーンのドクター・ヘッドに右手をつきだした。茶わんからお茶がこぼれる。

「うあちぢっ！」

*

その日、第八刑務所は騒然そう ぜんとしていた。

キャリーケースを手に出してきたのは、ずんぐりとした小柄こ がらな人影。

ぴっちりとした明るい紫色のスーツを着こみ、背中には黒いマント、手足に黄色いグローブとブーツ。首のうしろにはねのけたフードをかぶればいわゆるヒーローのコスチュームそのまんまという感じだったが、体型がすべてをだいなしにしている。

その男が刑務所の通用口をくぐったとたん、なかから罵声^{ばせい}が聞こえてきた。

「二度とくるな、パーカパーカ！」

「こーのうんこたれー！」

男は足をとめ、背後^{めし}の声の主たちをギリギリとふりかえった。

「な、なんだよ、こっち見るんじゃないよえ！ はやくあっちいけー」

ほとんど悲鳴に近い声とともに、ものが投げつけられる。それが身体^{からだ}にあたるのも気にせず、小太りの男は自分のキャリーケースをあけてごそごそとやりはじめた。

男が顔をあげると、その手のなかには手榴弾^{しゅうりゅうだん}があった。表情もかえずピンを引きぬいてうしろにむかってほうってから、なにごとにもなかったように歩きだす。

歩きながら男は左の手首に目をおとした。グローブのうえには、カウントダウンの数字が表示されていた——3、2、1。

ドーン!!

足もとからゆさぶられる衝撃とともに、刑務所の通用口がふきとんだ。近くにいた護送車^{ごそうしゃ}があおられてひっくりかえり、乗せられていた囚人^{しゅうじん}たちが外に転がりでてくる。

男の口もとに、ニヤリ^えと笑みがうかんだ。

彼こそドクター・ヘッド。三か月の刑期をおえ、たつたいま出所したところだった。

「ドクター・ヘッドだね。待っていたよ」

音もなくヘッドの横に近づくクルマがあった。レッド製薬のあのリムジンである。

開いた窓のなかから声をかけたのは、後部座席にすわるマゼンタだった。

運転席にはカーマインがいて、ヘッドに値ぶみするような視線をむけている。

ヘッドはちらとマゼンタたちに目をやって、そのまま無視するように歩きつづけた。

「これは失礼、わたしは——」

「レッド製薬の社長だろ？」

マゼンタの言葉をさえぎって、ヘッドは薄笑いをうかべて言う。

ようすをうかがっていたカーマインが、表情をこわばらせてその場をはなれようとする。

「おい！」

マゼンタが強い口調でうしろから運転席をけとばす。

カーマインははっとなって、ふたたびヘッドのそばにクルマをよせた。

「なぜ、わたしのことがわかったのかね？」

マゼンタの言葉に、ヘッドは小さく含み笑いをもらす。

「調べたんだよ」

「調べたとは？」

ヘッドはカーマインを横目で見た。

「運転しているあんた、このまえ刑務所の運動場にいたとき、ボクを偵察していたよね？」

カーマインの顔がかすかにしかめられる。気づいていたのか、というように。

「あやしいと思ってあとをつけさせたんだ」

「どうやって……？」

いぶかるカーマインをしりめに、ヘドは左手を前につきだし、それからポーズをつけて手首にむかって言った。

「ハチ丸、おいで！」

ヘドの頭のうえからかすかな羽音がきこえてくる。遠目にはただのハチにしか見えなかったが、それはまっすぐヘドのもとへとやってきて肩にとまった。

ヘドが左の手首を指で押すとグローブが変形して棒のようにうえにのびはじめる。二〇センチほどのびたところで、棒の途中から楕円形のスクリーンが広がった。

スクリーンをマゼンタたちにもけて見せる。そこには、ハチ丸の目がとらえているマゼンタとカーマインの姿がうつっていた。

ヘドは得意げに歯を見せて笑った。

「ハチを改造してつくった、サイボーグエージェントだよ」

ヘドの言葉に反応するように、ハチ丸はカクカクとした動きで首をかしげてみせる。

「あんたをつけていたらレッド製薬の社長室にはいり、ボクのことを報告した」

「驚いたな。でも、キミを調べていた理由まではわからないだろ？」

「だいたい想像はつくかな……ちょっとききとりにくかったけど」

ヘドはスクリーンを閉じながらつぶけた。

「かすかに『レッドリボン』ってきこえていたからね」

マゼンタの顔に驚きがひろがった。ヘドにむける目が油断のないものにかわる。

「……まあ、とりあえずクルマに乗りたまえ。キミを家におくりがてら話そうじゃないか」

言いながらマゼンタがとりだしたのは、紙コップにはいったジュースだった。それをヘドに見せびらかすように身を乗りだす。

関心がなさそうにしながらも、ヘドの目はしっかりとマゼンタの手のなかのジュースへとむけられていた。口もとからヨダレがこぼれる。

マゼンタはニヤリとなるのをおさえて、リムジンのドアを開いた。

走りだしたリムジンのなかで、マゼンタはとなりでストローをくわえるヘドにたずねた。

「刑務所ぐらしはどうだったかね？ ほかの囚人にいじめられたりしなかったか？」

ヘドはストローを口からはなし、薄笑いをうかべる。

「はいったころはそんなヤツもいたけど、みんななぜか謎の死をとげていなくなったよ」

「そ、そうか……」

とんでもないことをサリとこたえるヘドに、マゼンタはかるく引いていた。

「おじいさんのドクター・ゲロは残念だった」

ヘドはマゼンタをじっと見てから、すぐにドリンクに注意をもどした。

「正直、どうでもいいね。あったことさえなかったんだ」

マゼンタはヘドを見た。

「しかし奇遇なことに、キミもおじいさんとおなじく人造人間の研究に熱心なようだね」

ヘドはジュースの空になった紙コップから、フタをはずしながらこたえた。

「最強の人造人間の研究をね」

それから音をたてて氷を口にほうりこみ、バリバリとかじりはじめる。

「ハハハハ、すばらしい。それこそわたしがのぞむものだ」

マゼンタはそう言って、遠くを見る目になった。

「天才をうしなつたのは痛手だったよ……父のレッドが亡^なくなったあと、わたしが研究資金をだしていたんだがね」

氷をかみ砕^{くだ}きおわったヘドが、ニヤリとしてマゼンタを横目で見た。

「天才ドクター・ゲロにかわってこんどは超天才のドクター・ヘドをみつけたってわけだ」

「そういうこと……」

マゼンタが手もとのスイッチを押す。ふたりの間の背もたれが前にひらいて、そこにクリームをはさんだ黒いクッキーのケースがせりだしてきた。

「どうかね、手をかしてくれないか？ 研究費用や設備はキミののぞみのまま」

マゼンタは、ケースからクッキーを三枚とりあげてみせる。

「報酬は一体につき三億はらおう！」

ヘドはクッキーを一枚つまみあげて言った。

「うーん……こまったな」

「おや、なにがこまるんだね？」

「世間にははられていないけど、レッド製薬はレッドリボン軍のおモテの顔であり資金源だったでしょ？」

ヘドはクッキーを口にほうりこんだ。

「まだこどもだったころ、レッドリボン軍の影響をうけた祖父のこと、両親はきらっていたからね」

マゼンタはすこしおどろいた顔になった。

「ほう、そこまでしているとは思わなかったな」

さらにクッキーを手にとりながら、ヘドがつづける。

「それにボクは強くてカッコいいスーパーヒーローのマニアなんだ。レッドリボン軍の目的が、むかしとおなじく世界征服だとしたら、スーパーヒーローとは宿敵^{しゆくてき}同士じゃないか」

「はっはっは、おもしろい男だ」

マゼンタは笑い声をあげた。

「世界征服に見えるかもしれないが、わたしの真の目的は危険な連中やたてつく連中^{いつ そう}を一掃し、社会に忠実で平和な世界を築きあげることだよ」

リムジンがスピードをおとした。前のクルマがのろのろと運転しているのだ。

道をゆずろうとしないクルマをにらみつけ、カーマインは一気に抜きにかかった。

DRAGONBALL SUPER



「ある意味、正義の味方だ」

マゼンタの言葉と同時にカーマインはアクセルをふみこんだ。ほとんどぶつかりそうな距離で急加速したリムジンが追い抜いていく。おどろいた運転手がハンドルを切りそこなってそのクルマは悲鳴のようにタイヤを鳴らしてスピンしながら遠ざかっていった。

ヘドはそれを見やって答えた。

「ようするに、力づくで自分の思いどおりの世界にしたいってことかなあ……まあ権力に興味のないボクにとって、研究以外は どうでもいいことなんだけどね」

ヘドは新しいクッキーをとろうとケースに手をのばしたが、すでに空^{から}になっていた。

「あまり気がすまないんだったら、一体につき」

マゼンタが操作すると、ケースのなかにクッキーが補充された。

「一〇億というのはどうかね？」

マゼンタはそう言いながら、ケースのクッキーを一〇枚手にとってひろげてみせる。

ヘドはクッキーに目をやりながら、つぶやくように言った。

^{ことわ}
「断れないよね……」

「たぶん」

カーマインだった。^{ふところ} 懐^{けんじゆう}から拳銃をぬいてシートごしにつきつけようとする。

それをマゼンタがことを荒立てるなど、ちいさく首をふりながら手で制した。

「じゃあまあしょうがないか」

ヘドはあきらめたように頭上に目をやった。

「そう、それがキミにとっても最善の方法だよ」

笑うマゼンタに、ヘドは平然とクッキーに手をのばしながら言う。

「言っておくけど、銃でおどされたからじゃないよ」

ヘドは冷たい笑いをうかべた。

「ボクの皮膚^{ひふ}は、あるていどの衝撃にたえられるように特殊な薬を注射してあるからね。それに——」

ヘドが運転席を見る。そこにはシートの裏にとりつくハチ丸の姿があった。

「このハチ丸の毒針は恐ろしいよー。たとえ人造人間でも、人間の部分が残っていたらイチコロじゃないかな」

カーマインの顔が驚きにゆがむ。気がつくとハチ丸が肩にのっていた。あわてて手ではらうが、ハチ丸はすばやくとびあがってその手をかわす。

とたん、リムジンはコントロールをうしなってスピンしはじめた。

^{えんしんりよく}
遠心力でシートにおしつけられながら、ヘドはなおも言う。

「ボクが協力する気になったのは、莫大^{ばくだい}な予算をつかって史上最高の人造人間をつくりだすことに魅力を感じたからさ！ もういちど言っておくけど、マゼンタ社長の野望には興味がない、いいね？」

これまたシートにひっくりかえったマヌケな格好^{かつこう}で、マゼンタは真顔^{まがお}でかえた。

「結構だ！」

*

リムジンは都市部をはなれ、^{ひとけ}人気のない荒野にはいていた。

ヘドはひらいた窓から右手をつきだし、手のひらで風をうけていた。風をうけながら、ちょっとモミモミしたりしている。

「……で、最大の敵の目標は？」

ヘドは窓の外に手をつきだしたままマゼンタを見た。

「セルをたおした連中だ」

「それって、ミスター・サタンじゃ」

マゼンタはきっぱりとかぶりをふる。

「いやちがう。ヤツも一味だが、われわれの調査ではカプセルコーポレーションのブルマを軸にした^{じく}恐ろしい秘密組織だよ」

「カプセルコーポレーション？」

リムジンの前方にトンネルがせまってきた。

「世界一の富豪の？ 悪いウサなんかぜんぜんきかないけど」

「いやいや、カプセルコーポレーションの本社に空を飛ぶ人間が出入りしているという目撃者は何人もいる。われわれの調査では、おそらく宇宙人だよ」

マゼンタの言葉に、ヘドはすこしだけ驚いた顔をした。

「宇宙人？」

マゼンタはうなずいた。

「ああ。考えてもみたまえ。あの画期的なカプセルシステムや宇宙船なんて、宇宙人の技術なしでできたと思うかね？」

リムジンはトンネルを抜けた。あたりは山道になってきりたったガケがつづいている。

「宇宙人がカプセルコーポレーションを利用して地球をのっとりたくらんでいるんだ」

ヘドはうたがわしげだった。

「とっぴょうしもない話だな」

「そう言うと思ったよ。これを見たまえ」

マゼンタは内ポケットからスマホをとりだした。そこにはどこかの岩山で、むかいあう数人の人影がうつっていた。

「数年前のものだ」

背中をむけて立っているのは剣を背負い、全身が金色の光につつまれた青年。

それに対しているのは、メカを全身に装着^{そうちやく}したシッポのある小柄な人影だった。

「こんなヤツがいると思うかね？ 宇宙人だよ。宇宙人同士が、この地球で戦っていたんだ。おそらく、地球のとりあいだね」

メカボディの人影が相手にむかって手のひらをつきだした。とたん、青年のいた場所がふきとんだ。

だが、青年はいつのまにかとおくはなれた岩山のうえにいた。

こんどは、メカボディのいた場所が爆発した。それをのがれて空中に舞いあがったところに、剣を抜いた青年が斬りかかる。メカボディの相手は一瞬でバラバラに切り裂かれ、さらに青年のつきだした手からはなれた光のなかで消滅していった。

そこで映像はとぎれていた。

ヘドは画面に息がかかりそうなほど顔をちかづけ、信じられない面持ちで見つめる。^{おもも}

「だがそうだとしたら、なんでブルマの一味は^{いちみ}一気に地球をのっとりしないんだ？」

マゼンタはポケットにスマホをもどしながらこたえた。

「とうぜん地球人を労働力にとりこみたいからだろ。地球を完全な楽園にしあげたら、一気に人間をかたづけて仲間の宇宙人をよびよせるつもりなんだ」

ヘドはまだうたがわしげだったが、かんがえこんだままなにも言わなかった。

「セルはキミの祖父がつくりだした最高傑作だ。宇宙人の秘密組織をつかい、世界中の富をほしいままにするカプセルコーポレーションに^{いっし}一矢むくいようとセルを送りこんだのだが、かえりうちにあってしまったんだ」

そこでマゼンタはかなしげにうつむき、かぶりをふる。

「そして、人造人間17号と18号にもうらぎられ、ヤツらにとりこまれてしまった……」

ヘドは腕ぐみをしてかんがえこんだ。

「敵はかなりてごわそうだな」

「ああ。組織のなかには、あの恐ろしい魔人ブウやピッコロ大魔王もいる」

「有名なブルマ博士も宇宙人なのか？」

ヘドの問いに、マゼンタがうなずきかえす。

「おそらく」

とつぜん、車内に勇壮なマーチがながれはじめた。雰囲気を感じたカーマインがかけたのだった。音楽の効果で、その場の全員の気分がアがる。

うえのクッキーをはがしてクリームをすくいながら、ヘドがシリアス顔で言った。

「ヒーローの出番だな」

マゼンタがクッキーをケースからひとつつまんでうなずく。

「そういうことだ。ヤツらをたおせるような人造人間をつくりだす自信はあるかね？」

ヘドはそのクッキーをマゼンタからとりあげて答えた。

「くだらない質問だな」

不敵な笑みをうかべ、ヘドは首のうしろのフードに手をかけ、頭にかぶった。

「たったいま、ボクがめざすのは宇宙で最強の人造人間にかわったんだよ」

「おおっ」

身を乗りだすマゼンタに、ヘドはかぶったフードをさしてニヤリとなる。

「カッコいいだろ」

「あ、ああ……」

マゼンタはちょっと返事にこまってから、ごまかすように勢いをつけて叫んだ。

「よし！ レッドリボン軍の復活は近いぞ！」

「おーっ！」

ヘドとマゼンタの声をひびかせながら、リムジンは行く手にあらわれた巨大なクレーターへとひたはしった。

DRAGONBALL SUPER



そのいち
其之一

じんそうにんげん しゅうげき
人造人間ガンマの襲撃





その湖は、けわしい岩山のただなかにあった。

湖の岸辺を、人間ばなれしたはやさでちいさな女の子が走っている。

名前はパン。^{そん ご はん}孫悟飯の娘である。

そのおっぱ頭の幼い女の子が、^{だん がん}弾丸のような速度でまっすぐつっこんでくる。

パンのむかう先に立っていたのは、^{はだ}緑色の肌にとがった耳をもつ大きな人影だった。

ピッコロである。

彼はいま、パンにせがまれて^{けい こ}稽古をつけているところなのだった。

ピッコロの前でパンは両手を地面につき、おおきく宙に舞いあがった。そのままピッコロの頭上をこえて背後の^{たち き}立木に飛びこんでいく。

葉のなかに身を隠し、パンはすばやく動きまわった。だが、見えないはずのパンの位置をピッコロは正確に追っていた。

パンはその木から飛びだし、ちかくの岩を足場にべつ^けの木の幹に飛びうつってさらにそれを蹴り、ピッコロの目の前に着地する。

腕を組んだまま、ピッコロがパンにむけてまわし蹴りをはなつ。

それをパンは背をそらすようにしてかわした。

通りすぎる^{あし}脚の下から、ピッコロにむけてにと笑いかける。同時に、その脚に手をかけ、鉄棒のようにくるとまわってピッコロにむかって飛びげりをはなった。

「だあーっ」

「！」

^{ゆ だん}油断を認めざるをえなかった。ピッコロは短く舌打ちをして、組んでいた腕をとく。

攻撃をうけながされ、ふっ飛ばされたパンがちかくの岩につっこんだ。

たちこめる^{つち けむり}土煙のなか、ホコリまみれになったパンが顔をしかめて^{からだ}身体をおこした。

「大丈夫か？」

内心では心配しながら、ピッコロは無表情をよそおってそう声をかけた。

「へいきへいき」

パンはにっこりと笑った。それを見てピッコロがうなずく。

「よし、けさはここまでだ」

パンの^{めん どう}面倒を見るようになってそれなりになる。さすがは孫悟飯の子どもで、この幼さでピッコロも驚くほどの才能を見せて

いた。いまでも腕は使わないつもりだったのだが。

それからふたりは、木陰^{こかげ}の岩のうゑに腰かけて休憩をとった。

ピッコロはパンのくれたミネラルウォーターを飲みながら、しずかに見おろして言う。

「なかなかいいぞ。悟飯……というかおまえの父親よりもスジがいいくらいだ」

パンはボトルを口からはなしてピッコロをちらと見た。そうして岩からひよとりと、タタタッとむこうに走っていく。

「だったら手から飛びだす気功波^{きこうは}とか教えてよ。悟天^{ごてん}くんやトランクスくんみたいに」

パンはピッコロをふりかえり、手首をあわせて手のひらを前につきだすポーズをとった。

「言ったはずだ。そういうのは基本^{かん べき}が完璧にできてからだ」と

不満げな顔のパンに、ピッコロはあきれ声でこうつけたした。

「まだ空も飛べんくせに」

「むずかしいんだよー」

だだっこのように——年齢を考えればむしろそれがあたりまえなのだが——かえすパンに、ピッコロは言った。

「むずかしいのは当然だ。やってみろ」

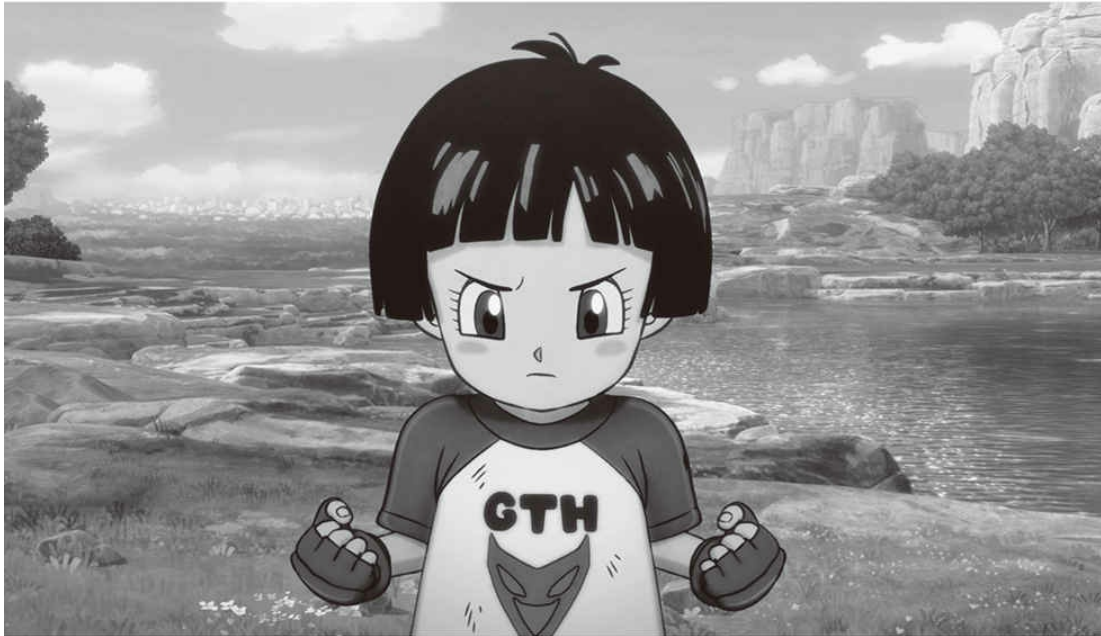
パンは不満顔のまま両足を肩幅に開いた。両拳^{こぶし}を腰のあたりまで引いてかまえをとり、顔をうつむかせて集中しようとする。

と、パンは構えをといてちいさく横に動いた。立ち位置がびみょうに気になるらしい。

パンはピッコロにてれ笑いをむけ、げげんな顔をされながらもうちど構えにはいった。

「ムッ……」

DRAGONBALL SUPER



ふわりと髪の毛がもちあがり、足もとの小石が重さをなくしたようにうきあがる。パンを中心に風が渦^{うず}を巻くかのように、土煙が舞いあがった。

「力^{りき}むな、願え。そうすれば気がコントロールしてくれる」

ピッコロの言葉にパンは目をとじ、さらにふかく集中した。小石がさらに高く舞いあがり、髪の毛がさかだつ。

ピリピリと空気がふるえ、ちいさな身体がふわりとうきあがった……ように見えた。

「はあ、ダメだ」

宙にうかんでいた小石がバラバラと落下する。パンはむしろ身体が重くなったかのようにがっくりと肩をおとし、息をついていた。

「ふん、いそぐこともないだろう。まだ三歳だ、時間はたっぷりある」

すごすごとどってくるパンを見やりながら、ピッコロははげますようにつぶけた。

「それにおまえもサイヤ人の血がながれている。いちどコツをつかんでしまえば簡単だ」

パンはぼんやりとした顔で、足を投げだすようにして岩に腰かけていた。それからヒザをかかえ、なにかを思いだしたようにピッコロを見る。

「ねえ、ピッコロさん」

「なんだ？」

「パパって、その気になったらじいちゃんよりつよいてホント？」

「じいちゃん？ 悟空^{こくう}のことか……ああ、ほんとうだ」

ピッコロはうなずいてから、もの思いにふけるように遠くを見る目になった。

「いまはどうだかわからんがな」

パンはこたえるピッコロの顔をじっと見てから、パッと岩から飛びおりた。

「パパが戦ってるとこ見たことないけど」

「戦う必要がないからだろう。そのときがくれば戦うさ」

パンはピッコロの言葉に納得していないようすだった。

「もう帰れ。遅刻するぞ」

ピッコロはたちあがると、パンにそう声をかけた。

「じゃ、幼稚園がおわったらまたね」

ピッコロはしずかにうなづく。

パンはおいてあったリュックを背^せ負^おい、ピッコロをふりかえって手を振った。それから帰り道の方にむきなおり、かけっこのスタートの姿勢をとった。

ドカン！

なにか爆発したかのような音とともに、猛然^{もうぜん}と土煙をたててパンがかけだしていった。

あっというまに見えなくなるパンの姿を、ピッコロはもの思わしげに見送るのだった。



ピッコロは円形の大きな一枚岩のうえにいた。

意識を集中し、自分をのせたままそれをうかびあがらせている。

高度な気のコントロールが必要な修業^{しゅぎょう}だった。

そのピッコロの耳がピクリと動く。電話の呼びだし音だった。

ピッコロは自分ののっている岩をゆっくりと下降させた。

もともと、山の頂上をけずりとして作ったものだった。位置をあわせれば、もとどおりスキマなくハマるようになっている。

ピッコロはそれを苦もなくやっつけると、はるか下の家にむかって飛びだした。

スマホはテーブルのうえで画面を光らせながら呼びだし音とともにブブブとふるえている。

ピッコロはそれをこわごわ指先でつまみあげ、画面の通話ボタンにタッチした。

この手の道具^{にがて}は苦手なのだ。

「なんだ、ビーデル」

画面にはビーデルの顔がうつっていた。

『あ、ピッコロさん！ おはよう！』

ピッコロは鼻筋^{はなすじ}にシワをよせて、思わず顔をそむけていた。

ビーデルの声は、聴力の高いピッコロには頭の芯^{しん}に響く。

『あのさあ、ピッコロさんって午後からヒマってあります？』

「午後？ 修業でいそがしいといえはいそがしいが……なんだ？」

ビーデルがこういう言い方をするときには、だいたいくだらな用が多い。

『わたし、きょう教えてる格闘技教室の大会があつてね、パンの幼稚園のおむかえにいけないの』

やれやれ。ピッコロは内心ため息をつきながら、修業用のマントとターバンを消した。それから近くのイスに腰をおろす。

「悟飯はどうした？」

『それが悟飯くん、こんど発表する研究レポートづくりでいそがしいって、何日も部屋にこもってるのよ』

「あのバカ……またか」

『ピッコロさん、おねがい』

「……わかった」

面倒^{めんどう}ではあったが、パンとの約束もある。むかえにいくのも悪くないだろう。

『ありがとう！ 助かったわ！』

スマホから響く超音波^{ちようおんば}じみた声に、ピッコロはふたたび顔をそむけていた。

『じゃあ午後三時にね。おいしいおみやげ買ってくるから』

「オレは水しか飲まんと言っただろう！」

そう言ったのは一度や二度ではないはずなのだが。まったく、どうしてこう孫の一家はそろいもそろって人の話をまともに聞かないのだろう。

『あっそうか！ じゃあまたカワイイぬいぐるみでも買ってくるわ』

ビーデルはうしろの棚^{たな}の方を見ながらそう言うと、そのまま通話を切ってしまった。

ピッコロは暗くなった画面をにがにがしげに見つめてから、部屋の片隅^{かたすみ}に目をやる。
「なぜぬいぐるみ」

そこには山と積まれたぬいぐるみがあった。それも全部おなじキャラの。

ビーデルからの電話のすぐあと、ピッコロは悟飯たちの家へとやってきた。
引きうけはしたものの、やはりこれは本来悟飯の仕事のはずだ。
ピッコロは悟飯の部屋の窓ぎわに降りたって、なかで悟飯がパソコンにむかっているのをたしかめた。
ピッコロがすぐちかくにいるのにまるで反応がない。半分あきれながら窓をたたくと、悟飯の背中がびくりと動いた。
「あっ」

ようやく顔をあげた悟飯がふりかえって、メガネごしに目をほそめてこちらを見る。
「ピッコロさん！」
ピッコロがひややかな目をむけていることもわからないらしく、悟飯はいつもの調子で窓をあけて身を乗りだした。
「すいません、またパンの迎えをたのんじやったみたいで……」
「ふざけるな！ キサマ、いったいなにをやってるんだ！」
その言葉にはとなると、悟飯はいそいで部屋のなかへ引きかえしていった。
眉^{まゆ}をひそめるピッコロの目の前に、悟飯はノートパソコンをかかえてもどってきた。
「ムシのレポートを……」

パソコンのディスプレイには、アリの写真が表示されている。
「このまえ、南の島ですごいアリを発見しちゃって。そのアリ、危険がせまるとちよっと光って変身^{スーパー}するんです。超サイヤ人みたいでしょ!？」
「そんなことをきいているんじゃない！」
ピッコロのイライラは頂点に達しつつあった。
「子どもの迎えにいけないくらい、研究が大事かってきいているんだ！」
さすがの悟飯も、ピッコロがいらだっていることに気づいたようだった。
「あ、いえ、でも、ピッコロさんがいつくれるんでしょ？」
「だいたいすこしはトレーニングぐらいしたらどうなんだ！ いつ危険がおそってくるかもわからないんだぞ」
「えー。そんなことまだありますか」
だが、悟飯のかえた言葉には危機感のかけらもなかった。
「それにもしあったとしても、おとうさんやベジータさんが——」
「とうっ！」

気合いとともに、ピッコロは部屋に飛びこんで悟飯にヒジ打ちをたたきこむ。
悟飯は自分のパソコンをかかえたまま、ヒジをあげてピッコロの一撃をうけとめていた。
「へへー、まだまだ鈍^{にぶ}っちゃいませんよ」
悟飯が余裕を見せるようにニヤリとわらった。
ドスッ！
拳^{はら}が腹にくいこむにぶい音とともに、悟飯がヒザからくずれおちる。

「げ……げげ」

ピッコロは、よろよろとたちあがる悟飯にむかって両手をつきだした。

悟飯の身体をピッコロのはなった力がつつみこむ。それがパツとはじけたかと思うと、悟飯の服はピッコロそっくりのものにかわっていた。

「あっ！」

自分の姿に目をまるくした悟飯は、突然苦しげな顔になってしゃがみこんだ。

「お、重い……」

「どうだなつかしい格好^{かつ こう}だろ」

おもしろがるような顔で見おろすピッコロを、悟飯は困り顔で見かえす。

「これじゃ仕事がやりにくいですよ」

「文句を言うな……パンの迎えには、いってやる」

ピッコロはそう言って悟飯に背中をむけた。

「ったく、自分の子だろ」

「ホントすいません！」

うしろから悟飯の声がひびいた。

「こんど、またぬいぐるみプレゼントしますから」

「いらん！ 　いつオレがそんなものを好きだなんて言った！」

ピッコロは神速^{しん そく}でふりかえり、悟飯を指さしてわめくようにかえす。

「機嫌^{き げん}がわるいなあ、ピッコロさん」

イライラと飛びさるピッコロを悟飯は不思議そうに見送るのだった。



ピッコロは修業にもどった。こういうときは落ちつくためにも修業がいちばんだった。

そうして、うかぶ石板^{せき ばん}のうえで心を落ち着けてしばらくたったときのこと。

上空でチカッと光るものがあつた。それはピッコロにむけてはなたれたビームだった。

なぜかビームの先端にはふたつの目があつた。ねらいをさだめるように、まっすぐピッコロをにらんでいる。

突然、ビームは閃光^{せん こう}とともに何本ものビームに分裂したかと思うと、それぞれがいっせいにピッコロにおそいかかった。

ピッコロが目を見ひらく。つぎの瞬間、石板のうかんだ山頂で大爆発がおきた。

無残に破壊された石板の残骸^{ざん がい}のうえに、煙をまといつかせたピッコロがうかんでいた。

キズひとつ見あたらなかったが、その表情は雷雲^{らい うん}のようだった。

「オレの修業のジャマをしたな」

ピッコロが見あげる先に、右手に銃^{じゅう}を構えた長身^{かま}の人影がうかんでいた。

年代ものの軍服のようなスーツを身につけ、背中には青いマント。Vの字のようなトサカのついたヘルメットをかぶり、胸には青く「2」の文字が染めぬかれている。

その手の中で、ずんぐりとした丸みをおびた拳銃^{けんじゅう}がギリギリとまわりはじめる。

タテにヨコにひとしきりまわしたあと、腰のホルスターに銃をピシリとおさめ、その人影はピッコロを見おろして言った。

「フン、ピッコロ大魔王だな」

「残念、オレはただのピッコロだ」

風にマントをはためかせながら、空中の人影は片方の眉をかるく持ちあげる。

「どういうことだ？」

「いろいろ複雑なんだ。で、古くさいヒーローのようなおまえは？」

ピッコロの言葉に、相手がすこし不機嫌顔になる。

「フン、せめてレトロと言ってほしいね」

その自称レトロヒーローは両腕をそろえて大きくふりあげた。

「残念ながら、ボクの正体は！」

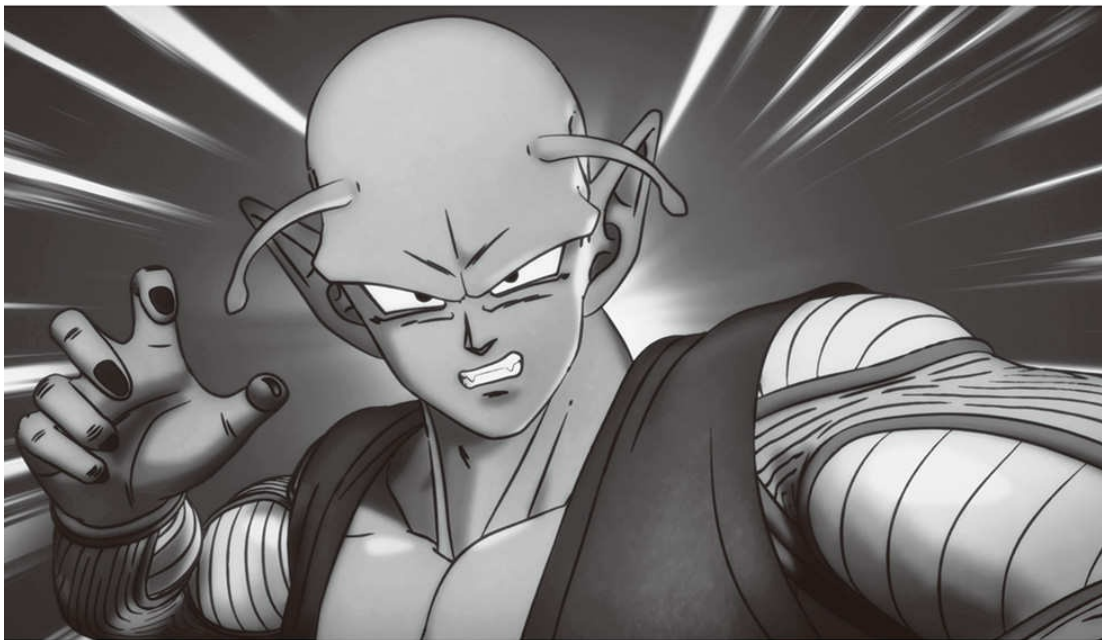
そうして腕を大きくまわしながら、右肩のあたりで交差させるようにポーズをとる。

とたん、その背後でなにかが爆発した。色とりどりの煙とハデな炎、そしてあたりをふるわせる爆発音。

「まだ秘密だ！」

「ぐ……」

DRAGONBALL SUPER



ピッコロはどう反応したものか悩んでいた。

さっきの攻撃は本物だった。まともにうけていたら無事ではすまなかっただろう。

だが、あれはなんだ。どうやったのかはともかく、あの爆発になんの意味が？

ピッコロは腕を組み、相手のようすをうかがいながらおなじ高さまで上昇する。

と、相手の肩口^{かたぐち}のワッペンに気づいて、ピッコロはすうと目を細めた。

「そのマーク……神だったときに見おぼえがある。たしかレッドリボン軍」

ヒーローはおどろき顔になって、おおげさに手で目をおおうしぐさをする。

「あちゃー、こいつはしくじったな」

言いながら、指のあいだからピッコロを見た。

「ところで、神だったときというのは？」

ピッコロは鼻でわらった。

「ふん、リサーチ不足だな。教えてやるもんか」

「ケチだなー」

ピッコロは相手の言葉を無視した。

「レッドリボン軍は、とつくのむかしに壊滅^{かいめつ}した。そして残った科学者のドクター・ゲロの野望も、そのあとに消えさったはずだ……セルもふくめて」

ヒーローはやれやれと言わんばかりの顔で小さく天を見あげる。

「きょうはただの腕だめしのつもりだったんだけど……そうはいかなくなったらしい」

ピッコロはあらためて相手の気をさぐっていた。最初の攻撃に気づかなかったときに予感^{よかん}はあったが、どうやらまちがいないようだった。

「気が感じられない……ロボットか人造人間^{じんぞうにんげん}だな。つくったのはだれだ」

ヒーローは感心した顔でピッコロを見かえす。

「そんなことまでわかるのか？ さすがだな。しかし、それも秘密さ」

「……ふん。ところでまさか、このオレとたたかうつもりなのか？」

人造人間は余裕^えの笑みをうかべて、ピッコロに人差し指をつきつけた。

「正解。そして死んでもらうことに計画を変更したよ。悪く思わないでくれ、そういう命令だ」

「ふふん。じゃあさっさと終わらせよう」

ピッコロもまた口もとをゆがめて笑う。そうして組んだ腕をほどき、構えをとった。

間^まをおかず、人造人間が一瞬で距離をつめてくる。なかなかのスピードだった。

だが、つきだした拳は空をきった。

一瞬はやくそれをかわしたピッコロが、相手の腹に拳をたたきこむ。さらに姿勢をくずしたところへ、突きの反動を利用した蹴りがはいった。

キリキリと回転しながら、相手はふっとんでいった。

ピッコロはその場で構えをとりなおしつつ、ようすをうかがった。手ごたえはあった。

突然、相手が空中で急ブレーキをかけたように動きをとめる。その目がまっすぐピッコロにむけられたかと思うと、すさまじい速度でこちらへむかってきた。

「……………！」

その動きにダメージを感じさせるものはなかった。

会心にちかい一撃だったはずだ。だがスピードも動きもむしろさっきより——。

そこまで考えたところで、ピッコロは腹部に衝撃を感じて身体をくの字に折った。

ピッコロは苦痛に顔をゆがめながら、視界のはしに見えたものに思わず目を見ひらく。

DOKA!

「なに??」

空中に文字が飛びだした……ように見えたのは目の錯覚か？

それがピッコロに致命的なスキをつくった。

敵の脚が高くふりあげられる。

「はあっ！」

ピッコロは頭に強烈な一撃をうけてまっすぐ落下していった。

ちょうど蹴りのあたったあたりから

BISHI!

という文字を飛びださせながら。

「ぐわあー……！」

ピッコロは岩山のはしに激突して、そのまま岩場を削る^{けず}ように落ちていく。

くずれ落ちた岩をおしのけて起きあがると、ピッコロは顔をしかめてつぶやいた。

「……なぜ文字がでる」

その目の前に、すくとんと人造人間がおりたった。

「ちょっとガッカリだな。もっとすごいって思ってたのに」

ピッコロはターバンとマントに手をかけ、ぬぎすてる。すさまじく重いマントとターバンが音をたてて地面にくいこむよりはやく、ピッコロは相手にむけて飛びだした。

「うおおー！」

さらに速度をましたはずの突きを、しかし人造人間は交差した両手ではねあげていた。

力をそらされ、身体がうきあがったところで、ピッコロのアゴに相手のヒザが命中する。

GA…!

ピッコロが衝撃で一瞬棒立ちになる。そのすぐ横に着地した人造人間は、着地の反動を利用してヒジ打ちをいれた。

「ぐうおっ」

ヒジのはいった胸のあたりから、またも文字が飛びだす。

DOGO!

ピッコロは頭上高く両手を組んでふりおろした。それが相手の背中をもちとらえる。
たおれるところを蹴り上げるが、相手はその反動で後方に回転しながら距離をとった。
人造人間にむけて、ピッコロは手のひらをつきだした。

「だだだだだだっ！」

そうして構える間をあたえず、^{き こう だん}気功弾をたたきこんでいく。何発も、何発も。

人造人間は、それをダンスでもおどるかのようにかるがるとかわしていった。

さきに息切れしたのはピッコロだった。気功弾の攻撃が一瞬とまったスキに、人造人間はホルスターに手をかけ、高く空中に舞いあがる。

「おわりだ」

引き抜いた銃の先端に大きな^{こう きゅう}光球が出現する。

ぼうぜんと見あげるピッコロにむけて、光球が発射された。

一瞬の後、ピッコロの立っていた場所が巨大な光球につつまれる。光球はさらに大きさをまし、とつぜん閃光とともに爆発した。

爆発はピッコロがくずした岩山をのみこみ、こなごなにふき飛ばす。

人造人間は上空にうかんだまま、爆発の煙をすかしてピッコロの姿をさがしていた。

「あれ？ こっばみじんか……」

どこにも反応はなかった。人造人間は、ふんと鼻を鳴らして笑う。

「死に顔を確認したかったな」

そう言い残すと、人造人間はその場を飛び去っていった。

そのようすをさらに上空から見おろす姿があった。

ピッコロだった。いまの爆発にまぎれて、うえにのがれていたのだ。

「……こいつはほうっておけん」

ピッコロはそう低くつぶやいて、人造人間のあとを追って飛びだした。

DRAGONBALL SUPER



其^そ之^の二^に

潜入^{せん に ゅう}！ レッドリボン^{ぐん}軍





空に白雲をひきながら飛ぶ^{じん ぞう にん げん}人造人間を、ピッコロは地面ぎりぎりの高さで^{つい せき}追跡していた。

どこまでいくのかと思いはじめたころ、ようやく人造人間が高度を落としはじめた。そのむかう先を目で追うと、そこにあったのは水をたたえた大きなクレーターだった。

崖^{がけ}のうえから身を低くしてようすをうかがうとクレーターの斜面に大きな^{どう ぐつ}洞窟があって、なかに建物が見えた。あたりでは何台ものクルマや人影がせわしなく動き回っている。

「なんだ、あの建物は……」

人造人間はその洞窟の前におりていく。まわりの人間は驚くようすもなく、人造人間はそのまま歩いて洞窟のなかへとはいっていった。

そこにいる全員がレッドリボン軍の兵士だった。

人造人間は通りかかる兵士たちと気さくにあいさつをかわした。人型マシンとトラックがぶつかりそうになるのを肩をすくめて笑ってから、人造人間は洞窟の奥へとむかった。

胸に94の番号をつけた兵士がその背中をぼんやりと見送っていた。と、背後からのびた緑色の腕が、94番をいきなり^{もの かげ}物陰にひきずりこんだ。

ピッコロだった。兵士をのして身ぐるみはがし、それを着こみながら人造人間のゆくえを目で追いかける。

そこは倉庫のようなものがずっと奥までつづいているように見えた。

それが突然、人造人間の姿がノイズのはいった映像のようにゆがみ、消えてしまう。

「消えた……？」

ピッコロは物陰をでて、人造人間の消えた場所にむかった。ちょうどそのあたりを通過したと思った^{せつ な}刹那、ピッコロは薄暗い洞窟から開けた青空の下にでていた。

そこはクレーターの内側の空間だった。外から見たときには水をたたえていたはずだったが、ピッコロのまわりにあったのはレッドリボン軍の巨大な基地だった。

おそろくなにかのしかけで、水があるように見せかけているのだろう。

と、小型の飛行機がおりてくるのが見えた。目の前のタワーの壁面がひらき、飛行機は翼をたたんで中に進入していく。

そのそばの出入り口を、ふわりと舞い上がる人影が通りぬけていった。人造人間だ。

「あそこか」

ピッコロは人造人間を追って飛びあがる。

「あ！ ガンマさん、おかえりなさい！」

「おう、ただいまー」

タワーの出入り口の前で、ナンバー26の兵士が人造人間とあいさつをかわした。

「ガンマ……」

ピッコロはおさえた声でつぶやいた。どうやらあの人造人間はガンマというらしい。

ガンマはそのままタワーのなかに入っていく。それを追ったピッコロは、やはりタワーに入ろうとしていた兵士たちの列にくわった。

奥へ進むと天井の高い広い部屋にでた。中央には円卓を中心にした一段低くなっている場所があって、ナンバー付きの兵士たちは世界地図の描かれた壁沿いに整列していた。

ピッコロもその最後尾にならぶ。

円卓のまわりはソファーになっていた。そこにふんぞりかえる赤いスーツの小男がひとり。マゼンタである。

そのすぐうしろ、一段高い床のうえに立ってマゼンタに葉巻をすすめているのはカーマイン。

それからピッコロに背をむけて座っている人間がひとり。ドクター・ヘドだった。

ヘドは漂ってきた葉巻の煙を手ではらいながら、クッキーをミルクにつけて口に運ぶ。

「さすがだったな、ガンマ2号」

彼は、ピッコロたちのちょうど反対側の壁の前、ひどく個性的なデザインのディスプレイのそばにいる人影にそう声をかけた。

「すべておまえの目を通して見ていたぞ」

「ありがとうございます、ヘド博士！」

答えながらふりかえたのは、あの人造人間だった。

「でも、テストにしてはちょっとやりすぎだったかも」

ガンマ2号がそうつぶける横で、もうひとり胸に「1」の数字のある人物がむきなおる。

ピッコロは目を見ひらいた。

まちがいない。あれもおなじタイプの人造人間だ。ヘルメットのトサカがひとつなのとマントの色が赤いということ以外、ほとんど見た目にちがいがいない。

「なに、もう一体いるのか！ あっ……」

そう声に出してから、となりの兵士がげげんな目でこちらを見ていることに気づく。

ピッコロは顔をおおったマスクをなおしながら、小さくせきばらいをした。

「いいや、いい判断だった」

ヘドはクッキーを口にほうりこんだ。

「それより、せめて登場シーンとフィニッシュくらいはポーズがあってもいいかもな」

新しい葉巻に手をのばしながら、マゼンタが不機嫌そうに言う。

「まさか正体がバレるとは……」

「ふん。あんたがレッドリボンのマークをつけろなんて言うからじゃないか」

「死体は確認したか？」

ガンマ1号の言葉に、2号がふりかえる。

「死体？ いや。バラバラでそんな必要もなかったよ」

1号は腕をくんで、うたがわしげにじっと2号を見た。

「あれでたすかるわけないさ。見てただろ」

だが、1号は2号の言葉を無視するように背後の操作卓^{コンソール}にむかった。短くキーをたたき音が響き、壁のモニターにピッコロとの戦いが再生される。

最後の岩山ごと爆発する場面で映像がとまった。それからわずかにタイムラインがまきもどり、ふたたび爆発がひろがるところから再開する。

画面の一部がズームされ、爆発の煙が不自然にゆがんでいる場所が大うつしになった。

「ここを見ろ」

1号が拡大した映像は、煙のなかからなにかが飛びだしているようにも見えた。

2号がスクリーンに顔をよせ、片眉^{かた まゆ}をあげる。

「えっ、微妙だな……」

「ピッコロだとしたら、敵の組織にバレてしまった可能性もある」

1号の指摘に、2号は大げさな身ぶりをつけながら陽気に答えた。

「だいじょうぶ。すくなくとも、こんな場所の秘密基地は見つからないさ。かりにここがバレたとしても、そのとき組織ごと倒せばいいことじゃないか。おかタイなー1号は」

「組織……？」

ピッコロは眉をひそめた。

「おまえが軽率^{けい そつ}すぎるんだ」

1号があきれたようにかえす。

そこで突然モニターの画面がかわった。レッドリボン軍のマークが回転する例のハデなオープニングが、ファンファーレとともにながれはじめる。

同時にリモコンを手にしたカーマインが進みでた。

「敵の中ボスと思われる、孫悟空やベジータというヤツはかなり強敵そうだ」

その言葉と同時に、みょうなポーズをきめた悟空とベジータがつぎつぎ表示される。

「恐ろしい魔人^{まきみ}ブウもいる。さらに不気味なミスター・サタンの実力はまだ見えてこない」

それからブウがうつり、ミスター・サタンの写真にきりかわった。

「大丈夫。これで、ボクの最高傑作であるガンマの実戦でのすごさは証明されたからね」

ヘドが余裕の表情で二体の人造人間たちをふりかえる。

「ピッコロ大魔王は楽勝だったろ？ ガンマ」

戦闘ポーズをためしていた2号はぴたりと動きをとめ、余裕の笑みをうかべて答えた。

「ええ、がっくりするほどにね」

「……チッ」

ピッコロは舌打ちした。力が通用しなかったけならまだしも、連中は戦いよりキメポーズに夢中なのだ。

そして、じっさいあの人造人間ガンマ二体が相手では、ピッコロに勝ち目がないことはみとめざるをえなかった。

「さすが天才ドクター・ゲロのお孫さんですな」

皮肉^{ひにく}めいた口調でカーマインが言った。

「ふふん、ボクは超天才だけどね」

余裕をくずさないヘドに、マゼンタがむっつりと言う。

「その超天才のせいでピッコロを逃したのであれば、作戦を早めねばならなかったな」

ヘドは自信たっぷりに立ちあがる。

「ご心配なく。ガンマの実力は立証できた。このデータをつかえたいした時間にもかからず、ガンマのコピーが何体でもできる」

そうして、二体のガンマたちのもとへと歩きながらつづける。

「ブルマをはじめとする^{じや あく}邪悪で強力な秘密組織^{いつ そう}さえ一掃してしまえば、ヤツらの手先とも思える軍や警察など取るにたらぬ存在。あつというまにこの腐った世界を制圧できますよ」

DRAGONBALL SUPER



そう言いながらふりかえるヘドを、マゼンタはにらみつけるように見た。

「そんなことよりドクター・ヘド。セルマックスはいつになったら完成するんだ」

ピッコロは驚きを隠せない。

「……セルマックス!？」

「ご心配なく。ガンマたちがいれば、セルマックスなんて必要ない」

ヘドの言葉に、マゼンタのいらだちまじりの声が響く。

「いつかと聞いたんだ」

ヘドはしぶしぶといったようすでメインモニターにむかった。

「こいつか……そうだな。こっちはもうすこしかかりそうだ」

モニターの前までやってきたマゼンタが、いらいらとのぞきこむ。

「ほとんどできていると言ったはずだぞ」

「セルマックスの本体はとくに完成しているが、脳のコントロールプログラムに時間がかかるんだよ」

ヘドのその言葉と同時に、目を閉じた異形^{いぎよう}の頭部がモニターにうつし出された。

セルだった。見まちがえようがない。

思わずピッコロは身を乗りだしていた。

「どれだけ待ったと思っているんだ」

つめよるマゼンタに、ヘドは熱意^{こた}のこもらない声で応えた。

「おことばですがマゼンタ総帥^{そうすい}。すこしくらい時間がかかってもとにかく想像を超えた強さに、なんて注文したのはアンタだ」

マゼンタはいまいましげに言う。

「どうやらキミは、セルマックスが気にいらないうるだな」

「スーパーヒーローには見えないからね」

ヘドはかすかに顔をしかめてモニターのむこうに目をやった。

「それに、ベースがドクター・ゲロのデータというのも気にいらない」

「セルの強さは実証^{じしやう}済みだ。キミも当時のニュースで見ただろう。しかしデータが複雑すぎて、われわれだけでは再現不可能だった。キミならさらにパワーアップして、よみがえらせることもできると思ったんだ」

ヘドはマゼンタに自慢^えげな笑みをうかべた。

「もちろんたやすいことでしたよ。時間はムダにかかるけどね」

「ふん、キミがセルマックスよりガンマに夢中になっていなければ、とくに完成していたんじゃないのか？」

「セルは、特殊な細胞をすこしずつふやして成長させるタイプだから、まっている時間が長いのは当然だ。むしろこの時間を有効につかって、ガンマを開発したことをほめてほしいね」

ヘドがうすら笑いをうかべる。マゼンタはぎりりと歯を鳴らし、腕をふりまわしてさげんだ。

「もういい！ かまわんから、セルマックスを起動してしまえ！」

「はやまってはいけないな、マゼンタ総帥」

ヘドはひややかに言った。

「こいつは、過去のセルをはるかにしのぐ恐ろしい怪物だよ」

マゼンタが勢いこむ。

「レッドリボンの力を見せつけるには最高の役者だろう」

「しかしいまの状態で起動して世にだしてしまえば、とんでもないことになるよ」

「なんだ？」

マゼンタがモニターを見あげるヘッドをにらむ。

「制御がきかず、アンタの支配したがつている世の中そのものがなくなってしまうてもいいのか？」

マゼンタは言葉につまった。

ヘッドはつづける。

「セルマックスなんて使わなくても、やっかいな連中はガンマがかたづけてくれるさ。そのあとでセルマックスを起動して、世の中にアンタの力を見せつけられればいい」

「その言葉、信じていいんだろうな」

そう言いながら、マゼンタの目はヘッドを信用していなかった。

「もちろんさ」

ヘッドは自信にあふれた笑みでそうかえす。

「こ、これはまずいぞ……」

ピッコロは誰も自分に関心をはらっていないことをたしかめ、こっそりその場を離れた。

タワーをでてその裏手にある庭園に身を隠すと、ピッコロはスマホをとりだしてブルマをよびだした。口もとをかくしていたマスクをずらし、顔をあらわにする。

『なあに？ めずらしいわね、あなたから電話なんて』

「ブルマ、ベジータはいるか？」

おさえた声でたずねると、ブルマは苦笑^{くしやう}をうかべた。

『いないわよ。例によってビルスさまのところ。もう三週間になるかしら』

「悟空^{こくう}もか？」

『当然よ』

「おまえ、たしかウイスさまと連絡する装置を持っていただろ。すぐに二人に帰ってこいとつたえてくれ」

『なあに？ なにかあったの？』

ブルマがげげんそうに聞いてくる。

「ああ、いまわしく話せないが、とんでもないことになりそうなんだ」

『ふーん、わかった。連絡してみるわ』

ピッコロのせっぱつま^{ふん い き}った雰囲気^{ふん い き}がつたわったか、ブルマはそれ以上詮索^{せん さく}しなかった。

スマホを切りながら、ピッコロは考えをめぐらせる。

「とりあえずいまのうちに早くなんとかしないと……そうだ！ 仙豆^{せん ず}がいるかもしれんな」

低くそうつぶやいて、ピッコロはその場から宙に舞いあがった。

めだたないようにすばやく上昇していくと、それまで見えていたレッドリボン軍の基地がチリチリとゆらいで湖面にかわっていった。



ビルスの星で、悟空はブロリーを相手に組手の最中だった。

腕力ならかなうものはないかもしれないが、ブロリーはそれをうまく使うべをしらなかった。そこで、悟空が稽古をつけているのである。

もっとも、ブロリーの攻撃をいなすのは悟空といえども簡単ではなかった。

組手をはじめてそれほどたっていないのに、もう息があがりはじめている。

「う、うう……！」

何度めかの渾身の攻撃をうけながされ、ブロリーはぎりりと歯をならした。

「い!？」

身体じゅうから緑色のオーラがふきだし、さらにその表面をはねるような電光がはしりはじめた。全身の筋肉がもりあがり、逆に視線はさだまらなくなってくる。

「う……うがが!!」

「ま、まった！ まった！」

悟空の声に、ブロリーの目が焦点をとりもどす。同時にブロリーの身をつつんだ異様なオーラが消えていった。

悟空はがっくりと肩をおとしてはげしく息をついた。

「はあっはあっはあっ……おめえまたキレかかてるじゃねえか。そいつをおさえろって何度も言ってるだろ？」

「すまない。つい……」

「ん？」

うなだれるブロリーをよそに、悟空は別の方向にむきなおる。

「おめえさ、いいかげんにしろよ。そんなに長いあいだうごかねえとなまっちまうぞ」

ベジータだった。

ひらたい岩のうえでアグラをかいて、目を閉じている。もうずいぶんのあいだ、微動だにしていなかった。

「うるさい、ジャマをするな。これもトレーニングだ」

悟空はあきれ声で言った。

「ウソ言うなよ。そんなのトレーニングなわけねえじゃん」

「キサマはなにもわかっていない。あの圧倒的に強かったジレン……じつは力そのものはオレたちとそれほど大きな差はない」

「え？」

ベジータはゆっくり顔をあげ、とじていた目をひらいて悟空を見た。

「パワーのつかいかたにムダがまったくないんだ。気づいたか？ あいつはたたかいの途中でも、一瞬の攻撃をするとき以外は身体も精神もリラックスさせている。ゼロからの攻撃は相手に動きを読ませないし、瞬発力も大きい。そしてスタミナも温存できるんだ」

「そうかなあ」

悟空が納得のいかない顔で首をかしげる。

ブロリーは神妙な顔でふたりの会話に耳をかたむけていた。

「ジレンはおそらく本能でそれができるんだ。だからそれができないオレはまず頭のなかでトレーニングしている」

言いながらベジータがふたたび集中しようとするところへ、突然拍手の音が響いた。

「すばらしい。すばらしいですよ、ベジータさん！」

ふたりの頭上にウイスがういていた。ウイスは拍手しながらゆっくりと二人のあいだにおりたつ。

「よくそのことに気づかれましたね」

それからウイスは悟空に目をやりながらつづけた。

「そのとおり！ バカみたいに身体をきたえることだけがトレーニングではないんですよ」

「うーん」

悟空はまだ納得がいけないようだった。

ベジータはどうだという顔で悟空を見る。そのベジータにふりかえったウイスが言った。

「気づくのおそいんですけどね」

ベジータの顔がしかめられる。

「悟空さんはまだピンときてないみたいですねえ……そうだ！」

ウイスは楽しげにぱんと手をあわせた。

「ためしにお三方で試合をやってみましょうか」

ベジータが顔をあげた。

「ブロリーもふくめてか!? 冗談じゃない！」

「ちっとはよくなったけど、まだときどきヤバいんだよ、コイツ」

悟空が困り顔でつづける。

「キレたら、こんなちっこい星なんてなくなっちゃうぞ」

ブロリーは、とまどい顔で悟空たちの話を聞いているだけだった。

「……たしかに」

ウイスはブロリーを横目で見ながら、ちょっと鼻白^{はな しろ}んだ顔になる。

「では、悟空さんとベジータさんだけで、ブロリーさんはキレてはいけない試合というものがどういうものか見学してください」

ふたたびにこやかな顔にもどってウイスがそう宣言する。そこにけだるげな声が響いた。

「ふああああゝゝゝあ。ウイス！」

ビルスが大あくびをしながら歩いてくるのが見えた。

「オレが昼寝をしてどれぐらいだ」

ウイスはふりかえり、にこやかにあいさつする。

「おはようございます。そうですね、地球の時間でいえば四か月ほどでしょうか」

「なんだ、思ったよりはやく目がさめちまったな……やかましいし、いい二オイがしたんで——」

言いながら、ビルスが鼻をひくつかせた。と、見しらぬ顔があることに眉をひそめる。

「だれだ、あいつ」

「ブロリーさんですよ」

ビルスが目をむいた。

「ブロリー!? なんでそんなヤツがここにいるんだ」

「ここなら絶対にフリーザはこないだろ？ 安心だからつれてきたんだ」

あっけらかんと言いはなつ悟空に、ビルスは口からアワを飛ばしてくっつかかる。

「勝手につれてくるんじゃない！　ここはホテルじゃないんだ」

ビルスはそのままで言ったところで、ただよってきた食べ物のニオイに口をつぐんだ。

「きましたね。ごあいさつなさい」

ウイスがそのニオイのほうに声をかける。そこにいたのは、ブロリーとともにフリーザ軍をぬけたレモだった。もっとも、その格好はまるで安食堂の料理人のようだったが。

レモは、大きなフライパンいっぱいにこしらえた料理を運んでいるところだった。

ウイスの横に立つビルスの姿に気づいて、こわごわと小さく頭をさげる。

「あ……あの……お世話になります」

ビルスは舌をならした。

「チッ、おまえもか」

「レモといいます。もとフリーザ軍でして……」

ビルスはレモの話を見殺しに、彼が運んでいるフライパンにくぎづけになっていた。

しばらく凝視ぎょうししてから、ビルスはレモにむかって手まねきする。

「いいニオイのもとはそいつか……ちょっとこい」

「……はい」

レモが言われるままに近づいたところで、ビルスはフライパンにつっこんであったおたまをとりあげた。

「そ、それは——」

とめる間もなく、ビルスはおたまの中身を口にほうりこむ。

「……ほう！　うまいじゃないか。おまえ、フリーザ軍ではなにをやってたんだ」

じつはそれが予言魚よげんぎよのエサだとは言えず、レモはひたすら恐縮するしかなかった。

「雑用係でしたが、ときには調理も……」

「よし、おまえはいてもいい」

そこへ、大きな袋をかかえた小柄な人影がやってきた。ブロリーとレモとともにフリーザ軍をぬけたチライだった。

「なんだよ、広いだけで——」

チライはヨタヨタと歩きながら、目にはいったブロリーに声をかける。

「おー、元気そうじゃん」

「ああ……」

気づいた悟空がふりかえる。

「よう！」

「あんたたちもいたんだ」

チライはレモがいることに気づいた。

「ここ、思ったよりカネ目のものがないじゃないか。ガッカリだよ！」

チライはレモに近づきながら、品のない口調でそう言った。どうやら袋の中身は、このあたりから拝借はいしやくしたものがつめこまれて
いるらしい。

青ざめたのはレモだった。

「チ、チライ！ だまれ」

言いながらみょうな違和感をおぼえて、レモは目の前に立つ破壊神^{はかいしん}にちらと目をやった。

ビルスはじっと袋をかかえたチライを見つめている。怒っているようには見えなかったが、なにを考えているのかわからなかった。

急におとずれた沈黙に、チライが袋のカゲからようすをうかがう。こちらをまっすぐ見つめるビルスの姿に、思わず声がでた。

「うあ」

チライはてきとうに言い訳しながら、そのままわれ右しようとする。

「あ、あの……その、ちよつと掃除^{そうじ}を……」

「……今度はなにものだ」

ビルスのその言葉に、チライは顔をひきつらせて足をとめた。

「チ、チライです！ あの……あんた、いやあなたが破壊神ビルスさま？」

背中をむけたままのチライに、ビルスは不機嫌顔で答える。

「そうだ」

「宇宙でもっとも恐ろしいという……」

つぶやくように言いながら、チライはおそろおそろふりかえた。

ビルスのようすがおかしかった。チライの顔を目にしたとたん手にしていたおたまをとりおとし、突然全身をビリビリとふるわせる。

「んが……」

ビルスのアゴがガクンとはずれるようにおちた。

「!？」

チライは顔をひくつかせ、ジリジリとあとずさる。

長い沈黙があった。

「かわいいな……」

その場のだれも予想しなかった言葉に、ビルス本人をのぞいた全員——ウイスも例外ではなかった——が一瞬動きをとめていた。

「すきなだけいいぞ」

ビルスがチライにまっすぐ暑苦しい視線をむけてくる。

チライはなにがおきたのか理解できず、その場で固まっていることしかできなかった。

「な……なんだ……あれ……」

さしもの悟空も、この場の空気の異様さに気づいたようだった。とまどったようにビルスとチライの顔を見比べている。

ただひとり、ウイスだけがおもしろがるような笑みをうかべていた。

「ビルスさまの好みって、意外にベタだったんですね」

ウイスは小声でそうつぶやいてからぱんと手をうちあわせ、たからかにこう言った。

「はいっ！ さあさあ、そんなことより試合をはじめましょ！ 最後まで立っていられたほうの勝ち。変身やかめはめ波^はなどの飛び道具はなしですよ。いいですね？」

ウイスが同意をもとめて全員をみまわす。とたん、ドンピシャの間合いでグウウウーツと腹の虫がなる音が響く。

「まずメシ食わせてくれよ。腹ペッコペコだ」

悟空の緊張感のない声に、レモとチライが足もとをすべらせてひっくりかえた。

「やれやれ、サイヤ人って」

ウイスは肩をすくめた。



「通信機……通信機……」

ブルマは自室の机のしたに頭をつっこんでいる。

通信機が見つからなかった。

さっきのピッコロのようすから考えて、急いだほうがいいのはわかっているのだが。

「いたっ！」

ひきだしにおもいきり頭をぶつけてその痛みをこらえながら、ブルマはちらかった部屋をぼうぜんと見まわす。

「どこだっけなあ……」



悟空たちは魚たちが水槽でおよぐ食堂で、大量の料理ののったテーブルをかこんでいた。

「おいしい地球の食料がなくなりましたので、味の保証はできませんが——」

ウイスの言葉をガン無視で、悟空は席についたとたんあたりの料理をてあたりしだい口の中におしこんでいた。

「こちらでご用意させていただきました」

それはベジータも、そしてもちろんブロリーもおなじだった。この段階で、すでに料理の何分の一かが消えうせている。

「さあ、めしあがれ」

もともと、ウイスもそれはなれたことのようにだった。順調に料理を消費していくサイヤ人たちをしりめに、近くにあった料理のひとつをつまんで口にはこぶ。

「すばらしい！ いったいなにをしたんですか!? まるで魔法ですよ、レモさん！」

ウイスの手ばなしの賞賛^{しょうさん}に、レモは照^てれて頭をかいた。

「スパイスをいろいろ、ちょいと……」

その会話を聞いていた悟空が、不思議そうにベジータを見る。

「おい、なにかかわったか？」

「ぜんぜんわからん」

ベジータは一瞬食べる手をとめて、皿のうえの料理を見た。

ブロリーも首をかしげる。

だがいくつか料理をためしたビルスは、いままでにない上機嫌で席から立ちあがった。

「気にいったぞ、これから料理はレモが担当だ！ ウイスはクビ！」

「まあ、くやしいー！」

言葉とはうらはらに、ウイスはひどくうれしそうだった。

いろいろな意味でにぎやかな食事がおわり、悟空はふたたびビルスの庭園にいた。

満足げに腹^{はら}をさすり、さっきまでの疲労などまるで残っていない顔をしている。

ベジータは悟空の立っている場所にほど近い、高い古木^{こぼく}のうえに立っていた。

ふたりの顔からは、これから始まる戦いにワクワクしているようすが見てとれた。

対峙^{たいじ}するふたりからはなれた場所に立って、ウイスが腕をふりあげる。

「はじめてください！」

「だりゃああ——！」

先に動いたのは悟空だった。あえてなのか、パワーを見せつけるように足もとの岩をふみ割りながら加速していく。

悟空は古木の手前で地面^けを蹴ってベジータにむかって飛ぶと、そのままの勢いですどく右^{みぎ}の拳を突きいれた。

一方のベジータは、最初の突きを簡単に見切ってかわす。

悟空は間髪^{かんはつ}をいれず左拳を打ちこんだ。さらにそれも余裕でかわすベジータに、今度はヒジが飛んでくる。

すさまじい連続攻撃だったが、ベジータはそれらをすべてかわし、うけながしていた。

だが、悟空の攻撃はとまらなかった。回転しながら高くふりあげた脚^{あし}が、ベジータの頭上へとふってくる。

「だりゃあっ！」

ながれるような動きでベジータがそれをかわす。勢いあまった悟空のカットが古木のうえにおちかかり、そのまままっぴらひき裂いた。

崩壊^{ほうかい}する古木の破片のなかから悟空が飛びだし、上昇する。

それを追ったベジータは、空中でまちうけた悟空の蹴りをかわし、つづいてたたきこまれた拳の一撃を腕でガードした。

フルパワーの拳打^{けんだ}をうけきれず大きく後退したベジータに、追いつがった悟空の蹴りが炸裂^{さくれつ}する。が、ベジータはたたんだ腕でそれもうけとめた。

DRAGONBALL SUPER



これだけの攻撃をはなてばふつつなら多少は動きがにぶるものだが、悟空のスピードはかわらなかった。矢つぎばやにもう一発の蹴りをはなとうとする。

それを狙っていたように、ベジータは悟空の脚をつかまえていた。そのまま大きくふりまわし、なげ飛ばす。

「ぐっ……うわあっ」

悟空は飛ばされた方向にあった樹木を足場にして勢いを殺し、さらにその先にあるもう一本をつかんでくるとまわり、方向を反転した。

むかってくる悟空に、ベジータは正面から応じる。

悟空の攻撃は、一発一発が大きなハンマーで殴られるような威力があった。

それをベジータはヒジをつかってうけ、いなし、はじき飛ばす。一瞬うまれたスキにベジータのヒジが命中したが、悟空はひるまなかった。

それどころかむしろ悟空は勢いをましていた。

「だりゃあああ！」

急激にましたスピードに、ヒジのうけがまにあわなくなる。

「ごふっ！」

胸もとに一発。さらに姿勢がくずれたところにもう一発。こらえきれず、ベジータの身体がはね飛ばされる。

空中でふんばるようにして急制動をかけたベジータは、悟空を見かえしてニヤリと笑った。

楽しくてしょうがないという顔である。

そこへ悟空が加速しながら蹴りをはなってきた。

ベジータはそれをかわし、悟空を誘うように背中をむけて飛んだ。

悟空とベジータは周囲の木々につつこんでへし折り、うちくだきながら、空中でからみあうように組手をくりひろげる。

戦いがながびいても、悟空の攻勢はとまらなかった。あいかわらずのパワーでくだされる拳は、ちっともスピードがおちない。

くらべてベジータは、その攻撃をうけるのでせいいっぱいに思われた。

「まだまだあ!!」

ついに悟空の拳がベジータを正面でとらえた。かろうじて手のひらでうけとめたものの、ふき飛ばされた勢いをとめることができず、背後の巨大な木——ビルスの寝床として使われている——に背中からつつこんでいった。

「ぐっ……」

だが悟空はとまらなかった。すばやくベジータに肉迫すると、すさまじい速度で蹴りを拳を連打してくる。

なおもベジータはそれをうけつつづけていたが、とつぜん目のはしをつりあげて悟空の手首をつかんでいた。

「調子に、乗るなよ!!」

思いきり頭をうしろにそらしたベジータが、あつけにとられる悟空に頭突きをかます。

「カカロット!!」

予想外の反撃に、悟空は身をのけぞらせていた。そこへベジータの蹴りがたたきこまれる。たまらずふっ飛ぶ悟空は、わずかに肩を上下させはじめていた。

あれだけのパワーをこめて連続で攻撃しつづけてきたのだ。さすがの悟空も息があがりつつあった。

「へへ……」

それでも、追ってくるベジータにむけた悟空の口もとには笑みがうかんでいる。

「なめるなよ!!!」

飛びかかるベジータを悟空が拳で迎え撃つ。スピードに変化は見られなかったが、ベジータはそのすべてを見切ってかわしていた。

逆にいままでうけにまわっていたベジータが、スキをついて攻撃をくりだしはじめる。

「うっ!!」

胴への連打がきまり、悟空の動きがとまった。すかさずベジータがアッパーをはなつ。

「だあっ!!」

たまらず悟空の身体が後方に飛ぶ。なんとかブレーキをかけたものの、ダメージは隠しようがなかった。



その戦いのようすを、ブロリーはみじろぎひとつせずじっと見つめていた。

「……わずかだが、ベジータの動きがかわったな」

ビルスの言葉に、ブロリーは戦いに目をむけたまま深くうなづく。

クッションつきのシートにふんぞりかえったビルスとそのとなりにすわるウイスは、^{み せ もの}見世物見物でもしているかのように緊張感のない会話をかわしていた。

「トレーニングの成果でしょうかね」

「長くなりそうだな」

「なにかデザートでもいただきましょうか」

ウイスの提案に、ビルスが舌なめずりするような口調でかえす。

「たとえば？」

「ベジータさんたちが持ってきたアイスクリームがたくさんありますが」

「じゃあ、あたしが持ってきてやろ——あげましょうか？」

すかさずチライが手をあげた。なりゆきであのふたりの組手を見させられているが、正直チライにはなにをやっているのかさっぱりわからなかったからである。

すかさずビルスが立ちあがった。

「じゃあ、てつだってやろう」

「あら」

すまし顔のビルスに、ウイスはうかんだ笑いを隠そうとしなかった。

食堂にもどってきたビルスは、さっそく冷凍庫をあさる。

「アイスクリーム、アイスクリーム……これだ」

ビルスは冷凍庫からとりだしたアイスのカップを胸もといっぱいにかかえながら、洗い物をしていたレモを見た。

「おいレモ」

「あ……はい」

「皿洗いはあとでいいから、おまえもアイスクリームを食べろ」

「……どうも」

ちいさく頭をさげながら、レモはビルスのむこうに立っているチライに目くばせする。チライはただ肩をすくめるだけだった。

「あ！ あったあった」

適当に積んであった雑誌の下にそれはあった。

ブルマはようやく見つけた通信機をもちあげて、思いっきりキスをしてからもういちどほればれと見なおす。

「あった———！」

ビルスは、たつぷりとすくったアイスクリームを至福の表情で口にはこんでいた。

そのうしろには、すでに空^{から}となったアイスのカップが山と積まれている。

「プロリー、おまえも食べろ」

めずらしく気前のいいビルスの言葉も耳にはいらないうすで、プロリーは目の前でくりひろげられる組手のなりゆきに集中していた。

さすがに悟空だった。ベジータの攻勢をしのぎながら、動きのキレももどりつつある。

くりだしたパンチをかわされ、死角をつかれて背後をとられたベジータは、そのまま悟空の腕を腹にまわされて身動きとれなくなっていた。

「がっ!!」

「どりゃあ———!!」

気合いとともに、悟空がベジータを背後に投げ飛ばすようにもろとも落下していく。

そのまま湖水にふたりが飛びこんだとたん、巨大な波がわきおこりくずれた波頭が雨のようにあたりにふりそそいだ。

「ふん……」

バケツをひっくりかえしたようなしぶきがたたきつける寸前、ビルスは右手をもちあげてパチンと指を鳴らした。

「うわっ!？」

チライは思わず頭をおおったが、彼女のうえに水は一滴もふってこなかった。見あげると、水滴はチライたちのうえで半球^{はんきゆうじょう}状の見えないなにかにはばまれている。

「あらあら」

ウイスがビルスを横目で見える。

「ビルスさま、おやさしいんですね。だれかさんを意識して……」

「だまって食べろ！」

ビルスは顔をこわばらせてウイスをにらんだ。そうして、照^てれ隠^{かく}しのようにアイスを口にはこぶ。

カラになったカップのなかを少し見てから、ビルスはそれを後ろにほうった。カップは山のまんなかあたりに落ちて、コロコロところがってからなにかに引っかかってとまる。

それはカップの山からつきだしたウイスの杖の頭^{つえ}だった。

杖の頭はぼんやりと光を明滅させていたが、カップのせいで誰も気づかなかった。

「もお！」

どのくらい時間がたっただろうか。

何回かけ直しても、延々^{えん えん}よびだし中の点滅をくりかえすだけの通信機を見おろして、ブルマはイライラとさげんだ。

「なんでちっともでないのよー！」

DRAGONBALL SUPER



そのさん
其之三

ピッコロ、^{かくせい}覚醒する





カリン塔では仙猫^{とう せんびょう}のカリンと、完全にいついてしまったヤジロベーが待っていた。

「なるほど、そんなことが。気がつきませんでした」

ピッコロのもとめに応じて、カリンは仙豆^{せん ず}のはいった袋をとりだす。

「ありゃ〜」

袋のなかをあらためたカリンは、恐縮しながら口をあけた袋をさしだした。

袋のなかには仙豆がふたつはいつているだけだった。

「すみません。いまは二粒しか……」

「二粒か……」

それでもないよりはるかにマシだった。なんといつてもひと粒でどんなケガからも回復するし、体力も満タンになるのだから。

「それでいい。すまん」

ピッコロは袋をうけとってちいさく頭をさげる。

「神さま、お氣をつけて」

ピッコロはふりかえってカリンを見た。

「もう神じゃない」

「そうでした……」

ピッコロはスマホがブブブとふるえていることに気づいた。ポケットから指先でつまむようにとりだした画面に、ブルマが大写しになる。

「ブルマか！ どうだ、連絡はしてくれたか」

『それがさあ、なんと連絡してもでてくれないのよー。もうすこしつづけてみるけどさあ』

「……そうか、すまん。そうしてくれ」

ピッコロはむずかしい顔になってスマホをポケットにもどす。

「連絡がとれませんか……」

心配げなカリンにピッコロはうなずいた。

「ああ。悟空^{ご ぐう}とベジータぬきはキツイな。戦った感じだと、あのガンマ^{じん ぞう にん げん}という人造人間たちの実力はあのふたりに匹敵^{ひつ てき}しそうだ」

「そいつはまずいですな……」

カリンはそう言つてすこし考えてから、顔をあげる。

「孫悟飯^{そん ご はん}は？ いつかあなたが言つておられたじゃないですか。あいつはその氣になれば、地球にいるだれよりも強いんじゃないと」

カリンのとなりに立っていたヤジロベーがうんうんとうなずく。この男も昔悟飯とともに戦ったことがある。串刺しの餅を延々ほおばりながらでは説得力に欠けるが。

「いまのアイツはあてにならない」

ピッコロは陰^{かげ}しい顔になってカリンたちから顔をそむけた。

「そうですか……」

「17号と18号はドクター・ヘドのデータで弱点をしられているかもしれん。そして魔人^{まじん}ブウは休眠期にはいつてしまっている」

「……ということは」

カリンに背をむけ、ピッコロはヒザをついてしゃがみこんでしまった。

「なんてことだ……オレがなんとかしないと……」

みじかい沈黙のあと、ハッとピッコロが顔をあげる。

「そうだ！」



ピッコロの見おろす先には、なつかしい神^{しん}殿^{でん}があった。

細長いエントランスからかけだしてきたのは、いまや地球の神となったデンデだった。

「ピッコロさん！」

「デンデ！」

ピッコロは神殿にふわりとおりたって、デンデをむかえる。

「事情はわかっているか？」

「はい、うえから見ていました！ 大変なことに……でも、ぼくにはなにもできませんが」

「以前、ナメック星^{せい}でクリリンと悟飯^{さいちやうろう}が最長老^{せんざい}さまに潜在能力を引きだしてもらったと聞いたが」

「はい、ぼくも見ていました」

デンデの答えに、ピッコロはその場^{こし}に腰を下ろした。

「このオレにやってくれ」

「え？ ぼくがですか？」

ピッコロはうなずく。

「ああそうだ。おまえは最長老さまとおなじタイプのナメック星人だ」

そこまで言って、ピッコロは目だけを動かしてデンデを見た。

「できるはずだ！」

「残念ですが、あの能力はあるていどの年齢にならないとできないんです」

デンデはもうしわけなさそうに言ってからうつむいた。

「すみません」

「なんとと……」

ピッコロは落胆した。わるくない考えに思えたのだが。

「……そうだ！」

なにかを思いついたようにデンデが顔をあげた。

「ドラゴンボールの力をかりては？」

「ドラゴンボール？」

「レッドリボン軍を消してくれとねがえば！」

だが、ピッコロはそれには答えず、ただうつむく。

ピッコロの考えを察したか、デンデがつづけた。

「それはプライドがゆるさなそうですね。では、最長老さまのように神龍にピッコロさんの潜在能力を引きだしてもらえば」

「できるのか！ 神龍にもそんなことが」

思わずピッコロがふりかえる。

「アップグレードすれば、たぶん……」

「アップグレード？」

ピッコロは眉をひそめて聞きかえした。

「ほら、かなえられる願いも一つから三つになったでしょ？ あれとおなじですよ。ちょっとおまちください」

そう言ってデンデは神殿にもどってから、透明な器にはいった神龍の置物とビンにはいった水をもってあらわれた。

そうして、ワゴンにのせられた神龍の器にビンからの水をかけはじめる。

突然、器のなかの神龍が光をはなちはじめた。それはたちまち明るさをまして、あたりをあかるく照らした。

それほど時をおかず、神龍からの光はおさまりはじめる。やがて完全に光が消えると、デンデは神龍の置物を見て言った。

「はい、これで神龍のアップグレードができたと思います」

ピッコロは神龍の置物に目をやった。なるほど、言われてみればさっきと形がちがう。

「……オレも神だったが、しらなかったな」

「あなたはずいぶんむかしに地球にきていますからね」

「しかしドラゴンボールをあつめる時間があるかな……」

考えてみれば、ボールが七つそろわなければいくら神龍をアップグレードしても意味がないのだった。ボールをあつめるために時間をかけていては話にならない。

「いまでしたら、ちょうどブルマさんが七個すべてを持っていますと思います。ここ何年かは、ブルマさんが人手をつかってボールをあつめ、よからぬことにドラゴンボールを使われないためにあえてどうでもいい願いをかなえてもらっているようですから」

「あえて願いをかなえることもないだろうに」

あきれられるピッコロにデンデが言った。

「ほら、すこし前にフリーザ軍にぬすまれてしまったことがあるじゃないですか。願いをかなえてボールをまたちりぢりに」

「なるほど。しかしそれはラッキーだったな」

ピッコロはスマホをとりだした。

「ブルマ！」

『はいはい、聞こえてるわよ』

「どうだ、連絡は？」

画面のむこうのブルマがうんざり顔になる。

『それがまだとれないのよ〜』

ピッコロはスマホに顔を近づけて言った。

「ブルマ、もしかしてドラゴンボールをもっているか？」

『ドラゴンボール？ もってるわよ、ちょうど七個全部』

「よし、せっかく集めたのにわるいが、今回はオレにゆずってくれないか？」

言いながらピッコロはデンドに目^め顔^{がお}でわかれをつけ、神殿を飛び出す。

『え〜！』

「たのむ、どうせどうでもいい願いをかなえているんだろ？」

ブルマは不満そうにかえした。

『どうでもいいことなんかじゃないわよ！ ……まあピッコロさんのたのみならしょうがないけど』

「すまん、すぐにそっちにいく！ 庭^{みやこ}でまっいてくれ」

ピッコロは、ブルマのいる西の都にむけて全速で飛んでいった。



「いでよ神龍、そして願いをかなえたまえ！」

ピッコロの言葉と同時に、目の前におかれた七つのボールが光につつまれた。

同時に、青空に墨^{すみ}をながしたような黒雲^{こくうん}がひろがっていく。それはあっというまに空をおおいつくと、真夜中のようにあたりを闇につつまこんだ。

ボールの輝きが目もあけていられないほどに強まっていく。

突然ボールから光が飛び出した。それは大蛇^{おおへび}のようにうねりくねって天にのぼっていく。

真っ暗な空を背に、巨大な龍^{りゅう}がこちらを見おろしていた。

神龍だった。

「さあ願いを言え。どんな願いも——あ」

地の底から響くような声でそこまで言いかけて、神龍は目をこらしてピッコロを見た。

「ピッコロさま……!？」

「神龍!! ナメック星の最長老さまのように、オレの潜在能力を^{せん ざい}めいっぱい引きだすことはできるか？」

ピッコロの問いかけに、神龍が答える。

「……ええ、もちろん。それがひとつめの願いですか？」

「ああそうだ。やってくれ」

そう答えてピッコロが身を乗りだすように前にでる。同時に、神龍はピッコロの頭上で大きく^{せん かい}旋回しはじめた。

ごうっと風がふきつけ、それがピッコロのまわりから吸いあげられるように上昇していく。

それにつれて、ピッコロは自分のなかで眠っていたなにかがすさまじい勢いであふれでるのを感じていた。それがピッコロをつみこみ、全身が輝きをはなちはじめる。

DRAGONBALL SUPER



「こ……これは……!! オ、オレの力は……これほどまで……」

ピッコロは驚きに声をふるわせる。

「すこしオマケしておきました」

神龍はその言葉とともにピッコロの前に鏡を出現させた。大きく見た目がかわったわけではないが、そこにはいままでとは別ものの自分がいた。

「では、あとふたつの願いをどうぞ」

「オレはもういい」

ピッコロはそっけなくそう答える。全身をつつむ光はいつのまにか消えていた。

「え、そうなの？ それだけ？ じゃあ、あとふたつはわたしが使っちゃっていい？」

ブルマだった。すこしはなれてなりゆきを見守っていた彼女は、期待にみちた目でピッコロを見ていた。

「ああ、当然だ。かまわない」

やったあ、とこおどりしてから、ブルマは口もとに手をあてて考えこむしぐさをした。

「じゃあ、お尻をもうちょつとキュッてあげてもらおうかな。若い女の子みたいに」

「え？」

ピッコロはいま聞いた言葉の意味がすぐには理解できなかった。

「たやすい願いだ——はい、かなえた」

「じゃあ、みつめはまたおハダの小ジワを自然な感じでとっていただこうかしら」

「ちょ、ちょっとまった」

顔をひきつらせたピッコロが割ってはいった。

「なによ」

ピッコロは一瞬言葉につまりながら、ブルマの顔をしげしげと見た。

「……そんなことに……ほかに、もっとなにか……」

「そんなことでわかったわね！ じゃあ、まつ毛を二ミリぐらい長くしてもらおうかな」

「かなえた。ではピッコロさま、さらばです」

ぼうぜんとピッコロが見あげるなか、神龍はふたたび光となってドラゴンボールにすいこまれるように消えていった。

そうして、ボールは光をはなちながら天へと舞いあがり、いずこへともなく飛びさった。

気がつくと空はすっかり明るさをとりもどし、なにごともしなかったかのように小鳥がさえずる声さえ聞こえてきた。

「いつも願いはあんな感じなのか」

ピッコロは神龍のさった空を見あげながら、どこか釈然としない口調でそうたずねる。

「わるい？」

「い……いや、べつに自由だが」

ドスのきいた声でききかえすブルマに、ピッコロはタジタジとなる。

と。

「あーっ！ しまったーっ!!」

ブルマがハッとなってさげんだ。

「な、なんだ」

「ベジータたちを呼びもどしてってたのめばよかったんじゃない」

「……あ！」

ピッコロは思わずブルマにくっつかかっていた。

「おまえの尻がすこしだけあがったせいで」

「なによ！ あんただって思いつかなかったじゃない！」

ピッコロはなにか言いかえそうとしたが、なにも思いつかなかった。だいたい、ブルマとロゲンカして勝てると思えないのだが。

とつぜん襲った徒労感とろうかんに肩をおとしながら、ピッコロは言った。

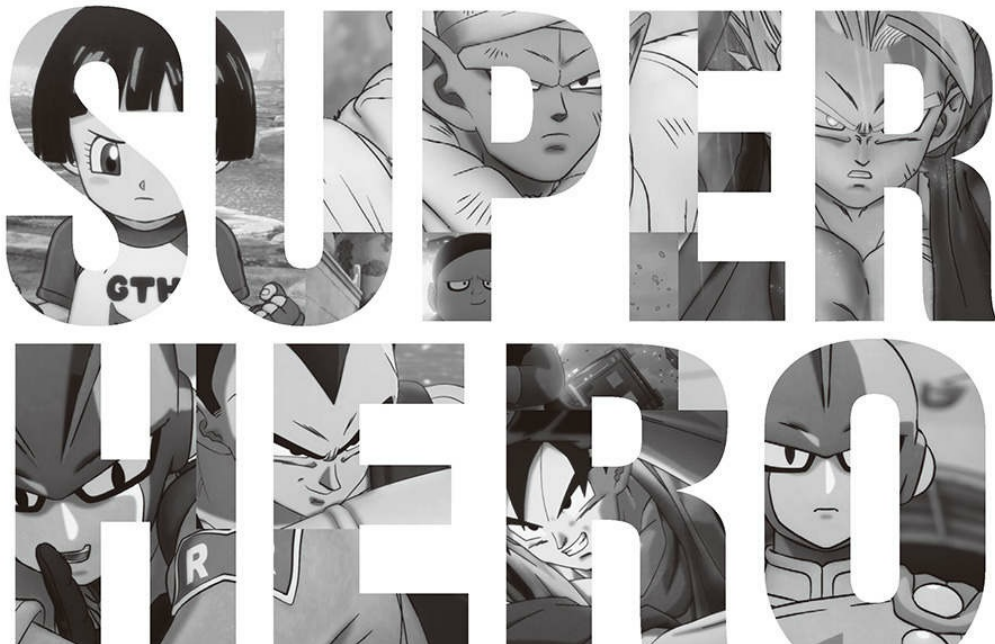
「……オレはふたたび潜入してなんとかしてみる」

DRAGONBALL SUPER



其之四

パン、誘拐される





会議はまだつづいていた。

「つぎのターゲットは、孫^{そん}悟^ご空^{くう}かベジータというのはどうだ」

ピッコロがもどったのは、マゼンタがヘッドとカーメインにそう話しているときのことだった。

「敵に対策をねられないうちに、一気にボスクラスをつぶしておくんだ」

「スパイによると、現在そのふたりは居場所がつかめないようです」

カーメインの答えに、マゼンタは顔をしかめてみじかく舌打ちした。

ピッコロはそれを聞きながら、そしらぬ顔で隊列にもどる。

「どこにいったんだ？」

きいてきたのは、となりに立つ79番の兵士だった。

「あ……ちょっとお腹^{なか}いたくてトイレに……」

ピッコロがでまかせを答えると、79番は心配げに言う。

「え、大丈夫か？ 顔色わるいぞ」

まあたしかにナメック星人^{せいじん}の肌^{はだ}の色は、地球人視点ではなにかタチのわるい病気を連想させるものではあったが。ピッコロはとっさにゴーグルを下げた。

「だ、大丈夫です」

「ガマンできないならすぐ言えよ」

「はい……」

とりえずあいつちを打ちながら、ピッコロはマゼンタの声に注意をもどす。

「では、裏切り者の17号か18号にするか、それとも不^ふ気^き味^みなミスター・サタンか」

は^はまき^{まき}葉^は巻^{まき}を片手に、マゼンタは肩越しにカーメインをふりかえった。

「孫^{むす}悟^こ空^{そん}の息子の孫^{そん}悟^ご飯^{はん}というのはどうでしょう？」

「！」

悟飯の名前があがったことに、ピッコロはおどろきを隠せなかった。

「生物学者のふりをしていますが、スパイカメラによればその昔子どもでありながらセルをたおしたという恐ろしい存在」

カーメインがリモコンを操作すると、中央のモニターに日ごろの悟飯の姿がいくつもうつしだされた。そのなかにはピッコロが悟飯の部屋を訪れたところもある。

「ピッコロがひんぱんにヤツのアジトに出入りしていたところを見ても、悟飯が影のボスの可能性も。いまのうちにつぶしておか

ないと、やっかいなことになるかもしれません」

「なるほど。しかし、世間的にはセルマックスが完成するまで軍の存在はしられたくない。街での騒動はさけねばならん……」
マゼンタが考えこむ。

「むずかしいですね……ヤツはめったにアジトからでてこない」

カーマインの言葉にマゼンタはなにか思いついたらしく、ニヤリとなった。

「それではここで戦ってもらおうか」

「ここで？」

カーマインがちいさく首をかしげる。

「孫悟飯にはたしか幼稚園に通う娘がいたはずだ。そいつを誘拐して、悟飯ひとりをここへおびきよせればいい」
マゼンタの言葉を耳にしたピッコロの顔がしかめられる。

自分の思いつきをいたく気にいったようすで、マゼンタは上機嫌でカーマインを見た。

「ガンマの戦いぶりをこの目で見るのもおもしろそうだぞ」

「なるほど、それは兵士たちの士気もあがるかもしれませんね」

カーマインが賛同の声をあげるところへ、ヘドの不機嫌な声が響いた。

「敵とはいえ、その子どもを誘拐というのは感心しないね」

マゼンタの顔から笑みが消える。

「科学者がよけいな口だしはしないでもらおう——おい」

マゼンタに声をかけられたのは、先頭に立っていた3番の兵士だった。すっかり気をぬいていた3番は、おおあわてで背すじをのばして前にでる。

「は、はい！」

「ふたりほどつかって、孫悟飯の娘を誘拐してつれてこさせろ」

3番はマゼンタにむかって敬礼してから、さっとふりかえって15番を見た。

「15番、いけるな？」

「おまかせください」

「それならオレもいかせてください」

15番が答えるとほぼ同時に、ピッコロが前にでる。

「なんだおまえは。かつてに口をはさむんじゃない！」

「オ、オレはたまたま——」

なんとしてもパンのもとにいかなければ。ピッコロは必死で考えた。

「その孫悟飯の家のちかくに住んでいて、その娘を見たことがあります」

「見たことが？ おかしいな……なぜ孫悟飯の娘のことをしてるんだ？」

「え？ あ、あの」

3番の指摘にパニックになりかけながらも、ピッコロは答える。

「そ、その娘は、有名なミスター・サタンの孫でもあるからです！」

「なるほど……だが人選はわたしがする。94番といえばまだ新人だ。おまえはだまって見張りをにつけてろ」

そのようすを見ていたマゼンタが、葉巻の煙を吐きだしながら言った。

「いや、娘をしっているなら好都合じゃないか。いかせてやれ」

「……はい、わかりました」

そう答える3番の声を背中にききながら、ヘドはマゼンタたちを不満顔で見るのだった。



基地を出発した飛行機は、パンの通う幼稚園へとむかっていた。

操縦桿そうじゆうかんをにぎっているのは15番だった。大男だったので、ピッコロは副操縦席できゆうくつな思いをしていた。

15番に身体からだをおしつけられながら、ピッコロはこの先どうするかについて考えをめぐらせていた。

「そうか……これはもしかしたら悟飯かく せいを覚醒させるいい機会かもしれんぞ……！」

ふだんは闘争心のかけらもない悟飯だったが、パンのことになると話がべつだ。

パンとうまくしめしあわせて、危険がせまっているかのように思わせれば、あるいは。

「おまえ無口だな。緊張してるのか？」

とつぜん15番が声をかけてきた。

「あ、はい……あの、どうやって誘拐しますか？」

「そろそろ幼稚園がおわる時間だ。たぶん母親がだれかがむかえにくるだろう。移動中にてきとうなチャンスをねらって母親もろとも誘拐すればいい」

ピッコロは15番をにらみつけそうになるのをこらえる。

「79番にきいたぞ」

不意に15番がおもしろがるような口調で言った。

「え？」

「もうすぐつくから、ウンコもらすなよ」

「う……うん、こ……」

ピッコロは穴があつたらはいりたい気分だった。

「バイバーイ！」

最後の子が、おむかえの親につれられて帰っていく。

「バイバイ……」

「おそくなってゴメンねー」

「うん！」

ママに手をひかれていく友だちを見送りながら、パンはさびしげに手をふった。

幼稚園の前は^{だいじゅうたい}大渋滞だった。15番が道路のまんなかに飛行機をおろしたからである。

「あの娘か？」

15番が物陰^{ものかげ}からようすをうかがいながら、となりのピッコロにきいてきた。

「……はい」

「ほかの園児はもういないな」

15番は立ちあがった。

「よし、母親はきてないがさっさと誘拐^{きうがい}してしまおう」

「なっ!？」

ピッコロは驚いて15番を見た。

ふつう、もうすこし慎重^{しんちよう}に行動するものじゃないのか。子どもを誘拐しようっていうのに。

だが、15番は気にするようすもなく、ふつうに歩いていってしまった。

うつむいているパンに、先生が声をかけていた。

「ママ、もうすぐくと思うよ？」

そこへ15番が巨体をゆらしながらちかづいていく。

「パンちゃん、おそくなってゴメンねー」

先生が引くのがわかった。そりゃそうだ。

「オジちゃんは、ママにおむかえをたのまれたんだよー。さあ、いっしょに帰ろうか」

のぶとい声で言いながら、15番はパンにむかって手をさしだした。

「先生にサヨナラを言っ——」

大きな手がその小さな身体にふれたと思われた瞬間、パンの姿がかき消えた。すくなくとも15番にはそうしか思えなかっただろう。

「たあーっ！」

ドゴッ!!

すばやく飛びだしたパンは、15番の腹^{はら}にパンチをくらわせていた。

パンの何倍もある巨体が、ヒザをついたかと思うと音をたててくずれおちる。

「ま、まあ！ どうしたの!？」

先生がおどろきあわてている。パンはその先生をふりかえって言った。

「こんなひと、しらないもん」

ピッコロはあわてて物陰から飛びだした。とにかくここはうまくおさめなければ。

パンが顔をあげてこちらを見た。

「あれ？ ピッコロさん」

その声にピッコロは足をとめた。ピッコロはヘルメットをかぶり、マスクとゴーグルで顔をかくしている。パッと見てわかるとは思えない。

「ほう、よくわかったな」

ピッコロはゴーグルをあげ、マスクをおろした。

「わかるよ、カンタンじゃん。だってピッコロさんの気だもん」

「さすがだな」

「あら、じゃあそちらピッコロさんのおしりあいでしたの？」

先生がおそろおそろ近づいてくる。

「おどろかせてすまない。これは訓練だったんだ」

「まあ」

「ほら、大金持ちのミスター・サタンの孫だし」

今日はよくでまかせを思いつく。ピッコロは内心自分に感心していた。

「あら、そうでしたの。よかったー」

先生は安心の表情をうかべて手をあわせた。



ピッコロは15番を肩にかついで、パンとともに飛行機へとむかった。

渋滞はますますひどくなっていて、クラクションの音で耳が痛くなるほどだった。やじうまも集まってきて、だんだん騒ぎが^{さわ}大きくなりはじめている。

「ダメだよ。こんなところにとめちゃあ」

パンの言葉に苦笑しながらピッコロはうなずいた。

「ああ、早くでないとな」

「これ、だれの飛行機？」

「レッドリボン軍というわるいやつらのだ」

ピッコロはパンをふりかえって答えた。

「パンはうしろに乗ってくれ」

そうつけくわえてから、ピッコロは15番をかついだまま渋滞の列を飛びこえた。パンもそれにつづいてジャンプする。

「どういうこと？」

タラップに足をかけたピッコロは、パンの声にふりかえった。

「飛んだら話す」

それからピッコロはポケットに手をつこんで、ちいさな手錠^{てじょう}をとりだした。

「いちおう手錠をするが、こんなのいつでもはずせるだろう？」

「楽勝だよ」

かんだかいエンジン音とともに飛行機が上昇していく。

「先生、バイバーイ！」

パンが先生に手をふる。と、ガクンと機体がかたむいてパンの身体が一瞬うきあがった。

飛びあがったはいいが、飛行機はまっすぐ進む気配がなかった。空中をでたらめにただよいながら、ちかくの建物にぶつかっていく。

ぼうぜんと先生が見おくるむこうでさんざんあたりを破壊したあと、とどめとばかりビルの屋上の看板^{かん ばん}を突きやぶって、飛行機はようやく前に飛びはじめたのだった。

「ピッコロさん、操縦ヘタだね」

うしろの座席から身を乗りだすパンに、ピッコロはひたいに汗をにじませながら指先でつまんだ操縦桿を動かしていた。

「こういうのは苦手^{にが て}なんだ」

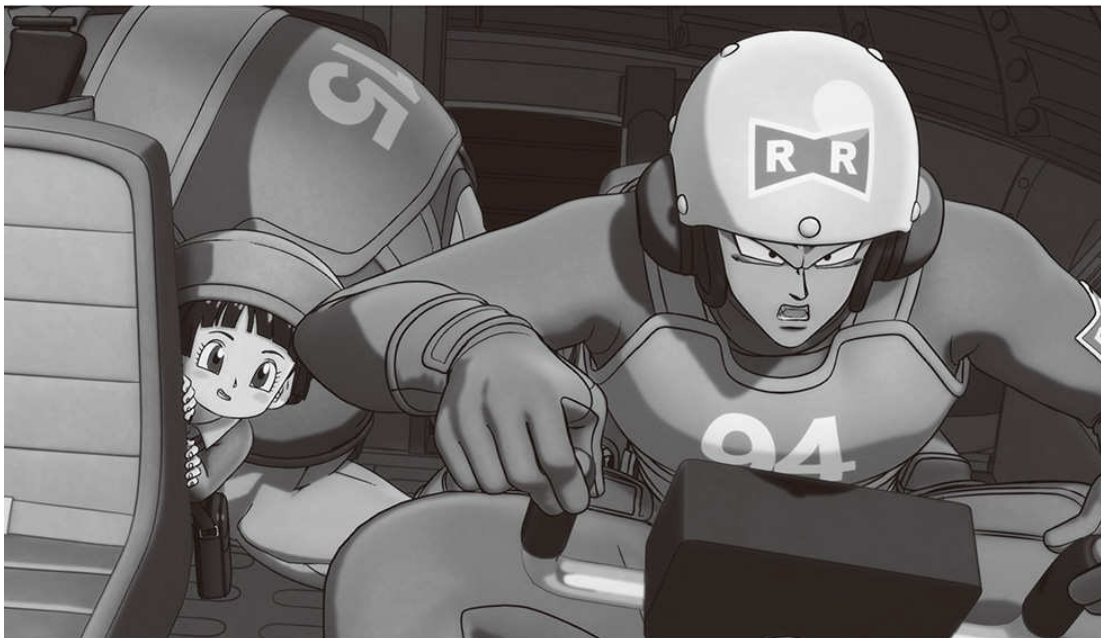
「それで？」

「ああ……」

パンにうながされて、ピッコロは話しはじめた。

「オレはある恐ろしい人造人間^{じん ぞう にん げん}のあとをつけて、レッドリボン軍^{せん にゆう}というわるい組織に潜入した。そこで世界征服のためにジャマなわれわれを消す計画をしったんだ」

DRAGONBALL SUPER



「せんにゆう？」

「こっそり仲間のフリをして、ようすをさぐることだ」

「あ、それでそんなカッコウなんだ」

ピッコロはうなずいた。

「それでヤツらはまずおまえのパパをおびきよせて倒すために、誘拐しようとしたわけだ」

「ヘー。でもおもしろそう！」

「ナメるんじゃないぞ、ほんとうにヤバいやツらだ。パンは誘拐されてこわがっているフリをするんだ。オレがまもってやるから、心配しなくていい」

ピッコロはパンにむかって安心させるように笑いかけた。

パンも笑^えみをかえしたが、すぐに心配顔になって言う。

「でもパパいそがしいみたいだし、きてくれるかなあ」

「あたりまえだ。これでこないようだったら、オレが半殺しにしてやる」

「ハクション！」

そのころ、なにもしらずレポートに没頭していた孫悟飯は、盛大^{せいだい}にくしゃみをしていた。

DRAGONBALL SUPER



其^{その}之^の五^ご

孫^{そん}悟^ご飯^{はん}、怒^{いか}る





「いてててて……！」

15番はひどい筋肉痛とともに起きあがった。

「助けてえ、こわいよー」

背後からきこえた女の子の声に、はっとふりかえる。そこには、手錠^{てじょう}の鎖^{くさり}を配管に通されるかたちで拘束^{こうそく}されたパンの姿があった。

「目がさめましたか？」

ピッコロが声をかけた。すでにマスクを引きあげ、顔を隠している。

「お、おまえがやったのか……？」

「はい」

15番にむかってふりかえったピッコロがうなづく。

操縦のために前をむいたピッコロの耳もとで、顔をよせた15番が小声で言った。

「……みんなには黙っとけよ」

「え？」

顔をむけたピッコロに、15番の顔がずいっとせまる。

「ガキに……やられたことだ」

「……わかりました」

パンはさうす^{ものかげ}を物陰からのぞいて、ひとりほくそえんだ。

「いや～はなしてー、こわいよ～」

棒^{ぼう}読み^よぎみにパンがさげんでいる。

基地にもどってすぐ、パンはカーマインにかかえられ牢^{ろう}屋^やとよぶにはすこし豪華な部屋につれてこられた。

「あっ」

用意されていた子ども用のソファーにほうり投げられ、近くにあったぬいぐるみに飛びついたところで、パンの前にスマホのカメラがさしだされた。

ピッと録画開始の音が鳴る。同時にパンはぬいぐるみをだきしめ、さげんだ。

「パパこわいよーたすけてー！」

ふたたびピッと音が響いて、スマホを構^{かま}えていた15番がうしろのソファーにふんぞりかえっているカーマインをふりかえった。

「撮影しました」

「よし、それを孫悟飯^{そん ご はん}に見せてここにつれてくるんだ」

カメラがとまったとたん、パンはこわがるようすもなく部屋のなかを見まわしていた。

すこしはなれたテーブルのうえに黒いクッキーの皿があった。パンはソファーをおりて、テーブルのところまでやってくると手をのばす。

「おいおいおい」

と、パンの手がクッキーにふれる直前、ベつの手がのびて皿ごともっていってしまう。

「おまえにやるお菓子^{かし}じゃない。調子に乗るな」

立ちあがったカーマインが、パンを見おろしてにらみつけた。

パンのほおがぷーっとふくれ、ぎゅつとにぎった手に力がある。

「おい94番」

手錠をこわさないかとハラハラしていたピッコロは、3番の声にはっと顔をむけた。

「おまえもういちどいいこい。あのあたりにくわしそうだ」

「わ、わかりました」

そう答えながらピッコロはカーマインとにらみあうパンが気になってしかたがなかった。



「ここか」

15番は悟飯の家のチャイムを鳴らした。

「ムダですよ」

15番がふりかえった。ピッコロは家の裏手を指さした。

「こっちです」

悟飯はピッコロがきせた服のまま、机の前から動いていなかった。ピッコロが窓をノックすると、気づいた悟飯が立ちあがってこちらを見る。

「おまえ、ホントくわしいな」

窓がひらき、悟飯が顔をだした。

「なんですか？ あなたたち……」

ピッコロを押しわけ、15番が前にでる。

「孫悟飯か？」

「はい、そうですが……」

15番はそこでようやく悟飯^{かつ こう}の格好に気づいたようだった。

「な、なんだ、そのみょうな格好は」

「え？ ああ、これ？」

15番と話す悟飯に目をやりながら、ピッコロは眉間^{み けん}にシワをよせていた。

「……オレに気づいていない……なんてことだ。パンでさえすぐに気づいたのに……」

突然、15番が拳銃^{けん じゅう}をとりだして悟飯にむけた。

「死にたくなかったら、オレたちについてきてもらおう」

悟飯はメガネを指先で直してから、迷惑顔で窓^しを閉めようとする。

「いまいそがしいんですよ」

「おまえこれが見えないのか!？」

キレぎみに言いながら、15番は悟飯に銃を突きつけた。

「あ！」

つよい衝撃があって、15番の手のなかから銃が消えた。悟飯がデコピンでもするように指で拳銃をはじき飛ばしたのだった。

ふりかえった15番は草むらではねる銃に気づいてから、眉^{まゆ}をひそめて悟飯を見る。

「帰ってください。警察よびますよ」

迷惑そうに悟飯は言った。

「クッ……こ、これを見ろ！」

15番はジャケットのポケットからスマホをとりだし、悟飯の前に突きだす。

画面にうつっているのは、さっき撮^とった手錠^{ていとう}つきのパンの写真だった。

「パン！」

悟飯は窓枠^{まど わく}をつかんで身を乗りだした。顔色は青ざめ、目を大きく見開いて。

「そういうことだ。娘はあずかっている。悲しい目にあいくなかったら、おとなしくついてくるんだな」

やっと言いたいことがつたわったとばかりに、15番はほっとした顔で拳銃をひろいにむかおうとした。

悟飯は肩をふるわせながらうつむいた。うつむきながら窓枠をつかんだ手に力をこめる。

異様な音とともに、悟飯の手のなかで太い窓枠が握^{にぎ}りつぶされた。

「やれやれ」

自分のうしろでなにが起きているか気づくこともなく、15番はふっ飛ばされた拳銃をひろおうと手をのばした。

バキッ！

安いプラモデルがこわれるような音をたてて、15番の拳銃はいきなりあらわれた足にふみつぶされていた。

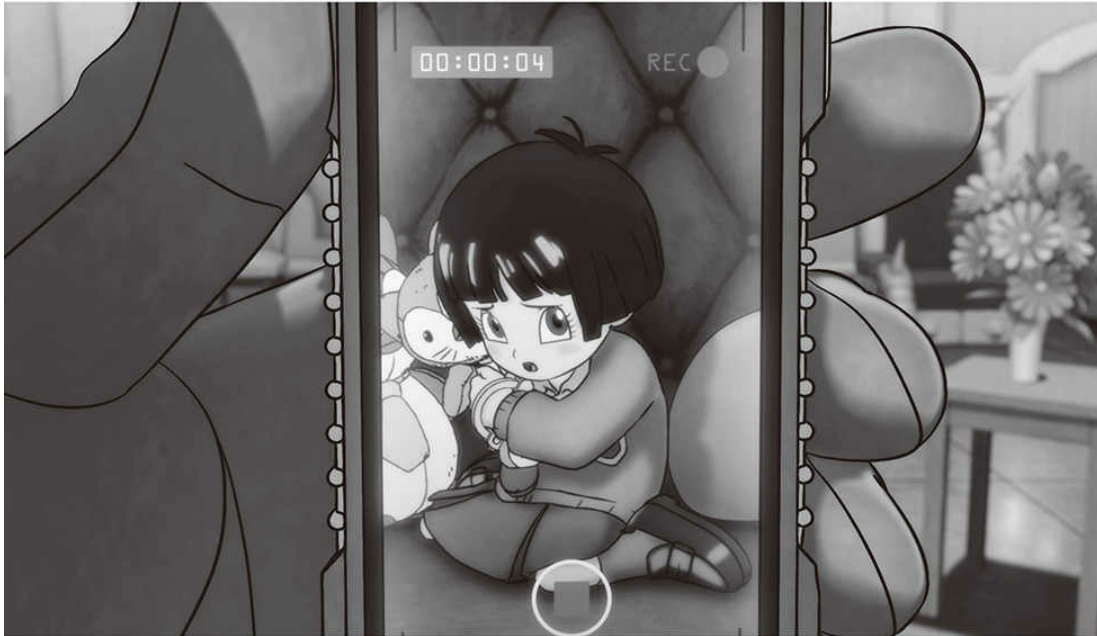
「！」

家のなかにいたはずの悟飯がなぜか目の前にいた。満面^{まん めん}に怒りの表情^{いか}をうかべて。

「うおおおおお！」

拳^{こぶし}をにぎりしめ、両脚^{りょう あし}をひろげてふんばる姿勢をとりながら、悟飯は地を震わす気合いを発した。とたん、髪^{さか}の毛が逆立ち金色の光につつまれる。

DRAGONBALL SUPER



声もだせずへたりこむ15番の目の前で、悟飯は猛然と気を高めていった。

音をたてて地面が沈み、それがさらに広い範囲をまきこんで深く沈みこんでいく。

気の高まりとともにさらに地面が沈む。さらに深く、さらに広く。

ついに悟飯の作りだした陥没は彼の家の敷地全体にまで広がり、けっして小さくはない家がぎ、ぎ、ぎと傾いていった。

手でさわれそうなオーラにつつまれて、悟飯はしびれるような怒気とともに言った。

「パンになにをした!!」

雷鳴のような声だった。ひと言発するたびに地面がゆれる。

15番は驚くべき速度で正座の姿勢をとると、おおあわてで答えた。

「だっ大丈夫ですっ！ まだなにもしちゃいません!!」

それから顔を地面にすりつけるようにさげて、上目づかいでこう言う。

「あ、あの……ついてきてもらえますか？」

「急げ!! パンになにかあったらタダじゃすまないからな！」

いちはやく距離をとってようすをうかがっていたピッコロは、思わずニヤリとなった。

「よーし、いいぞ!!」

あれならガンマにも勝てるかもしれない。希望が見えてきたというものだ。



雨がふっていた。大きな雨粒が音をたてて地面に打ちつけている。

さっきまでの上天気がウソのようだった。

秘密基地のタワー前の庭園には、ガンマ1号、2号と武装した兵士たちが勢ぞろいしていた。

ドクター・ヘド、そしてマゼンタ、カーマインの三人も傘をさして空を見あげている。

彼らの背後にあるタワーのテラスにはパンの姿があった。ふりかえったカーマインと視線があうと、思いっきりいーつという顔をする。

孫悟飯をのせた飛行機がもうすぐもどってくる。そう報告がはいっていた。

「まもなくやってきます」

無線機を背負った兵士の声がきこえた。それにわずかに遅れて、かんだかいエンジン音とともに雲を裂いて飛行機が水煙をひきながら姿を見せる。

旋回する飛行機のなかでは、別人のように陰しい顔の悟飯が外に目をこらしていた。

「あそこか！」

パンの姿を見つけた瞬間、悟飯の気が爆発的にふくれあがる。

レッドリボン軍の面々は、頭上で飛行機が突然爆発するのを目撃することになった。

飛び散る破片と煙を突きやぶったなにかが、大岩でも落ちてきたかと思うほどの衝撃とともに兵士たちのまんなかに着地する。

悲鳴とともに逃げまどう兵士たちのただなかに、悟飯が立っていた。

「きた！ パパきた！」

見張りの手をふりきり、テラスに飛びつくパンを見て悟飯がさけぶ。

「パン！」

悟飯は地面を蹴り、まっすぐパンのいるテラスに飛んだ。

「速い」

ガンマ1号が驚きの声をあげる。

「2号！」

ヘドの声に、ガンマ2号は悟飯の前へと飛びだしていた。

いきなり目の前に出現した2号に悟飯はとっさにかわそうとするが、2号の動きはそれをうわまわった。後頭部にまわし蹴りを受け、悟飯は地面にたたきおとされた。

「パパ！」

パンの悲鳴が響くこうで、マゼンタはガッツポーズをとる。

「よし！」

「このヤロウ……」

立ちあがった悟飯はいましましげにそうつぶやくと、鍛練用の重い肩あてをぬぎすてた。

「1号」

ヘドの声に1号は悟飯にまっすぐ目を向けながら前にでた。

「おまえの相手はオレがする」

「ふっふっふ。娘をすくいたければそいつを倒してみろ」

そう言ったのは、やはり近くにいたマゼンタだった。

「おまえたち何者だ」

悟飯の問いには答えず、1号は自分の手のひらに拳を打ちあてながら近づいてくる。ゆっくりだった歩調は悟飯に近づくにつれて早くなり、大股になり、最後には雨水をけたてて疾走しはじめた。

1号は近づきざま悟飯にパンチをみまう。悟飯は交差した両腕でそれをうけたが、思った以上のパワーでガードをくずされていた。

そこへ1号の二撃目が打ちこまれる。悟飯は左からのアッパーを片腕でうけ、右脚をはねあげて反撃の蹴りをはなつ。さらに空中で回転してもう一撃！

背中から地面に倒れこんだ1号は、しかし倒れたままの姿勢でいきなり起き上がり、悟飯に頭突きをくらわせた。

それを自分の額でうけた悟飯は、1号と手を組んで力比べの体勢になった。

「くく……」

悟飯がうなり声をあげる。パワーではほぼ互角。組みあいが長引きそうに思えたそのとき、1号が素早く悟飯の足をはらっ

た。

「うわっ」

バランスをくずして、悟飯は1号にかつがれるように投げられた。地面にたたきつけられ、悟飯の動きが一瞬とまる。

そのスキに1号は上空高くまで飛びあがった。そして、立ちあがる悟飯の頭上から蹴りをくらわせようとする。

間一髪、ギリギリで身構えた悟飯はその蹴りを両手で完全にうけ、逆に蹴り飛ばした。

1号はまたもダメージを感じさせない動きで着地、悟飯にむかっていく。

それを待ちうけた悟飯は鋭く拳を突きだしたが、逆に腕をからめとられ地面にたたきつけられた。

1号はそのまま空中に舞い上がり、悟飯めがけて足から急降下した。

悟飯はそれをかわしたが、1号の蹴りは敷石を突きやぶり庭園の地面を崩壊させる。

「う、ウソだろ……」

完全に戦意をうしなって、兵士たちはじりじりと後ずさっていった。

それは、テラスのうえでパンを見張っていた33番の兵士もおなじだった。完全にビビって、パンのことなどもはやどうでもよくなったようだ。

そこへ94番の兵士がテラスにはいつてきた。ピッコロだった。

ピッコロは、悟飯のふっ飛ばした飛行機から15番とともに脱出していたのだ。

押されている悟飯を見てくやしげにしているパンに、ピッコロが声をかける。

「きてくれてよかったな」

「うん。でもあいつ強いね。パパ勝てるかな」

ピッコロは即答した。

「無理だ」

「……え？」

「悟飯が勝負のカンを完全にとりもどし、目覚めることに期待しよう」



庭園の下には巨大な空間がひろがっていた。

くずれた地面ごと地下に落下した悟飯は、巨大なガレキをおしのけて立ちあがる。

そのむこうには腕組みをしてこちらを見おろすガンマ1号の姿があった。

「なんだ、キサマは」

「スーパーヒーローだ」

「はあ!？」

ふざけているのか？ わきあがった怒りにまかせて、悟飯はガンマ1号に飛びかかった。

だが力まかせの悟飯をもてあそぶように、1号はその攻撃をかるがとうけながす。

「うっ！」

脇腹^{わき ばら}にヒザをもらって、悟飯の表情が一瞬苦痛にゆがむ。

ガンマ1号はそのスキを見逃^{み のが}さなかった。間髪^{かん はつ}をいれず悟飯のアゴに掌底^{しょうてい}がはいる。さらにふき飛ぶ悟飯に追いつき、両足首をつかんでふりまわしはじめた。

「わわっ」

下から庭園の地面を突きやぶり、悟飯が空中にほうりだされる。空中でブレーキをかけ、こちらを追って上昇してきた1号を見おろして、悟飯は言った。

「ロボットじゃないな……人造人間^{じん ぞう にん げん}か」

「さすがにかわいいな」

悟飯はずれたメガネをなおしながら、1号にたずねた。

「なるほど……だがなぜこんな卑怯^{ひ きょう}なことをするんだ」

ガンマ1号は不満そうに答えた。

「誘拐はわたしのアイデアじゃない。わたしはただ、正義のために命令を実行するだけだ」

「正義？ 命令？」

「おまえたちのような悪の秘密組織をつぶすこと」

悟飯は眉をひそめる。

「なに？」

だがガンマ1号はそれ以上なにも言わなかった。

とまどう悟飯に一瞬で間合いをつめ、フェイントをかけながらヒジ打ちをはなってくる。さらにヒザ蹴^{からだ}りで身体をうかせ、追い打ちの蹴りをくらわせた。

悟飯はすばやく姿勢をたてなおして着地すると、練りあげた気を爆発的に解放した。逆立つ髪の毛が金色に輝き、燃えるようなオーラが全身をつつみこむ。

悟飯はメガネに手をかけ、わきにほうった。

スーパー
超サイヤ人。

15番に見せたときのような中途半端なものではなかった。目の前の強敵を倒すために全力をこめた変身である。

その姿を目にした兵士たちからどよめきがおきる。

「なっ、なんだと……!？」

マゼンタもまた、驚愕^{きょう かく}に青ざめた。カーマインはひきつった顔で固まっている。

ヘッドだけは身を乗りだし、悟飯の姿に興奮していた。

「……トリックじゃない！ ホントに宇宙人か」

悟飯が飛んだ。一気にガンマ1号との距離を飛びこえ、目にもとまらぬスピードで蹴りを二発、右のフックから左の拳打を一瞬のうちにたたきこんでいく。

ガンマ1号は悟飯をにらみかえしながら、ふき飛ぶ身体を静止させた。

「……その変身は想定内だ」

こんどは1号が猛然と飛び出した。悟飯にかわす間もあたえず胴に腕をまわし、加速してクレーターの内側の壁につっこんでいく。そうしてそこに悟飯を押しつけ、そのまま壁で身体をけずりるように飛びはじめた。

「くっ……くっ……」

ふりきれなかった。悟飯は気を左手に集中させ、ガンマ1号に押しあてる。

ドン！

ゼロ距離ではなされた気功弾をかわして、1号が悟飯からはなれる。

悟飯は岩のうえをすべりながら、さらに両手から気功弾を連打した。

「はあっ！」

だが、1号はそれらをすべてかわしていく。かわしながら腰のホルダーから銃を引きぬき、悟飯にむけて反撃のビームを撃った。

大出力のビームを、しかし悟飯はさしだした両手でうけとめる。行き場をうしなったビームは、何本にも分裂してめちゃめちゃな方向に飛び散った。

「わああああ!!」

悲鳴をあげながら兵士たちが逃げまどう。ビームの流れ弾が基地にいくつも爆発を引き起こしていた。

「しまった」

舌打ちしながら1号が銃をしまう。そこへ、悟飯がヒザを突きだしてつっこんできた。

とっさにうけた1号だったが、こらえきれずふっ飛ばされる。

着地した1号に、追ってきた悟飯が拳を構えてむかってくる。1号もまたすばやく姿勢をたてなおし、悟飯に飛びかかった。

一発、二発と打ちあっていったん距離をとった両者は、ふたたび距離を詰め、たがいの攻撃をうけとめた格好で組みあった。

すさまじいパワーの拮抗するなか、悟飯と1号がにらみあう。

「パパいいぞ！ がんばれー！」

声援をおくるパンの横で、ピッコロは難しい顔をしていた。

「くそ……まずいな……」

「え？」

「あいつは戦いながら相手の戦力や動きを学んでいるようだ」

悟飯の蹴りをうけた1号が、大きくふき飛びながらもなんとかふみとどまる。

それから身体をおこし、まっすぐ悟飯を見かえして言った。

「これがおまえのすべての力か？」

「なに？」

ガンマ1号は、サッサッと胸のあたりをはらいながらつづけた。

「そうであればおまえに勝ち目はない」

「なんだと！」

極端にスピードがあがったわけではない。ただガンマ1号の動きは、完全に悟飯の意識の死角をついたものだった。
気がつくと目の前に1号の顔があった。反射的に拳をくりだすが、あたらない。逆に胸に相手の拳がめりこんでくる。

「ハアッ！」

肺から無理やり息を吐きださせられる。

一瞬、悟飯の動きがとまった。そのスキをついて、ながれるような動きでガンマ1号は悟飯の身体に組みつき、投げ落とす。
敷石が大きくめくれ、悟飯の身体が地面にめりこむ。

「ぐっ……」

「い、いいぞ、すばらしい！」

ヘドが興奮してさけぶ。

「それでこそボクのガンマだ！」

悟飯の攻撃はすべてむなく^{くう}空を切っていた。そして、1号の攻撃は逆におもしろいほどあたる。ハイキックを見切られて背中^{しゅとう}にヒザをたたきこまれ、顔面に手刀、さらにまわし蹴りからバランスをくずしたところを組まれて投げ飛ばされる。

悟飯は石ころのように飛ばされて近くの建物に激突し、^{ふんじん}粉塵と^{はへん}破片をまき散らした。

「ちい……！」

ピッコロはそこで短く舌打ちした。そうして腰を落とし、パンに耳打ちする。

パンがわかったという顔でうなずいた。

「く……このっ……」

悟飯は歯をくいしばり、なんとかおきあがろうとする。

見やった先にはゆっくりとこちらに歩いてくるガンマ1号の姿があった。

そのときだった。

「いったーい!! キャー！」

パンの悲鳴が響いた。

悟飯が顔をあげ、ガンマ1号が声の方向をふりかえる。

「パン!!」

悟飯がさげんだ。その視線の先には、タワーのテラスのうえでレッドリボン軍の兵士につかみあげられているパンの姿があった。

「やめろ、なにをしているんだ！」

さげんだのはガンマ1号だった。

「子どもに手をだすんじゃない！」

「え」

パンをつかんだふりをしていたのはもちろんピッコロだ。パンとしめしあわせていためつけるふりをしていたのだが、まさかレッドリボン軍の人造人間にとめられるとは。

「うあああああああああ——!!」

悟飯のおたけびが^{じな}地鳴りのようにあたりをふるわせた。

全身をつつむオーラが爆発したかのように大きさをまし、それが周囲の空気をまきこんで竜巻のような上昇気流をつくりだす。オーラの輝きを帯びたその気流は、あたかも天を衝く巨大な光の柱のようだった。

光の柱はさらに天高くのびると、上空の雲をつらぬいてちりぢりにふき飛ばした。とたん、あれほど激しかった雨がとつぜんやんでいった。

雨があがるとともに光の柱はしだいにうすれて細くなり、やがて消滅する。

消えゆく光の向こうから悟飯がふたたび姿を見せる。

髪の毛は本来の黒にもどり、金色のオーラの輝きもほとんど見えなくなっていた。

「……………」

ガンマ1号は悟飯になにがおきたのかはかりかね、ようすをうかがおうとした。

悟飯の目が1号にむけられたと思った刹那^{せつな}。

1号の予測をうわまわるスピードで悟飯が飛びだした。

動きそのものにかわりはなかった。予測どおりの軌道で予測どおりに攻撃がくる。

1号は悟飯の拳を止めるために、手のひらを突きだした。

だが、パワーは予測の範囲外だった。いままではかるがるうけ止めていた拳が、ガンマ1号の守りを突きやぶって顔面を打つ。

姿勢をくずした1号に間をおかず追撃の蹴りがはいった。

「くっ……！」

とつぜん悟飯のパワーがはねあがったことを不思議に思いながら、1号は空中で姿勢をたてなおそうとした。

だが、悟飯はすさまじいスピードで1号の背中にまわりこんでいた。

バキッ！

背後から手刀^{しゅとう}をくらい、1号は地面にたたきつけられる。

1号はすばやく身をおこしながら、とまどったように上空の悟飯を見あげた。

「な……なんだ？」

学習が追いつかない。おなじ人間のはずなのに、どうしてこのみじかい時間でこんなに急にパワーアップするのか。

悟飯はその1号を悠然^{ゆうぜん}と見おろして、それからパンのもとへむかおうとふりかえる。

その目の前に、ガンマ1号がすべりこむようにあらわれた。傷だらけだったが、その目の闘志はおとろえていなかった。



「いいぞ、ついに覚醒^{かくせい}した！」

「わーいわーい」

悟飯が人造人間をうわまわる力で戦いはじめるのを目にして、ピッコロとパンはよろこびのあまり拳をあわせてグータッチし

た。

ヘドはといえば、想像をこえた悟飯の力にぼうぜんとするばかりだった。

「そんなバカな……」

ガンマはオリジナルのセルにだって勝てる。楽勝でだ。そういうふうにした。

それを孫悟飯は圧倒している。宇宙人はそんなに強いのか？

いっぽうマゼンタは顔をひきつらせて孫悟飯の戦いを見ている。

「ぐぐ……！」

すこし前まではこちらが押していたはずだったが、いまは完全に孫悟飯が優勢だった。

このままではまずい。ヘドめ、なにがガンマだけでじゅうぶん、だ。

そしてガンマ2号は1号と悟飯の死闘を静かに見つめていた。

「悪の秘密組織……ってなんだ！」

ヒジ打ちを腕でとめながら、悟飯は1号にむかってそうたずねた。

蹴られた勢いで距離をとると1号は銃をぬき、悟飯にむけながらさげふ。

「おまえたちのことだ！」

銃の先端でエネルギーの球が成長していく。

悟飯はそれを見かえしたまま動こうとしなかった。

1号が引き金を引く。

ドン！

「ふざけるな！」

飛来したエネルギー弾を、悟飯は左腕をふるって打ちはらった。

はじけたエネルギーはバラバラになって、あたりにふりそそぐ。

そこかしこではげしい爆発が起こった。

それを見ていたマゼンタの顔からは、すっかり余裕がうしなわれていた。

「それが子どもを誘拐したヤツの言うことか！」

怒りの表情で近づいてくる悟飯に、ガンマ1号ははじめて冷静さをうしなっていた。

「悪の組織はそっちだろ！」

「……ちがう」

「お、おちつけガンマ！」

ヘドが混乱する1号にさげふ。1号が安定しないとみるや、ヘドは自分の護衛のために近くにいた2号にむきなおった。

「2号、おまえも加勢するんだ！」

「はっ！」

命令を待ちかねていたように、2号が飛びだしていく。

「おっと!!」

ガン！

何者かの声とともに、2号の後頭部になにかがあたった。見まわすと、そばにナンバー兵がつけているヘルメットがころがっていた。

声の主をもとめて顔をむける。頭上に見おぼえのある姿があった。

「ジャマはさせないぞ」

「なに？」

ピッコロが腕組みをして見おろしている。

「なんと」

2号の顔に驚きの表情がうかび、そしてそれはすぐに喜びにかわった。

「ピッコロ大魔王だったか」

「大魔王じゃない。ただのピッコロだと言っただろ」

その言葉とともにピッコロの身体が強烈な気をまとう。身につけていたレッドリボン兵のスーツがはじけ飛び、潜在能力の解放で身体を黄色に染めたピッコロがそこにいた。

「ピッコロさん？」

悟飯はとつぜん——でもなんでもないのだが——のピッコロの出現に気をとられていた。

そこにガンマ1号がパンチをはなつ。もちろん悟飯はそれを見切ってかわした。

戦いが再開される。

悟飯のパワーに圧倒されていた1号だったが、その学習能力によってしだいに差を埋めはじめていた。

「ホントに生きていたようだな」

その戦いをしりめに、ガンマ2号はピッコロをまっすぐ見かえしていた。

「まさかこりずにボクにやられにきたのかな？」

「さっきとはひと味ちがうつもりだ」

ほとばしる力のオーラとともにピッコロがガンマ2号を見おろす。

2号は両手を前につき、クラウチングスタートの姿勢をとって言った。

「……こんどは逃げるなよ」

いいざま、2号は爆発したと思えるほどの勢いで地面を蹴った。そうして、弾丸のような加速でピッコロにむかって飛びだしていく。

2号のくりだしたパンチをピッコロは右手ひとつでうけとめていた。同時にピッコロのはねあげたヒザが2号のみぞおちにきまる。

動きのとまった2号の頭上から、ピッコロの拳がたたきつけた。

勢いよくふっ飛んだ2号は、庭園の土台につっこんでいった。

悟飯はガンマ1号との格闘をつづけていた。

悟飯は1号の突きをかわして手刀で姿勢をくずしてから、首をきめて相手を抱えあげる。そうして、投げを打つためにふんばりながら、頭上のピッコロにむかって言った。

「なんで、ピッコロさんが——」

ピッコロはたちあがろうとしている2号にむかいながら、悟飯をにらむように言った。

「説明してる場合か！ 戦いに集中しろ！」

「はっはい！」

ピッコロの鋭い声におされたように、悟飯は1号を投げおとした。

その衝撃で、庭園の**いつ** **かく** **ほう** **かい** 一画が崩壊していく。

庭園に降り立ったピッコロの前に、ガンマ2号が立っていた。

見たところ、めだったダメージはないようだ。

「なにをしたんだ、こんな短時間で。それとも隠していたってのか」

「フン、教えてやるもんか」

ピッコロは警戒しながら身構えた。

だが、2号は余裕すら感じさせる笑みをうかべる。

「またか……しかしそれでもボクの実力には、ざんねんながらおよばないようだよ」

「なに？」

悟飯の優勢はかわらなかった。

だが悟飯の蹴り二発をもらい受け、相当のダメージをくらったはずが、1号はまるでこたえないとでもいうようにむかってきた。相手のヒジをヒジでうけながら悟飯が言う。

「おまえ、疲れしらずか……」

「人造人間だからな。エネルギーが切れるまで全力がだせる」

たがいにうしろに飛んで距離をとる。構えをとりながら悟飯がたずねた。

「残りのエネルギーは……？」

「まだ八二パーセントのこっている」

悟飯は顔をひきつらせた。

「げ……！ マジか……」

「くそっ、たいしたヤツだ」

ピッコロとガンマ2号は高速で飛行しながらはげしい攻防をくりかえしていた。だが、ピッコロが見ぬいたとおり、敵はこちらの技や動きを学習して対応している。

しだいにピッコロはガンマ2号におされはじめていた。

「ぐはっ！」

ついに2号のパンチがピッコロをとらえた。

「これほどパワーアップしても追いつけない」

ふき飛ばされたピッコロは背中からパイプラインに激突し、突きやぶった。

「ヘド博士の傑作だからね」

姿勢をたてなおすピッコロに2号がせまってくる。

「くっ」

ピッコロは周囲を見まわし、近くのガレキを気で**かたまり** 大きな塊をつくりあげた。

「おいしいな。フンッ！」

そして近づいてくるガンマ2号になげつける。

「おいしい？」

2号はすばやくぬいた銃でガレキを撃った。砕^{くだ}け散^ちるガレキのむこうで、額に指先をあてるピッコロの姿があった。指先は気の輝きを宿し、電光のようにパチパチとはじけている。

「なにがだ」

「おまえは……わるいやつじゃない」

ピッコロは光のやどった指先を、ガンマ2号にむかって突きだした。

「バカな命令にしたがってるだけだ……！」

ビームのような高密度の気と、その周囲で細く長い渦^{うず}を巻^きく気功波^{きこうは}が組みあわさった強烈なエネルギーが2号におそいかかった。

魔^ま貫^{かん}光^{こう}殺^{さつ}砲^{ぽう}。ピッコロの必殺技である。

「ハッ」

2号は魔貫光殺砲のエネルギーがとどく寸前、バリアをはってそれをはじき飛ばした。

「それがどうした！」

はじかれた気があたりに飛び散って爆発を起こす。兵士たちの逃げまどう声が響いた。

「ボクたちはそのためにつくられたんだ……」

ピッコロは指を突きだしたままの姿勢でつづけた。

「その命令をだしたドクター・ヘドも、マゼンタからまちがった情報をつたえられていたとしたら……？」

「そんなことはない！」

さけぶや、ガンマ2号はピッコロに突進する。その蹴^{ふく}りを腹部^{ふぶ}にうけ、ピッコロは2号とともに庭園のわきにある谷へとおちていった。

ピッコロは谷のなかを走るモノレールのうえにのがれていた。

ガンマ2号もピッコロにむきあうように立っている。

苦痛に顔をゆがめながら、ピッコロは言った。

「うすうす気がついてはいるはずだ」

「……だまれ」

2号はピッコロをにらみつける。そうしてこきざみに肩をふるわせながらうつむいたかと思うと、とつぜんピッコロにおそいかかってきた。

反応できないピッコロにパンチを一発、二発とくらわせ、たおれたところを足をつかんでふりまわしはじめる。

ブンッ！ 2号は底の見えない谷にむかってピッコロをほうった。

遠のく意識のなか、ピッコロはどこまでもおちていく自分を感じていた。



——すこしおまけをしておきました。

シエン ロン

神龍の声が聞こえた。

天空を舞う龍の姿が見えたと思ったそのとき、ピッコロは自分のなかに新たな力が生まれつつあることを感じていた。

ピッコロの背に光の輪が走り、そのなかに光で描かれた樹木——故郷ナメック星の樹アジッサ——が成長していく。やがて光の樹は光の葉をつけ、まるい光の紋章となった。

それは、ナメック星人の誇りをあらわすシンボルだった。

ピッコロの落下がとまり、身体がオレンジ色の光につつまれていく。

とつぜん、その光が爆ぜた。

「……え？」

気づいた悟飯が動きをとめる。

それは人造人間たちもおなじだった。

谷底からなにかがあがってくる。

悟飯たちの見守るなか、全身をオレンジ色にそめた人影があらわれた。

ピッコロ——だった。

大きかった。もとのピッコロも長身だったが、確実にひとまわりは大きくなっている。

身体つきも小山のようだった。胸板は厚くなり、肩も大きくもりあがり、手足は丸太のようだった。顔つきも獐猛な闘士を思わせるゴツゴツとしたものに変貌している。

だがなにより目を引いたのは、その全身がオレンジ色に輝いていることだった。

「!?」

ガンマ1号がとっさにうしろへ飛ぶ。

音もなく浮上したピッコロが、ゆっくりと庭園のはしに降り立った。

ズン、と音をたてて地面が沈む。ふみだすたびに、地響きをたてて地面が割れるのだ。

「今度は——」

ガンマ2号がいらだたしげにさげんだ。

「なんだー！」

エネルギーを解放した2号が、加速しながらピッコロへとつつこんでいく。

「ダアアアああああああ！」

すさまじいラッシュだった。ピッコロの胸板に、いままで見せたこともないスピードのパンチがつつぎ打ちこまれていく。

それが、まったくきいていなかった。それどころか身体がゆらいでもいない。

ピッコロはガンマ2号を見おろした。それから表情もかえずにふりかぶり、2号にむかって拳をたたきつけた。

とてつもなく重い一撃だった。2号はなすすべなく地面に激突し、身体をめりこませる。

ピッコロは顔をひしゃげさせ、動けなくなった2号に顔をむけた。

「しるか」

低くそう言ってから、ピッコロは自分の拳に目をやる。

「神龍のヤツ、ずいぶんオマケしやがったな」

ヘドはその光景をしんじられない面持ち^{おもも}で見つめていた。

「そ、そんな……」

「な、なにをしているおまえたち！ 撃て、撃ち殺せ！」

マゼンタはぼうぜんと戦いを見ていた兵士たちにさげんだ。その声でわれにかえったか、兵士たちが及び腰ながら銃を構える。

ピッコロに、悟飯に銃弾が撃ちこまれた。ふたりの身体のうちで無数の銃弾が火花をちらしたが、まるできいてはいなかった。

「く、くそ……！」

マゼンタはおびえた表情でじりじりとあとずさる。

「総帥^{そう すい}」

カーマインの声に、マゼンタがうなずいた。

「ああ、こうなったら……！」

悲鳴をあげて逃げまどう兵士たちのなか、ヘドはとつぜん姿を消したマゼンタたちをさがしていた。

「……？」

全力で走りさるふたりのうしろ姿を見つけて、ヘドは眉をひそめた。

ふたりのむかう先には小型の飛行マシンが見えた。逃げようとしているのか？

いや、ちがう。

「あ、あいつ……」

飛行マシンはすぐ目の前だった。

「こらーっ！」

必死で走るマゼンタたちは、背後から聞こえてきた幼い声に思わずふりかえる。

「逃げるなー！」

パンだった。手錠ははずしたようだった。見た目はただの小さい女の子が、武装したガードの兵士たちを蹴り倒し、殴り飛ば^{なぐ}してせまってくる。

「ひい！」

マゼンタの口から悲鳴がもれる。

「総帥はお先に」

カーマインが銃をぬき、マシンに走るマゼンタをかばってパンの前に立ちふさがった。

「このガキっ！」

言うや手早く銃身をスライドさせ、パンをねらって撃つ、撃つ、撃つ。

「わっ！ わわっ！」

何発も撃ちこまれた弾丸を、パンははねるようにかわした。

と、カーマインの銃が飛んできたビームに破壊されていた。

「な、なにをする！」

手首をおさえてビームの方向を見たカーマインは、そこにガンマ2号とピッコロがいることに気づいた。

「ガンマ……！」

2号は怒りをあらわにカーマインをにらみつける。

「たったいま確信した。どっちが悪か……！」

つぎの瞬間、カーマインにパンが飛びかかっていた。横^{よこ}面^{つら}に蹴りをもらってリーゼント頭が大きくぐらつく。

「えいっ」

それからパンはカーマインの正面に着地して、腹に拳をくいこませた。小さな身体からは想像もつかない一撃に、カーマインは悶^{もん}絶^{ぜつ}した。

「おおおおお……」

カーマインはよたよたと二、三步あとずさって、ヒザからくずれおちた。

それを見ていた2号とピッコロがたがいに目をあわせ、うなずいた。同時にピッコロの身体がもとにもどっていく。

「悟飯！ もういい、戦いをやめろー！」

悟飯はガンマ1号ととっくみあいの最中だった。

「……いったい……どうしたんですか？」

「あがあ？」

ガンマ1号のアゴをつかんだままの格好で、悟飯が顔をあげる。

「どうやら双方に誤解があったようだ」

ピッコロの言葉をすぐには理解できず、悟飯と1号はきょとんと見かえすばかりだった。

DRAGONBALL SUPER



そのろく
其之六

めど きょうふ
目醒める恐怖





ヘドは高速チューブをつかってラボにむかっていた。マゼンタのあとを追ってのことだった。

ヘドの乗った移動用のカートが、チューブづたいにラボのなかにはいっていく。

マゼンタの姿はすぐに見つかった。ラボの中央、セルマックスの培養カプセルのそばでなにかしている。

「なにをするつもりだ！ ……まさか！」

「そうだ、セルマックスを起動してやる！」

マゼンタはカプセルのコントロールパネルにとりついて、必死の表情でキーボードをたたいているところだった。

「！」

マゼンタに氣をとられて、ヘドはチューブの終点が近づいていることをわすれていた。

カまかせにカートのブレーキを引く。だが、すこしスピードが落ちただけだった。

ヘドはカートから立ちあがり、チューブの切れ目から飛びおりた。

うけ身をとってころがるヘドの頭上で、カートがストッパーに激突して爆発する。

ころがった勢いでマゼンタのすぐうしろまでやってくると、ヘドはポーズをつけながらはねおきた。

「とうっ！」

気づいたマゼンタが肩ごしにふりかえる。ヘドはさけぶように言った。

「バカなことはやめろ！ ガンマたちはまだ戦っている！」

「バカはおまえだ」

マゼンタの手には拳銃がにぎられていた。それをまっすぐヘドにむけながらマゼンタは大声でわめくように言った。

「楽勝じゃなかったのか！ キサマなんかを信じたせいでこのピンチだ！」

「ガンマたちは混乱しているんだ。たおすべき敵に悪意が見えてこないから」

必死でさけぶヘドに、マゼンタは小バカにするような目をむける。

「フン、それはキサマがくだらないヒーローの要素なんかを植えつけたせいだ！」

ヘドはくやしげに顔をゆがめた。

「いつか息の根をとめてやることを楽しみにしていたぞ」

マゼンタはそう言うと、傲慢な笑みをうかべて引き金を引いた。

パンと乾いた音が響く。ヘドは胸をおさえ、力がぬけたようにヒザをついた。

「う……うう……」

「フン」

たおれたヘッドを満足げに見おろして、マゼンタは作業にもどった。

モニター上には、最終段階のパスワード入力が表示されていた。なれた手つきで入力をおえると、マゼンタは勝ち誇った顔で球形の巨大なカプセルを見あげた。

「よし……」

あとは、起動用のメインスイッチを押すだけだった。

と、くるとバレリーナのように回転しながらマゼンタの背後に立つ影があった。

驚きにマゼンタがふりかえる。

「ド……ドクター・ヘッド!?!」

ヘッドは胸に穴のあいた白衣のエリをただし、ひとつずつボタンをはずしながら言った。

「忘れたのか？ ボクの皮膚^{ひふ}はあるていどの衝撃ならたえられるように改造したって……」

白衣^{はく い}をぬぎすてたヘッドは、ヒーロースーツに身をかためていた。

マゼンタがくやしげな顔になってうつむく。

「そうか、そういえばそんなことを言ってたな」

ヘッドはニヤリと笑って、右手ににぎった光線銃をマゼンタにむけた。

「だが——」

マゼンタが顔をあげる。邪悪^{じやあく}な笑いとともに。

「わたしもそれに近い処置はしているね」

言いながらマゼンタは大きく腕をふりかぶり、なぜか近くにおいてあった衣装ハンガーを引きよせる。

ヘッドがいぶかるなか、マゼンタはていねいに上着をぬいでシワをとり、ひとつひとつハンガーにかけていった。

背中をまるめるようにしてちまちまとスーツやシャツをかけおえると、マゼンタは突然背すじをのばし、不敵^{ふ てき}に笑いながらヘッドにむきなおった。

「天才からみればたいした改造じゃないかもしれませんが、おまえよりは強いはずだ」

マゼンタの上半身はぶあつい装甲^{そうこう}におおわれている。

ヘッドはくやしげに顔をゆがめてじりじりとあとずさった。

「ククク……こんどこそおまえはおわりだ」

追いつめられたヘッドは、顔の前にもちあげた手首にむかって言った。

「ハチ丸^{まる}」

ブーン。

不意に聞こえた羽音^{は おと}に、マゼンタがきよとんとなる。

「ん？」

首のあたりになにかがふれた感覚があった。間^まをおかずするどい痛みがはしる。

マゼンタはあわてて首のあたりをたたいた。ふたたび聞こえた羽音がとおざかっていく。

「ぐおおおおおお！」

マゼンタが苦しみの声をあげた。

「言っただろ。改造しても人間の部分が残っていたら、ハチ丸の毒でイチコロだって」

のどをかきむしりバタバタとあばれるマゼンタに背をむけ、ヘドはほくそえんだ。

「あ^{ばく だい}んたの莫大な資金は研究者からすれば魅力的だ。ボクはいくらかいて、ガンマたちと逃げようと思う」

マゼンタは苦痛にもだえながら、さっきまで操作していたパネルへと近づいていく。

「ぐぎぎぎぎぎぎ……」

のこった力で、マゼンタはパネルに^{こぶし}拳をたたきつけた。

「うおおおおおお！」

ガシャンとガラスのわれる音とともに、最後のスイッチがはいった。

カプセルののぞき窓から強い光がはなたれる。同時にその表面を放電が走った。

「しまったあああ!!」

ヘドのとり乱した声が響くなか、ラボ全体が激震におそわれたようにゆれはじめた。



あちこちでサイレン音が鳴り響いている。

それ以外は、さっきまでの戦いがうそのように基地はしずまりかえていた。

「どうなっているんだ、2号」

まだ事情がのみこめていない1号が2号を見る。

「どうやら^{くも ゆ}雲行きがかわってきたみたいだ」

2号がこたえる声にかぶさるように、飛行機のエンジン音が聞こえてきた。

タワーのわきにカプセルコーポレーションの飛行機がおりてくるのが見えた。

「よし」

^{そう じゅう せき}操縦席のブルマがハッチを開いた。

「一番乗りー！」

飛びだすようにおりてきたのはトランクスだった。すぐあとに^{ご てん}悟天がつづく。ハッチのむこうから、ようすをうかがうようにそっと身を乗りだしたのはクリリンだった。クリリンのあとからゆっくりと歩いてでてきたのは18号。

最後におりてきたブルマが、ピッコロたちにむかって手をふった。

「たの^{すけ と}もしい助っ人にきてもらったわよ。クリリン以外は」

「傷つくなあ」

クリリンはふてくされた。

「こう見えても^{ちよう じん}警察署じゃ超人って言われてるんすからね」

悟天が悟飯を見つけてかけよってくる。

「あ、めずらしいな。にいちちゃんも戦いにきたんだ」

悟飯は目をすがめて悟天のほうを見た。

「悟天か？」

それからやはり見づらそうにトランクスに顔をむけ、手をあげてあいさつする。

パンを見つけたブルマがかけよってきた。

「あっちゃっと、パンちゃんまでいるじゃないの。いくつになったの～？」

「えっとね、三歳」

目の高さをあわせて話しかけるブルマに、パンがにこにここと答えた。

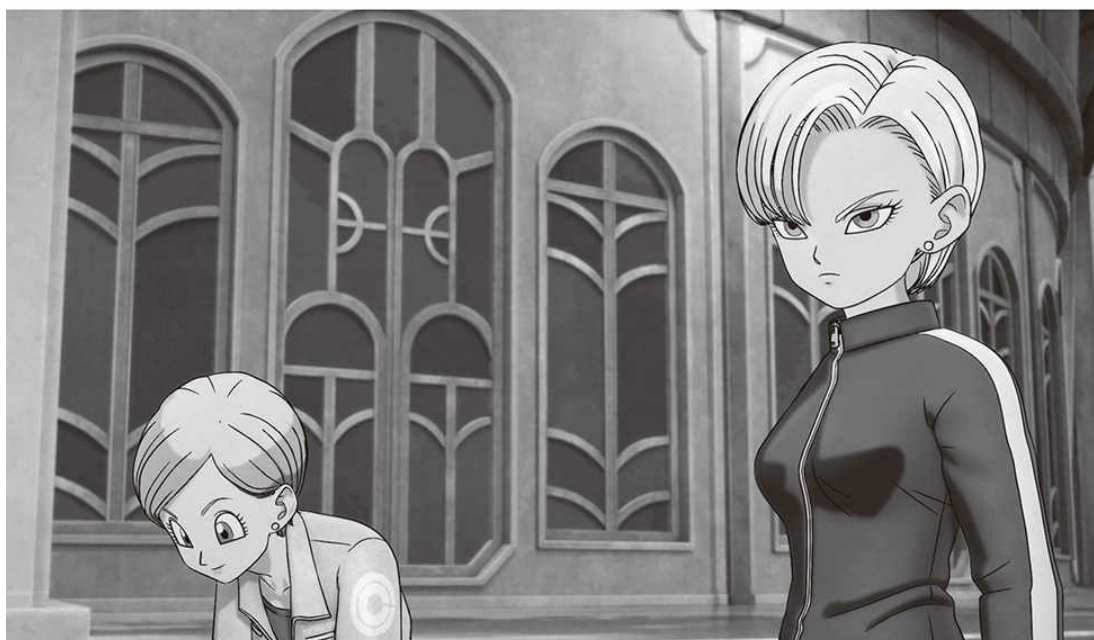
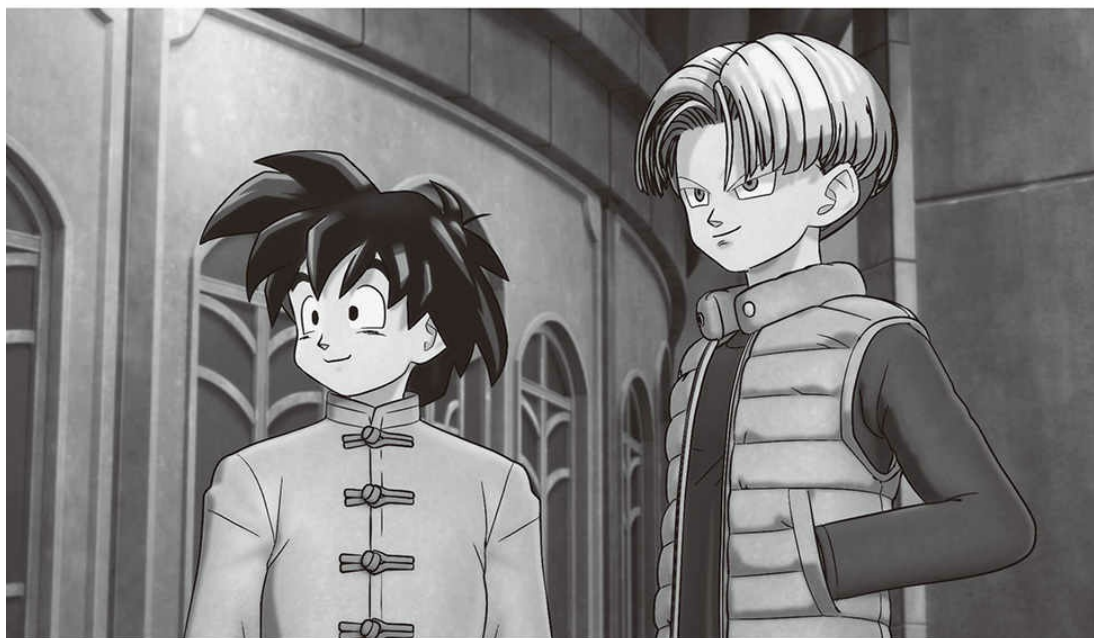
そのようすを見ていた18号が、ガンマたちに目をむけて言った。

「そいつらが新しい人造人間かい？」

すかさずピースサインをかえすガンマ2号をちらりと見てから、ピッコロがうなずいた。

「ああ」

DRAGONBALL SUPER



「ちょっとカッコイイな」

トランクス言葉に悟天があいづちを打つ。

ピッコロがふたりを見て、けげんそうに言った。

「あのふたりは……まさか」

パンがピッコロを見あげる。

「トランクスくんと悟天くんだよ」

「しばらく会ってないと思ったら、急に大きくなりやがったな」

「サイヤ人はずっとちいさくて、あるときから急に大きくなるんですよ」

悟飯だった。

「父さんもそうだったって言ってるし、ボクもでしょ？」

起動スイッチはマゼンタのせいで完全に破壊されていた。そのほかにもこわされた部分がいくつかあって、通常の解除の操作そのものができない状態だった。

青ざめた顔で、それでもヘドは必死でコントロールパネルを操作していた。

「くっ……くう」

クリリンがガンマたちを横目で見ながら悟飯に話しかけた。

「ど、どうなってるんだ？ 戦ってたんだろ？ あいつらと」

「ええ……」

悟飯はあいまいにうなずきながらクリリンにたずねた。

「ところで、どこかにぼくのメガネっておちてません？ よく見えなくて……」

言いながら、悟飯は細めた目であたりを見回す。

「おまえ、変身すると視力ももどるのか？」

ピッコロがあきれ声で言った。

打つ手はほとんど残っていなかった。やけくそのようにキャンセルボタンを連打するが、もちろんきかない。

ヘドは必死の表情で近くにあるタンクを見た。タンクのなかの培養液ばいようえきが急激に減っていく。そのとなりのタンクもおなじだった。

起動の最終段階がはじまった。タンクから送りだされたさまざまな色の培養液が、くすんだ灰色のセルマックスにふきつけられていく。

「ところでさっきのピッコロさん、なにが起こったんですか？ すごかったですよ。オレンジ色にかわって、恐ろしく気が上昇してました」

「オレンジ色？」

ピッコロは自分の身体からだを見まわした。

「……そうか。自分ではわからなかったが、まあ、おまえのようにオレも覚醒かくせいしたってことかな」

「超カッコよかったよ！ ピッコロさん」

パンがピッコロを見あげる。

悟飯がパンの頭をなでながら言った。

「名前つけてくださいよ。超^{スーパー}サイヤ人みたいに」

「名前……？ どうでもいいがな」

ほんのすこしのあいだ考えてからピッコロは答えた。

「まあつけるとすれば、オレンジピッコロだな」

「オレンジピッコロって……」

「あ……ああ……」

ゴツ、ゴツツとカプセルのなかから聞こえる音に、ヘドはおびえながらあとずさった。

ガコン！

一瞬の^{せいじやく}静寂のあと、とつぜんカプセルの表面がコブのようにふくれるのが見えた。

間をおいて、ふたたびにぶい金属音とともにコブがうまれる。

と思えば、今度はたてつづけにカプセルが変形していく。

「あああ……」

金属のこすれるイヤな音とともに、カプセルの表面にスキマができた。そこから勢いよくにごった液体がふきだしてくる。培養液だった。

さらにカプセルの表面がゆがむ。大きなさけめができて、洪水のように培養液があふれでた。そこから全体にいきいきとヒビがはしる。

つぎの瞬間、カプセルのまんなかあたりがふき飛んでいた。

培養液のしぶきのなかから、巨大な頭部が姿を見せた。それはかつてのセルそのものだったが、ひとつだけ大きくちがう点があった。

巨大なのだ。

その頭部だけで、おそらく人間の数倍の大きさがあるだろう。

「ウガアアアアアアア」

それが^{けもの}獣じみた声でほえながら、カプセルをへし割って身を乗りだした。そうして大魚のように身をくねらせ、カプセル下のプールにたまった培養液のなかへと飛びこんでいく。

たたきつけた水流におしたおされたヘドは、せきこみながらおそろおそろふりかえった。

その目の前で、白くにごる大波とともに巨大な尾が^こ弧をえがいた。

^{ふん どう}分銅のような尾のはしが水底に消える。それからほんのふた呼吸ほどおいて、ザアアと水面がもりあがった。

見あげるヘドの目の前で、プールから身をおこした巨大な影が^{ほ ごえ}吠え声をあげた。

「オオオオオオオオオオオオオオオ」

セルマックス。

かつてのセルのデータをもとに、最高の能力をひきだした破壊衝動^{は かい}だけのバケモノ。

だから、プログラムの完成までまてと言ったのに……。

崩壊^{ほう かい}するラボのなか、ヘドはコントロール不可能な生ける恐怖にただふるえることしかできなかった。



セルマックスはなにかに気づいたように顔をあげた。

それからじっと横をむいて遠くを見るように目を細めてから、とつぜん歯をむきだしにして威嚇^{い かく}の表情をうかべた。

「オオオオオオオ」

バン！ 背中の翼をひろげ、セルマックスが身をかがめる。

ヘドは必死でその場を逃げだした。

ラボは基地のきずかれた大きなクレーター^{つら}に連なる、ちいさなもうひとつのクレーターの地下深くにあった。

「ガオオオオオオオ———……」

その穴の底から獣の吠え声のような、あるいは巨人^{お たけ}の雄叫びを思わせる声がとどろいた。

「なんだ？」

気づいた悟飯が顔をあげる。と、小クレーターから飛びだしてくるものがあった。

それはひとり乗りのフライングバイク^{てい えん}だった。

バイクは大きくジャンプして基地の庭園^{てい えん}のはしに着地すると、バランスをくずして横倒しになりながら数十メートルをすべってようやくとまった。

煙をあげるバイクからはいだしたのはドクター・ヘドだった。ヘドは手首の通信ユニットにむかって言った。

「セルが……セルマックスが起動した！」

ヘドの通信を聞いたガンマ1号が驚きの声をあげた。

「セルマックスが!?!」

おなじくヘドの言葉を受信した2号が立ちあがる。

ラボの方向でちいさな爆発がおきた。ふきでる煙を突きやぶってなにかが上昇してくる。

マントのように広げた細長い翼を負い、タテに細長いカブトをかぶったような頭。関節はふしくれだっていて、身体の表面はまだらな模様におおわれていた。

「ハッ」

ふりかえったヘドの顔が驚きにゆがむ。

セルマックスがその力を解放しようとしていた。

「グオオオオオオオオオオ」

セルマックスが吠える。同時にその巨体をおおう巨大なエネルギーボールが出現した。

輝くボールのなかでは、すさまじい勢いでエネルギーが複雑な渦を描いていた。それは恐ろしい速度で大きさをまし、広大な基地の半分以上をのみこんでいった。

ヘドはバイクに身体が引っかかって動けなかった。光の壁がせまりくるなか、ヘドは絶望の顔でガンマたちを見た。

「博士！」

さけんで2号が、1号が飛びだしていく。

「くっ、ぐわあああ」

1号が圧力にまけて押しもどされる。2号は1号に目もくれず、ヘドを救出するためにさらに進んでいった。

「うおおおお！」

だが、エネルギーの壁は突破をゆるさなかった。やがて2号も姿勢をくずし、後方にふき飛ばされていった。

「うお!？」

衝撃はピッコロたちのもとにもおしよせていた。

おどろきおびえる仲間たちの声が響く。

だが、そこまでだった。エネルギーボールは出現したときとおなじように突然縮みはじめ、やがて消滅した。

ちいさかったはずのクレーターが、ピッコロたちのいるほうの倍以上の大きさにえぐりとられていた。庭園も半分以上がなくなっている。

クリリンが、あたらしいクレーターのうえにうかが巨体に半分うめくような声をだした。

「な……なんだあれ」

「チ……チィ……」

ピッコロは顔をしかめた。とてつもない気だった。戦ってどうこうできる相手とはとても思えなかった。

セルマックスがぎろりとこちらに顔をむけた。

「まさか、デカイセルか!？」

18号が驚きをかくさずに言う。

「ブハアー」

空中のセルマックスが、白濁したまがまがしい息を吐きだした。

「くっ、くそ……」

2号が怒りに満ちた目でセルマックスを見た。

「2号……」

1号の声に2号がふりかえる。

「やるぞっ」

めったに感情を出さない1号が、見せたことのない顔でセルマックスをにらんでいた。

「うおおおお」

ふたりの人造人間は猛然と目の前の巨大な怪物に飛びかかっていった。

「オレたちもいくぞ!!」

「……オレたちもいくぞ……って……」

ピッコロの声にクリリンがひきつった顔で笑う。

「悟飯、^{せん}豆だ！」

ピッコロが仙豆をひとつ悟飯へとほうる。悟飯はあわてたようすで、目をしばたかせながら空中に目をさまよわせた。

「え？ ……」

仙豆は悟飯の手をすりぬけて、地面をはねてころがった。

「わっ、わっ、あああ……わわわ」

悟飯はあわてて追いかけたが、仙豆はなんとかはずんでそのまま谷底へおちていった。

いっしょにおちそうになって、悟飯は崖^{がけ}っぷちでなんとかふみとどまる。

「なにおとしてるんだ！」

「すみません、メガネがなくて……」

身をちぢめる悟飯に、ピッコロは顔をしかめてのこった仙豆を帯にしまった。

「もういい！ 仙豆なしで戦え！」

「え……はい！」

飛びだすピッコロを追いかけてようとして、悟飯はブルマを見た。

「ブルマさん、パンをおねがいします！」

「まかせて!!」

悟飯は気合いとともに超^{スーパー}サイヤ人に変身して飛びあがった。

「おもしろそう!! いこうぜ！」

トランクスに悟天がうなずく。

「おう！」

「え……あ……」

おどろきあわてるクリリンをしりめに、18号が舌打ちしながら前にでる。

「チッ、しょうがないね」

「えっ……」

飛んでいく18号を見おくりながら、クリリンがあたふたとする。

「……よし！ いけーっ!! オレはブルマさんとパンをまもる!!」

「いい役まわりを見つけたわね」

ブルマの声に、クリリンはきまり悪そうに下をむいた。



「ガアアアア！」

まるで知性の感じられない吠え声とともに、セルマックスはパンチをくりだした。

ガンマ1号はかわすこともできずおもいきりふっ飛ばされた。クレーターの外壁を突き破り、奥にあった岩山に身体をくいこませる。

「とおおおお!!」

1号を殴^{なぐ}って姿勢をくずしたセルマックスに、その頭部めがけて2号がキックをいれる。

セルマックスはそれをガードしながら、2号を手のひらではらいのけようとした。それをかわし、さらにくりだされたパンチをかわしたところで、2号はふりまわされたシッポに一撃されていた。

「ぐあっ！」

クレーターの底にたたきつけられ、はずんだ2号の身体がさらに近くの斜面に激突する。

「ガアアー！」

セルマックスは2号をさらに攻撃しようとむきなおった。そこへ、悟飯のはなった気功弾^{きこうだん}が炸裂^{さつれつ}する。

セルマックスが悟飯に注意をむけたところへ、後頭部にピッコロ^けの蹴りがきまった。

「オレたちもいるぜー！」

トランクス^{よこ}の蹴りを腕でうけたセルマックスは、背後からの悟天の蹴りをかわせなかった。さらに18号の右ヒザが横^{つら}面にはいる。

だがそれらの攻撃はセルマックスをよけいにたかぶらせただけだった。

悟天をパンチではじき飛ばし、ヒジでトランクスを尾でピッコロをたたきのめし、さらに悟飯と18号を追ってセルマックスが攻撃をくりだしていく。

「くそ……」

「頭^{ゆい}のてっぺんをねらえ！ そこが唯一^{いつ}の弱点だ」

セルマックスから距離をとる悟飯の前で、ガンマ1号が銃をぬきながら言った。

「頭^{ゆい}のてっぺん?!

トランクスたちが聞きかえす。

「こういうこともあろうかと、博士はセルマックスに弱点をつくっておいたんだ」

1号の言葉に、ピッコロはセルマックスの頭部に目をやった。

「弱点……！」

「ただし覚悟しておけ！ 弱点をついたとたん、セルマックスは細胞ひとつのこさないような大爆発をおこし……自分の命もたすからない」

ガンマ2号がやはり銃をぬきながらそう言った。

「え!？」

トランクス、悟天それに18号がおどろきの声をあげた。

そのあいだにも1号はセルマックスに攻撃をしかけていた。くりだされるパンチをかわして激しい銃撃を頭部にみまう。

「ガア!？」

いらだたしげに1号を見あげたセルマックスの側頭部^{そくとうぶ}に、別方向からのビームが命中する。ガンマ2号だった。

「はあああ……！」

悟飯、ピッコロ、それにトランクスと悟天がいっせいに気功弾をはなった。

セルマックスがむきなおる。あたった、と誰もが思ったその瞬間だった。

人間の数十倍あるはずの巨体が消えていた。

「えっ!？」

悟飯が思わず声をあげる。一瞬ののち、頭上に移動した巨大な気配に全員が顔をあげた。

悟飯をねらって巨大な拳が突きだされた。それをまともにくらい、悟飯が地面にふき飛ばされる。

「悟飯!!」

トランクスと悟天はセルマックスからはなれながら気功弾をはなった。

だが、またもセルマックスは超スピードでその場から姿を消していた。

エネルギー弾を構えたまま、18号が顔をしかめた。

「……しかし、頭をねらえ……って言っても……これじゃあ」

「くっ！」

ピッコロはセルマックスを追いかけて超スピードで姿を消した。

そのセルマックスはガンマ1号におそいかかっていた。

「くっ……速い……」

DRAGONBALL SUPER



1号のビーム弾は、超スピードでかわすセルマックスにまったくあたらなかった。すべての銃弾をかわし、勝ちほこった顔で1号にせまってくる。

あとわずかで相手の手がとどくという瞬間、1号がさっとわきの^の退いた。1号の背後にいたのはガンマ2号だった。銃を構え、エネルギーをためていたのだ。

2号はさらにセルマックスをひきつけてから、大きく成長したエネルギー弾を発射した。

ドウツ!!

最大級のエネルギー弾に空気がふるえる。

だが、セルマックスはそれを平然と突きやぶって突き進んできた。

「ガァ!!」

2号におそいかかろうとするセルマックスの横あいからトランクスの気功弾が炸裂する。

いまいまいげにトランクスを追いかけてようとすると、こんどは下から悟天の攻撃が飛んできた。

一度にいくつもの方向から攻撃をうけ、いらだったセルマックスが頭をふりながら怒りの吠え声をあげた。

「もらったあ！」

その声とともに、超スピードでセルマックスの背後にピッコロが出現する。そのままセルマックスの後頭部にとりつき、至近距離で^{きこうは}気功波をたたきこんだ。

「ガ……ガガ……」

セルマックスの動きがとまった。全身をこきざみにふるわせ、攻撃をうけている頭部が白熱して輝きはじめた。

「やったあ！」

トランクスの^{かんせい}歓声が響いた。

だが。

ピッコロの目の前でセルマックスの頭部の光がうすれて消えていく。

「……きいてない……」

「ガアアアア———!!」

セルマックスはとつぜん身をそらし、全身を発光させた。尾の先端にある^{かたまり}塊にあいた穴から指先から、目や口そして身体のいたるところからエネルギービームがほとばしりでる。

「うわあああー!!」

ピッコロたちの声が響く。

ビームはあたりかまわずふれたものを破壊し、焼いた。

「ひいひいーっ！ こっ、こんなのありかよ!!」

トランクスが、悟天がビームの乱舞するなかを逃げまどう。なんとか気の力でガードするが、まともにくらえばただではすまなかった。

ビームはいったん上空にむかったあと、弧をえがいて落下した。それは、離れた場所にいたブルマたちにもおそいかかった。ふりそくぐビームが爆発をひきおこしながら近づいてくる。

「きゃあああー」

ブルマが飛行機にすがりついて悲鳴をあげた。

いちばん前にでて悟飯たちのようすをみまもっていたパンは、せまってくる爆発に足がすくんでうごけないでいた。

「くっ……パーン！」

ブルマに手を貸しながら、クリリンがさげんだ。

その声でわれにもどったか、ふりかえったパンがこちらに走ってくる。

だが、ビームはすぐうしろにせまっていた。そのままではまにあわないことはあきらかだった。

「パーン！ 飛ぶんだ———！」

走るパンの足もとがくずれるのが見えた。足場をうしない、小さな身体がよろける。

つづいておきた爆発の閃光が、パンの姿をおし隠した。

声をうしなったクリリンとブルマのみまもるなか、爆発の煙を突きやぶってなにかが空に飛びあがるのが見えた。

パンだった。

信じられないといった顔で、パンは空中にうかんだ自分を見まわしていた。

「パン、大丈夫か？」

「うん」

パンは、ブルマを背負って飛んできたクリリンにむかってうなずいた。

「よ、よかった……ほー、オレがいてよかったじゃないすか」

クリリンは安心して笑顔になってから、背中のブルマをふりかえって言った。

ブルマが苦笑をかえす。

「まあね。いつでも逃げられるように、飛行機で待機していたほうがよさそうね」



トランクスがとなりの悟天にさげんだ。

「おい悟天、フュージョンだ！ フュージョンするぞ！」

「フュージョン……？ お、おぼえてるかな」

不安そうにこたえた悟天だったが、その心配はみごとに的中した。

手近な岩場におりたふたりは、フュージョンのポーズをとった。

「ん？」

ふたりの動きに気づいたピッコロが肩ごしに見やる。

「フュ———ジョン！ はっ！」

ピッコロの目は、悟天とトランクスの指先が微妙にずれているのを見逃さなかった。

一瞬の輝きのあと立っていたのは、異様にまるっこい例の失敗したアレだった。たしか名前をゴテンクス……あの失敗版でもおなじ名前を名乗るつもりなら。

「……し……失敗だ……くそ……しょうがない！」

ピッコロは言葉を失った。貴重な戦力が三〇分使いものにならなかったからだ。

^{スーパー}
「超サイヤ人！ あ……あれ？」

もちろん、失敗バージョンのゴテンクスが^{スーパー}超サイヤ人になれるはずもなかった。

「くそ……こうなったら突撃だ!!」

ほとんどやけくそでゴテンクスはセルマックスに飛びかかっていった。それをセルマックスはチラリと見ただけで、シッポのひとふりでふっ飛ばしてしまった。

「わ—————！」

「……………!?!」

18号が自分のほうに飛んでくる、みょうにまるい物体に気づいたのは幸運だったといえるだろう。ためらうことなく、18号はゴテンクスをはじき飛ばした。

DRAGONBALL SUPER



「おわっ」

はじかれたゴテンクスがガンマ2号にむかったのはもちろん偶然だった。

そして2号は、むかってくるゴテンクスをジャマだとばかり蹴りあげる。

「ぐえっ……」

攻めあぐねてなにか有効な攻撃方法はないかと探していたガンマ1号にすれば、たまたま飛んできたゴテンクスの存在は渡りに船だった。

1号は両手を組んで高くかけると、ゴテンクスに思いっきりふりおろす。

ドカッ！ ゴテンクスはまっさかさまにおちていった。

「お？」

そこでゴテンクスは、自分がセルマックスの頭のうえにむかっていることに気がついた。

「……しめた！」

気配に気づいたか、セルマックスがあたりをうかがうように動きをとめた。

「だ——！」

ガン！

ゴテンクスに頭突きをくらい、一瞬セルマックスが上下に押しつぶされたように見えた。

ビシ、ビシッとセルマックスの頭にヒビが入る。

「おー！」

1号、2号が驚きの声をあげるなか、セルマックスが苦悶くもんの声とともにのけぞっていく。

「グワアア……」

ピッコロは拳をにぎりしめた。

「はじめてフュージョンの失敗が役にたったぞ……！」

だが、どうやらそれがセルマックスの怒りに火をつけたようだった。大きく口をひらき、エネルギービームをところかまわず吐きちらしはじめる。

あたりに破壊の嵐がふきあれた。

「ハア……ハア……もつと強い攻撃じゃないと……」

狂乱するセルマックスを遠くに見ながら、悟飯がつぶやいた。

「おい！ おまえたち」

ガンマ2号の声だった。声のほうに目をやると、2号は全員にむかってこう言った。

「おまえたち……離れたところから、いっせいに飛び道具でセルマックスを攻撃してくれ！ 身体のどこでもいい！」

「え？ どうするつもりだ……!?!」

いぶかる悟飯に2号はなにも答えない。

1号が2号を見た。

「おまえ、まさか……」

2号はニヤリと笑っただけだった。

「やめろ！」

「もうおそい」

1号が身を乗りだして言った。

「だったらオレも！」

「1号はヘッド博士をたすけてあげてくれ」

1号が目を見開く。

「なに？」

「生体スコープで見てみろよ。博士は死んでいない」

1号がさっきドクター・ヘッドがたおれていたあたりに顔をむけた。短い電子音とともにその表情が驚きにかわった。

「……あ！」

「慎重さがたりないな」

それだけ言うとガンマ2号は拳をにぎり、左右にひろげて力をこめた。

2号の身体が光につつまれていく。苦しげな声をもらしながら。

「ハアアアアアアアア——」

なおも明るさを増しながら、2号は仲間たちにむきなおった。

「さ、さあやれ!! そしてボクが攻撃をしかけたら、思いっきり遠くに逃げるんだ!!」

言うや、ガンマ2号はありえない速度でまっすぐ上昇していった。

遠ざかる2号を見送りながら、ピッコロが言った。

「あいつはなにをするつもりだ！」

「突撃する気だ」

1号が答えた。

「なに!？」

DRAGONBALL SUPER



その な な
其之七

スーパーヒーロー!





ブルマたちは飛行機で上空に退避^{たいひ}していた。

「な、なにやってるのかしら」

不安げに見おろすブルマに、クリリンが真剣^{おもも}な面持ちで言った。

「いっせいに攻撃をあげているですよ！ オ、オレも!!」

ハッチへむかおうとするクリリンに、ブルマが声をかけた。

「クリリン！ 気をつけなさいよ！」

ふりかえってサムズアップしてから、クリリンはハッチの外に身をおどらせる。

そのはるか上空。

地球がまるいことがはっきりとわかる場所にガンマ2号はいた。

その身体^{からだ}がひとときわ輝きを増す。

「はああああ……」

2号は決意の顔で地上を見下ろした。

「はっ!!」

輝く2号の身体は一条の光となって、まっすぐにそのめざす場所へと飛びこんでいった。

地上では、セルマックスに対してピッコロたちが攻撃をしかけていた。

ピッコロが、悟飯^{ごはん}が気功^{きこう}弾^{だん}をはなち、ガンマ1号は銃を連射する。ゴテンクスはとりあえず変顔で注意をひきつけることにしたようだった。

そのなかにくわって、18号もエネルギー弾を撃っていた。

爆発の煙をつきやぶって、18号の前に不意をつくようにセルマックスが姿をあらわした。

「しまっ——」

逃げきれぬ間合いではなかった。18号はぼうぜんと巨体を見かえした。

「気^き円^{えん}斬^{ざん}!!」

クリリンの声とともに回転する刃^{やいば}のような気功^{きこう}波^はが飛来する。18号につかみかかろうとしていたセルマックスが、それをかわして身をひいた。

「クリリンさん！」

ふりかえった悟飯の視線の先には、こちらにむかってくるクリリンの姿があった。

「18号！」

「たすかったよ」

となりにやってきたクリリンに18号が礼を言う。クリリンは言葉はかえさず、ただ当然じゃないかという目をむけた。

ガンマ1号が上空に目をやった。

空の一点にまぶしいほどに輝くものがあらわれた。

「くるぞ！ はなれろ!!」

「みんな、目をつぶって！」

クリリンが前にでた。両手の人差指と中指をこめかみにあて、気合いとともにさけぶ。

たい よう けん
「太陽拳!!」

セルマックスの目の前に目もくらむ輝きがあらわれた。

「グオオオ……」

セルマックスが手で目をかばいながらあわずさる。そのスキをみて、全員がいっせいに逃げだした。

そんななかガンマ1号だけはひとりピッコロたちとは別方向へ飛んだ。

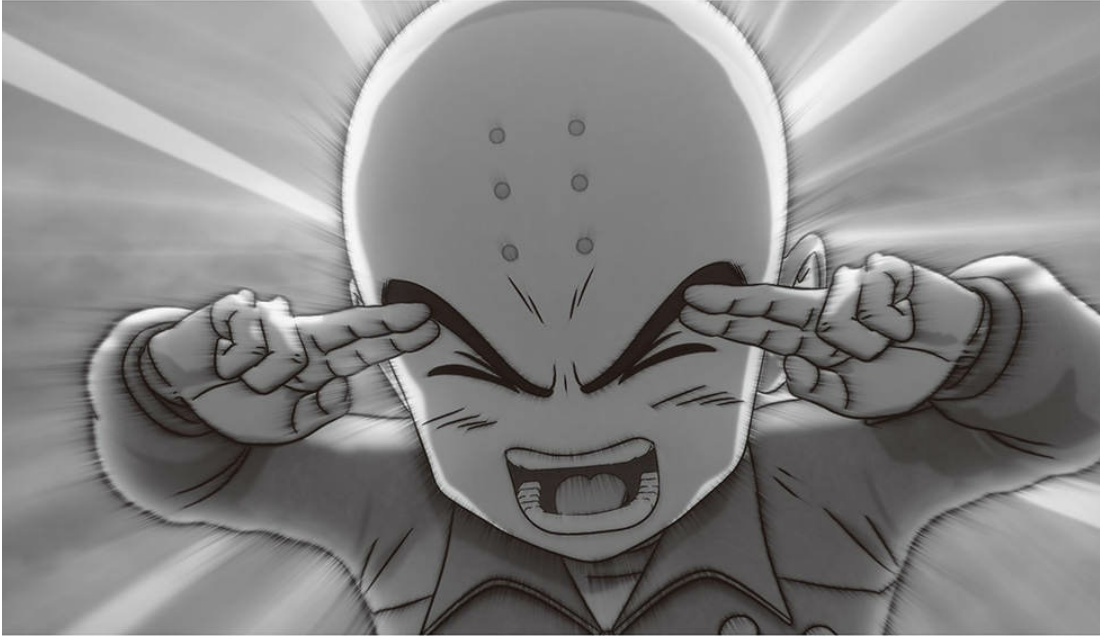
1号がおりたったのはガレキのなかに倒れているドクター・ヘドのところだった。ヘドを確認すると、1号はそのうえにおおいかぶさった。

セルマックスは目をおおっていた手をはなすと、なにかに気づいたように顔をあげた。

「は————!!」

ガンマ2号は輝きながらセルマックスめがけてまっすぐ降下した。

D RAGONBALL SUPER



頭上に目をやりながら、セルマックスが身構^{み がま}えるのがわかった。

「まずい！」

ピッコロがさけぶ。

ガンマ2号より一瞬早く、セルマックスは左腕をかかっていた。

閃光^{せん こう}が走った。激突の衝撃がひろがり、セルマックスの立つ地面が大きく沈む。

「グオオオオオオ」

2号をうけとめたセルマックスの腕に亀裂^{き れつ}が走った。

「があアアアア」

セルマックスの吠え声^{ほ ごえ お}を圧してガンマ2号の絶叫^{ぜつきよう}が響きわたる。

ドン！

セルマックスの左腕がちぎれていた。苦しげに息をつき、あれほどにスキのなかった巨体がわずかにゆらぎはじめていた。

だが、そこまでだった。

ぼうぜんと見おろすセルマックスの前には、地面にいくこんで動かなくなったガンマ2号の姿があった。

セルマックスの顔が怒りにゆがんだ。

「グアアアアア————ツ」

吠えながらセルマックスは左足をふりあげた。

「やめろー!!」

さけびながらピッコロが飛びだした。その身体はふたたびオレンジの光につつまれ、戦士の肉体へと変身する。

ガンマ2号のうえにセルマックスの足がふみおろされる寸前、ピッコロはそこに身体をすべりこませていた。

「!？」

足の裏に違和感をおぼえ、セルマックスが見おろしてくる。ピッコロがはいりこんでジャマをしていることに気づくと、うなり声とともに足に力をこめた。

「ぐああ——!!」

ピッコロが苦悶^{くもん}の声をもらす。

「てりゃあー！」

横あいから悟飯の気功弾^{きく れつ}が炸裂した。

注意を奪われたセルマックスにクリリンがヒザ蹴^げりを入れ、ゴテンクスは下から頭突き^{ず っ}をくらわす。

「どうだー！」

いらだったセルマックスが口からのビームでクリリンたちを追いはらった。

「わー!!」

その間も、ピッコロはセルマックスの足の下で耐えていた。そのピッコロのもとヘガンマ1号がやってくる。ガンマ1号は感謝の目でピッコロを見てから、2号を助けおこしてその場をはなれていった。ヘドのもとへとつれていくためだった。

だが、ピッコロはその場をはなれることができなかった。へたに動けば踏みつぶされる。

クリリンがピッコロの横にきて、いっしょにささえはじめた。

「ピ……ピッコロ……デカくなれよ……」

クリリンは顔をしかめながらそう言った。

「なに……？」

「むかし、デカくなったこと……あつた^{てん か い ち ぶ どう かい}だろ……天下一武道会で……」

「……そうか……わすれていた……」

ピッコロがニヤリとなった。

「うおおおお……」

気合いとともにピッコロの身体が大きくなっていく。

セルマックスがおどろきの表情でピッコロを見る。さらに巨大化するピッコロに足をすくわれ、セルマックスはバランスをくずして
あおむけになった。

身構えるピッコロの目の前で、セルマックスは器用に一回転して立ちあがった。

DRAGONBALL SUPER



DRAGONBALL SUPER



「グガアアア!!!」

「オオオオオ!!」

セルマックスが威嚇^{い かく}の声をあげる。負けずにピッコロもさげんだ。

「ピッコロさん、大きくなれるなんて、もしかして勝てるんじゃないですか？」

近くで悟飯の声が聞こえた。ピッコロはセルマックスに顔をむけたまま答える。

「あまいな」

「え……？」

「デカくなっても強さはたいしてかわらない……ただのハッターだ」

悟飯はぼうぜんとピッコロを見た。大きくなっても強さがかわらない、つまりいい^まになるだけということだからだ。

「そうだ」

ひとことつぶやいて、ピッコロは帯に手をやった。

「ん？ ん？ デカイとさがしにくいな……あつた」

ピッコロは指先に仙豆^{せん ず}をのせて悟飯にさしだした。

「オレが食べようと思っていた仙豆だ。おまえが食べ」

「えっ、さっき食べなかったんですか？ そんな、ピッコロさん食べてくださいよ」

とまどう悟飯にピッコロは言った。

「いいから食べ」

「でも……」

「作戦を思いついた」

悟飯はしかたないという顔で仙豆をうけとり、口にいれた。とたんに失っていた気力と体力が全身に満ちていくのが感じられる。

「はっ!!」

気をいれたとたん、悟飯をとりまくように光るオーラがあふれた。

「悟飯、よく聞け！ おまえがその気をだせばこの世界で一番強い。自分を信じて、すべてを解放するんだ！」

ピッコロは横目で悟飯を見ながら笑みをうかべた。

「見せてくれ、本当の力を……その力で地球を守るんだ！」

「……はい！」

「ガアアアア……」

セルマックスが吠えた。手でさわれそうなまでに、その気が高まっていくのがはっきりわかる。

「くるぞ！」

ピッコロが身構える。横で悟飯も構えをとった。

つぎの瞬間、ピッコロにセルマックスのヒジがはいっていた。間髪^{かん ばつ}をいれず悟飯^{しゆ とう}に手刀がおそいかかる。

それをうけとめた悟飯はセルマックスの肩口を蹴りあげ、顔面に体あたりをくらわせた。

セルマックスはそれを頭突きでたたきおとす。

いれかわるようにピッコロが蹴りをいれた。二発、三発と連続の蹴りがきまる。

だがセルマックスは笑っていた。それに気をとられた一瞬、ピッコロは腹部への一撃で身体をくの字に折っていた。

さらにもう一撃。こんどは左——だったが、攻撃はピッコロの目の前を素通り^{す どお}していった。セルマックスは左腕を失ったことを忘れていたようだった。

そのかわりというように、今度は左ヒザを打ちこんでくる。ピッコロはそれをもろにくらって、大きくうしろへ飛ばされた。そのまま岩壁にぶつかり、前にたおれる。

そのうに飛びあがったセルマックスは、空中で一回転しながら分銅^{ぶん どう}のようなシッポの先をたたきつけてきた。それを横に転がってかわし、起きあがったピッコロの目の前にすばやく移動したセルマックスがあらわれる。

反応できないピッコロの目の前で、しかし、セルマックスが下からアゴに一撃をくらくらうしろへとふっ飛ばされた。悟飯だった。

セルマックスはまたも背後に一回転して着地してみせた。アゴに手をやるところを見ると、やはり悟飯の力は通用しているようだった。

目の前を飛ぶ悟飯を追って、セルマックスが超スピードで追いかける。悟飯はセルマックスが最初に出てきた大穴のところまでやってくると、そこで待ち構えるように静止した。

追いついたセルマックスが拳をたたきつける。それをあざ笑うかのように悟飯は超スピードで姿を消していた。

セルマックスは悟飯の姿をもとめて戸惑^{と まど}うようにあたりを見まわした。

「ガア……？」

と、とつぜんセルマックスの立つ足場が崩壊した。大穴に身を隠した悟飯が、気功弾でその足もとを狙い撃ちしたのだ。姿勢^{つばさ}をくずしたセルマックスは空中に逃げようと翼を開くが、今度は上空に移動した悟飯からの攻撃をうけて穴のなかに落下していった。



ピッコロのダメージは大きかった。息があがり、立っていることさえままならない。

「くそ……おまえらちょっとこい！」

巨大なピッコロの前に、ガンマ1号をふくめた仲間たちが集まってきた。ピッコロほどではなかったが、悟飯以外は誰もがボロボロの状態だった。

ピッコロは悟飯を見た。

「悟飯！」

「はいっ！」

「オレがなんとかしてあのクソツタレを地面にたおす！ チャンスを見てかめはめ波^はでもなんでもいい……めいっぱいのパワーをためてからヤツの頭をつらぬけ！」

「わ、わかりました」

悟飯の表情に迷いが見えた。ピッコロは念を押した。

「めいっばいだぞ。遠慮はするな。すべての力をこの一撃にこめろ！」

悟飯はだまっとうなずいた。

ピッコロが顔をあげた。クレーターの方から強烈な気が近づいてくる。

「くるぞ！」

地面からいくつものビームが飛びだしてくる。さらに手が突きだされ、地面を割ってセルマックスの巨体がいだしてくるのが見えた。

「ガアアア————！」

怒りの表情をうかべ、ピッコロたちをにらみつけてくる。

ピッコロはひざまずいたまま鋭く言った。

「悟飯！」

「はい！」

悟飯がオーラを身にまとう。

同時に、ピッコロは動かない身体を無理やり立ちあがらせた。

「うおおおおおっ!!」

気合いとともに駆けだしたピッコロは、すでにボロボロになっている上着をひき破り、そのままセルマックスの手をつかんで頭をあわせた。

「ガア……」

すさまじい力だった。いまのピッコロでは、なんとか押し負けないようにするだけでせいっばいだった。

「ぐおお……」

気力でねばるピッコロに、セルマックスはヒザ蹴りをたたきこんできた。

「ゲホッ」

さらにシッポの先端が顔にくいこむ。ながれたアゴを拳がとらえた。宙にういた身体をシッポが追い打ちをかけて、ピッコロは大きく飛ばされてうつぶせにたおれた。

「ピッコロさん!!」

悟飯の声にピッコロが顔をあげる。

「くるな！ 気を集中させろ!! ここからが……本気の戦いだ……」

ピッコロは足もとをふらつかせながら立ちあがった。そこへセルマックスが突進する。

パンチをくりだすセルマックスにピッコロも拳で応じた。

「ガフッ……」

相手の攻撃をくらいながらも、ピッコロの拳もまたセルマックスの頬^{ほお}にくいこんでいた。どうやっても倒れそうになかった巨大な怪物が一瞬身体をぐらつかせた。

だがそこまでだった。ピッコロの頬にシッポの先端が命中する。つづいて脇腹^{わきばら}にヒザが打ちこまれ、さらにアゴに蹴りがはいった。

「悟飯まだか？ ピッコロが死んじまうぞ！」

クリリンの声は悲鳴のようだった。

「……もう……すこし……」

悟飯はピッコロに目をむけたまま歯を食いしばるようにしてそう答えた。

すでに戦いは一方的なものとなりつつあった。抵抗できないピッコロを、セルマックスは好きに殴^{なぐ}りつづけていた。

それでもピッコロは倒れなかった。

「ぐ……ぐ……うわああ!!」

その光景にこらえきれなくなったゴテンクスが飛びだした。

「あ、バカ！」

それを追ってクリリンもセルマックスのもとへとむかう。

「うおおおおー!!」

怒りのオーラをまとったゴテンクスがセルマックスにつっこんでいく。だが単純な突進が通用する相手ではなかった。たやすくガードされ、途中からちぎれた左腕でたたきおとされる。

追ってきたクリリンはそれを見てブレーキをかけたものの、そのスキを見て蹴^{つか}りつけた18号が捕まってしまった。

「くっ……うわぁっ！」

「がっ！」

ふりまわされ、投げつけられた18号はクリリンと激突して落下していった。

クリリンたちを見おろしたセルマックスがはっと顔をあげる。いつのまに近づいていたのか、そこにはビームを最大にチャージしたガンマ1号の姿があった。

つぎの瞬間、最大出力で銃が発射される。だが、セルマックスはかかげた手で顔面をガードしていた。手はかすかにこげていたものの、ビームが通用していないのはあきらかだった。

ぼうぜんとなるガンマ1号をシッポが襲った。もはや戦う力が残っていなかったか、1号はあつけなく地面にたたきつけられていた。

「くそっ……」

悟飯は歯がみしていた。たすけにいくことができない自分自身のふがいなさに。

「ヤツをとめねば……」

うわごとのようにそう言いながら、ピッコロがふたたび前にでた。セルマックスがヒジをいれ、胴体に蹴^うりをはなつがそれでもさがらない。ヒザ蹴^うりを頭にうけ、のけぞったところにとどめとばかりシッポの先端部がハンマーのようにふってきた。

ガッ。

ピッコロの口もとがすりあがった。荒く息をつきながら、両手でうけとめたシッポの先を逆にセルマックスにたたきつける。

頭を打ちすえられ、バランスをくずしたセルマックスはピッコロにむけてビームをはなった。

ピッコロの左腕が消し飛んだ。

ふたたびピッコロにセルマックスがおそいかかった。

ピッコロの苦悶^{くもん}の声を聞きながら、悟飯は自分と戦っていた。

「このままではピッコロさんが……」

「まて……かならず……とめて……みせる……」

ピッコロの声が聞こえた。

「ぐっ……」

セルマックスはピッコロを岩にたたきつけ、さらにいためつけたあと、首をつかんで高くほうりあげた。力なく宙を舞うピッコロにむかって、セルマックスの手からビームがはなたれる。

何回も、何回も。落下することなく、空中にとどまりつづけるように。

^{すさ}
凄まじい爆発がピッコロをつつみこんだ。

「あ……あ……」

悟飯はそれをぼうぜんと見あげることしかできなかった。

ついにビームがとまった。宙をただよっていたピッコロの身体が、セルマックスのさしあげた手のうえに落ちてくる。

「や……やめろ……」

悟飯のみまもるなか、その手が光を^お帯びはじめた。

「やめろ！ やめろー!!」

悟飯は絶叫した。

セルマックスの顔がたのしげな笑みにゆがむ。ピッコロをささえる手の輝きがありました。

悟飯のなかでなにかの切れる音が聞こえた。

「くうう……うわあああああ—————!!」

悟飯のまわりが爆発した。いや——爆発したかのような輝きにつつまれていた。

凄まじい気だった。セルマックスが出現したときにもおとらない、いやむしろあれさえ安物の花火に思えるほどの。

セルマックスはそれを本能で感じとっていた。

爆発的な輝きが消える。そこには、銀色の長い髪を^{さか}逆立てた人影がたたずんでいた。

セルマックスはもはや関心がないとでもいうように、ピッコロをわきに投げ捨てた。

その目はまっすぐ悟飯だけを見つめていた。

「ガアアア！」

セルマックスが走った。走りながら拳を引き、悟飯にむけて^{こん しん}渾身のパンチをふりぬいた。

悟飯はそれをかわそうとしなかった。

パンチが悟飯に触れた瞬間、文字どおりパンチの軌道^{き どう}の先にあるものすべてが爆発した。空気は舞いあがった土煙で白濁し、爆発の余波が暴風となって吹き荒れた。

その風で土煙がふき飛ばされる。

セルマックスのくりだしたパンチの前には、しかし、平然と立つ悟飯がいた。

ガードすらしていない。

にもかかわらず、悟飯の姿はついさっきとすこしもかわらなかった。

「……この程度か」

腹の底が冷えるほど静かな声で悟飯は言った。

「グ……ググ……」

セルマックスは動かなかった。いや、動けなかった。

「こんどは、ボクの番だ」

悟飯は左手でセルマックスの拳をおしのけると、地面を蹴って飛びあがった。

ズボッ！

セルマックスの腹に悟飯の蹴りがくいこんでいた。その一撃で、人間の数倍はある巨体が岩を打ち砕きながらうしろへ大きく飛ばされていった。

セルマックスがつつこんでガレキと化した岩の前に立って、悟飯は静かに相手を見た。

「オオオオオ……グワアアア！」

怒りの声とともに、セルマックスが立ちあがる。

そのようすをながめていた悟飯の目がすうっと細められた。

土煙がけふるむこうで、セルマックスのさしあげた手の先にぼんやりと暗い球体が出現した。と、それは瞬時に巨大化して、大陸をおおうほどの大きさに成長する。

天をうめつくすほどの黒い球体を見あげて、悟飯は挑戦的な笑みをうかべていた。

その悟飯の目の前で、球体は一瞬にして数十メートルほどの大きさにまで縮んでいた。

極限まで圧縮され、漆黒に染まった球体は、近くにいただけで押しつぶされそうな圧力を感じるほどだった。しかもセルマックスのさしあげた右手の先にうかんだまま、さらにまわりのエネルギーを吸収しつづけている。

それを目にしても、悟飯が驚きや恐れを感じているようすはなかった。むしろ、かつて経験したことのない戦いへの期待にワクワクしているようにすら見える。

そのときだった。

ムチのようにしなるなにかがのびてきて、セルマックスの頭と腕にからみついた。

ピッコロの腕だった。

「悟飯！」

「——ハッ！」

悟飯の顔から冷たい笑みが消えていた。

ピッコロの言葉がよみがえる。いま、悟飯のしなければならないことはなにか。

「グウウ……」

セルマックスは、うなり声をあげながらピッコロをたぐりよせた。巻きついた腕をひきはがそうと、ピッコロの頭をふみつける。

と、セルマックスの目が見開かれる。

すぐ目の前の残骸のうえで、悟飯が気を集中しはじめていた。額にあてた指先にむけて、電光のような気があたりを走りまわりながら集まってくる。

「グググウア！」

セルマックスは恐怖の表情をうかべていた。翼をふるわせ、飛びあがって逃げだそうとする。それに引きずられながら、ピッコロはいらだたしげに言った。

「くう……おとなしくしてろ！」

言いながら、左腕を再生してセルマックスの足にからませる。なおも逃げようともがくセルマックスにふりまわされながら、ピッコロは悟飯にむかってさげんだ。

「悟飯ー！ 撃て——！」

高度をあげるセルマックスにあわせて、悟飯は基地のメインタワーのうえに移動していた。

全身にまとった気が、前に突きだした二本の指先に集中していく。

「魔貫光殺砲！」

大地をふるわせる声とともに、悟飯の指先から恐ろしいまでに密度の高められた気功波がはなれた。

「ガアアアアア」

それを目にしたセルマックスは、悲鳴^{ひ めい}とともに手にしたエネルギーボールを投げつけた。

だがセルマックスが最大の力をこめたエネルギーボールも、悟飯のはなった魔貫光殺砲の前にはシャボン玉のようなものだった。白熱する気の奔流^{ほんりゅう}に触れたとたん、ボールは無残^{む ざん}にゆがんでばぁんとはじけてしまう。

DRAGONBALL SUPER



ピッコロはなおもあがきつづけるセルマックスをはがいじめにしながら、まきつけた手で強引^{ごう いん}に顔をあおむかせた。
魔貫光殺砲がセルマックスの頭を撃ちぬいたのは、まさにそのときだった。

「アアアアアアアア.....」

ピッコロの肩口ぎりぎりを通して、強烈な気のながれは空のかなたに消えていった。

額からうえをえぐりとられたセルマックスは、断末魔^{だん まつ ま}にかたまった顔のままクレーターの底へとおちていった。

「やった.....やったぞ.....!!」

戦いをみまもっていたクリリンが喜びの声をあげた。すぐとなりで18号が顔をしかめながらもやはり笑顔をかかっている。
そこへ飛んできたガンマ1号が、せっぱつまった声でさげんだ。

「爆発するぞ！ はなれろー!!」

クリリンたちがあわててその場をはなれる。ピッコロがガレキにうまったゴテンクスの足をつかんでひっぱりあげ、加速した。

クレーターの底に横たわっていたセルマックスが、とつぜん風船のようにふくらむのが見えた。

その巨体から何本もの光がもれてたつぎの瞬間、セルマックスは巨大な火球となって大爆発をひきおこした。

おしよせた爆発の輝きが、逃げるピッコロたちを一瞬でのみこんでいった。



セルマックスの自爆は、クレーターにのこっていたものすべてをふき飛ばしていた。

飛行機でパンとともに距離をとっていたブルマは、爆発がおさまったクレーターの上空を旋回^{せん かい}していた。

「よかったー、早めに逃げておいて」

「あっ、あの怪物がいない」

窓から外のようなすをうかがっていたパンが声をあげる。

「みんな、だいじょうぶかなあ.....」

パンの見おろす先に動くものがあつた。

それは18号と、足をつかんでひっぱりあげられるクリリンの姿だった。ピッコロや悟飯たちもその近くに立っているのが見える。

「みんな無事のようなね！」

土くれやガレキをはらい落としながら、ガンマ1号が立ちあがった。

その下からドクター・ヘドが姿を見せる。ヘドが心配げに見おろしているのは、よこたわったまま動かないガンマ2号だった。

着陸した飛行機から飛びおりたパンは、悟飯とピッコロの姿をさがしてあたりを見まわした。ただよう煙のむこうにならんで立つ影を見つけて、笑顔をかかえて走りだす。

「——オレンジいいですね」

悟飯の声が聞こえた。

「おまえもいいじゃないか。お？」

「ん？」

すこしずつ薄まっていく煙のむこうで、ピッコロの声がそう言いながらこちらを見るのがわかった。同時に悟飯もパンのほうに顔をむけた。

「げ……」

パンは思わず足をとめていた。ピッコロはなんだかひどく大きくなって、しかも顔がこわい。悟飯にいたっては髪の毛が逆さにおいたホウキのようにになっていた。

感じられる気はいつものふたりのものなのだが。

と、さあっと風がふきつけ、通りぬけていく煙に一瞬ふたりの姿が隠される。ふたたび煙がはれると、そのむこうからあらわれたのはいつもの悟飯とピッコロだった。

パンは笑顔になって悟飯にむかってかけだした。ドン、と軽く衝撃音を響かせながら。抱きつかれたいきおいでおもいきりひっくりかえりながら、悟飯とパンは心から笑うのだった。

それを満足げに見やったピッコロは、すこしはなれた場所で地面にうずくまるガンマ1号に気がついた。

ピッコロにむけてガンマ1号が手をあげる。ピッコロもそれに手をあげて答えた。

「ヤツらがいなければ倒せなかった」

「あんなセルのパケモノ、父さんやベジータさんがいても倒せなかったかも」

ピッコロのうしろで、パンを肩にのせた悟飯がやはりガンマたちを見ながら言った。

「だから平和に見えても油断^{ゆだん}はするなと言ったんだ」

ピッコロの言葉に悟飯はもうしわけなさそうにうなだれる。

「そうですね……すいません」

ピッコロはパンをおろすためにかがんだ悟飯を見おろした。

「ところで、さっき撃ったのは——」

「魔貫光殺砲……のつもりでしたが」

悟飯はピッコロを見あげた。

「撃てたのか？」

悟飯は照れ^て笑い^{わら}いをうかべて立ちあがった。

「こっそり練習したことが」

「上出来だった」

ピッコロはむつりとそれだけ言うと、悟飯に背中をむけた。

ヘドは言葉も発さず、ただガンマ2号の手をにぎっている。1号もまた黙ったままじっと2号を見おろしていた。

かすかに息をはく音とともに、2号の身体からゆっくりと力がぬけていった。ヘドが思わず身を乗りだすが、2号の目はもはやなにも見てはいなかった。

やがて音もなく2号の顔が光となってくずれていった。それはまたたく間に全身にひろがり、ヘドのにぎる手が、そして腕が足

が胴体が消えていく。

飛び散る2号のかけらを見あげるヘドの顔は、悲しみにみちていた。

「死んだのか？」

ピッコロだった。散りゆく光を見送りながら1号たちのもとへと近づいてくる。

「ああ。せったくたすけてもらったのに残念だった」

「なにをしたんだ、あのとき」

1号はぬけがらになった2号の服を手にしながらかえた。

「残ったエネルギーを一気につかったんだ」

「おかげでアイツの攻撃力がおちた」

言いながら、ピッコロはヘドの前に腰を落とした。手をのばしヘドの肩にふれる。

顔をむけるヘドに、ピッコロは言った。

「スーパーヒーローだったな」

ガンマ1号はピッコロを見た。

「おまえたちこそ……」

ヘドはガンマ2号のつけていたグローブをにぎりしめながら言った。

「ありがとう。おかげで世界はすくわれたよ」

ヘドはうつむいた。

「ボクのせいだ。ボクがセルマックスをつくった。2号はボクの責任をとって……」

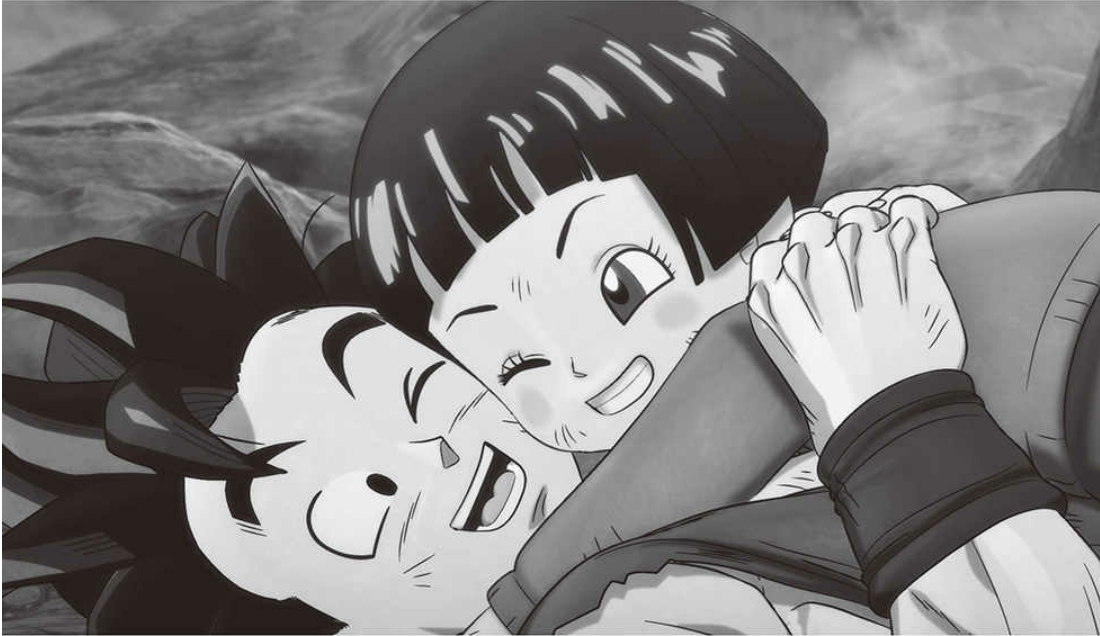
そこへ近づいてきたのはクリリンと18号だった。

「おまえもヤツらに利用されたんだろ？」

「いや、なんとなくわかってたんだ……ボクは研究費が……ほしくて」

クリリンはさらに言おうとしたが、18号につつかれて結局なにも言えなかった。

DRAGONBALL SUPER



「それにしても、あんたよく助かったわね」

こんどはブルマだった。

「ボクはすこしくらいの衝撃にならたえられるように皮膚^{ひふ}を改造したんだ」

ブルマは気持ちわるそうに言った。

「皮膚を!? げげ、それってちょっと引くわー」

「小ジワとるのも改造じゃん」

まるまるとしたゴテンクスがすこし離れた場所からそう言った。

ブルマがこわい顔でゴテンクスを見る。

「いま言ったのトランクスでしょ！」

ゴテンクスがぎくつとなる。とたん、まるでねらったかのようなタイミングで、フュージョンがとけた。

顔をひきつらせてトランクスを指さす悟天^{ごてん}にブルマが言った。

「そういえば悟天くん、今日のことはチチさんにはナイショよ？ こんな戦いにさそったなんてバレたらコロされちゃうわ」

「ハイ！」

悟天は背筋^{せすじ}をのばして敬礼した。

ブルマはひとつため息をついてヘドを見た。

「ドクター・ヘドだっけ？ これからどうすんのよ」

ヘドは立ちあがり、うつむき加減^{かげん}に答えた。

「ガンマといっしょに警察に出頭します」

クリリンが顔を青ざめさせる。

「いやいやいやいや冗談じゃない、警察じゃおまえたちを留置する自信がない」

「なににもなかったってことでいいんじゃないのか？」

おくれで立ちあがったピッコロがヘドを見おろして言った。

「おまえたちはいいヤツではなかったが、わるいやツでもなかった」

ピッコロのその言葉に、ヘドとともに立ちあがっていたガンマ1号がうなだれる。

みじかい間があって、ヘドが口を開いた。

「じゃあ……ボクとガンマをカプセルコーポレーションでやとっていただけませんか？」

クリリンがすこし驚いた顔をする。18号が顔色をかえた。

「はあ？ ふっざけんなよ！ てめえ、よくそんなことが言えるな！」

身を乗りだしてくっつかかる18号を、クリリンが必死でなだめようとする。

そのさわぎをしりめに、ブルマはなにごとかじっと考えこんでいた。

「……あんた、美容的なことってどうなのよ？」

とつぜん水をむけられて、ヘドは驚き顔でブルマを見た。

「美容って……？」

「ちょっと」

ブルマはヘドを指先でさしまねいた。

やってきたヘドに、ブルマは顔を近づけて小声で言った。

「^{はだ}肌を若くする、とか」

「……ああ、まあとうぜん生物学的なことでもいいですし、医師の免許ももっていますからそんな程度のことは」

ブルマはヘドから身体をはなすと、真剣な面持ちになって言った。

「なるほど。あんたのスゴイ能力は会社としてもたしかに魅力的ね。それに——」

ブルマはガンマ1号を見た。

「超優秀なガードマンか。どこかでまたヤバイことをたくらまれてもこまるしね。どう思う、ピッコロさん？」

「オレは反対しない」

ピッコロはヘドからブルマに視線をうつしながらこうつづける。

「ブルマにあんなことでドラゴンボールが使われるより……な」

「うるさいわね！」

ブルマはムツとした顔でピッコロにむけてから、ヘドにむきなおった。

「じゃあきまり！ やとってあげる」

ヘドの表情がぱっと明るくなった。背筋をのばし、ブルマを見あげる。

「ありがとうございます。ほら、おまえも」

「ありがとうございます！」

ヘドにうながされ、ガンマ1号はヘドといっしょにブルマにむかって頭をさげた。

それを見ていたピッコロは、ズボンをひっぱる手を感じて見おろした。

パンだった。パンはピッコロを見あげてちょっと笑ってから、両腕をひろげてむこうへと走っていった。

それからくるとふりかえり、にぎった両手を脇にあててからすこし腰を落とした。

パンの髪の毛が重さをうしなったようにふわりとかびあがり、それにおくれて全身が地面をはなれて宙に舞いあがる。

悟天が、トランクスが、クリリンが、18号が、そしてドクター・ヘド、ガンマ1号にブルマ、ピッコロ、そして悟飯がみまもるなか、パンは飛んだ。澄んだ夕方の空を背に、弧をえがきながら、どこまでも。

ピッコロは満足げに見あげながら、言った。

「あしたからは、つぎのステップのトレーニングだな」

「うん！」

高く高く宙を舞いながら、パンはピッコロに心からの笑顔で答えた。



「ハア、ハア、ハア、ハア……」

長い長い^{くみて}組手もようやくおわりが近づいていた。

悟空は立っているのがやっとといったようすで構えをとった。

対するベジータもまた、あきらかに足もとをふらつかせながら拳を持ちあげた。

「ガァ！」

先に動いたのはベジータだった。ハエのとまりそうなスピードで、悟空にむかってへろへろの拳を突きだす。

それがあたったとたん、悟空はグラリと姿勢をくずしてあおむけにひっくりかえった。

「ハアツ、ハアツ、ハアツ、ハアツ……まけたあー！」

悟空の声からはくやしさがまったく感じられなかった。むしろうれしそうですらある。

優雅にお茶をたしなんでいたウイスが、その声に顔をあげた。

「あっはい、ベジータさんの勝ちい〜」

いつものように緊張感のかけらもない声でそう宣言する。ビルスはまるで関心がないようすで、イビキをかいてすっかり寝こんでいた。

「……やっ、やった……っつ……ついに……カカロットに……勝ったぞお！」

息もたえだえにそう言って、ベジータはガッツポーズとともにひっくりかえる。

「ゼエ、ゼエ、やったぞ……」

「へへッ」

ベジータの声に、悟空も満足そうに笑った。

「やれやれ、やっとおわったか。パッカじゃないの、アイツら」

チライがうんざり顔で悟空たちを見る。

「なあブロリー」

ブロリーといつのまにかその隣に座っていたレモは、悟空たちを見て男泣きに肩をふるわせているのだった。

チライは鼻筋にシワをよせ、両腕をふりあげた。

「男って……くだらない！」

「あら？」

やれやれと立ちあがったウイスは、杖頭の玉が点滅していることによりやく気づいた。

「なにか御用でしたか、ブルマさん」

ウイスが杖にむかって答えると、待たされたわりに不機嫌そうでもないブルマの声がかえてきた。

「んもう、おそいわよウイスさーん」

「どうももうしわけありませんでした。ところで、なにかおいしいものでも？」

「う〜ん、まあね。でも料理がさめちゃったから、またこんどねー。じゃ」

光の消えた杖を見かえして、ウイスは不思議そうに首をかしげた。

「あら。なんだったのでしょうか……」

というわけで、今回のお話はここまで。

ドラゴンボールをめぐる冒険は、もちろんまだまだつづく。

つぎはどんな事件がまっているのか、それはまたのおたのしみ。

■初出
劇場版 ドラゴンボール超 スーパーヒーロー 書き下ろし

この作品は、2022年6月公開の映画『ドラゴンボール超 スーパーヒーロー』をノベライズしたものです。

鳥山明 Akira Toriyama

あい ち けんしゅうしん にほん だいいゅう まん が か ドクター
愛知県出身。日本を代表する漫画家。「Dr.スランプ」「ドラゴンボール」など、世界的大ヒット漫画を生み出し続けている。

日下部匡俊 Masatoshi Kusakabe

ねん う とうきょうと しゅうしん かず おお さく ひん て しょうせつ か だいいゅう さく スーパー げきじょうばん
1964年生まれ、東京都出身。数多くのノベライズ作品を手がける小説家。代表作は「ドラゴンボール超ブロリー」や劇場版「NARUTO」シリーズなど

ジャンプジェイブックスDIGITAL

〔劇場版 ドラゴンボール超〕 スーパーヒーロー

著者 鳥山 明・日下部匡俊

© 2022 A.Toriyama / M.Kusakabe

©バード・スタジオ／集英社 ©「2022 ドラゴンボール超」製作委員会

2022年6月30日発行

この電子書籍は、ジャンプジェイブックス「劇場版 ドラゴンボール超 スーパーヒーロー」
2022年6月19日発行の第1刷を底本としています。

田圭子〔バナナグローブスタジオ〕

左藤裕介〔STICK-OUT〕

・葉佳余

i子吉久

株式会社 集英社

01-8050

東京都千代田区一ツ橋2丁目5番10号

-3230-6080(読者係)

株式会社ICE

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、インターネット上に掲載すること、および有償無償に関わらず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。なお個人利用の目的であっても、コピーガードを解除しての複製は、法律で禁じられています。